都市戦記・妖魔アルディーン 3

香港魔界行

ホンコンまかいこう

井上ほのか



teen's heart

夜ふけの酒場に、どこからともなく現れた、美貌の少年。彼が手にした六絃琴から、うっとりするような音色が流れだすと、人々は狂ったように、殺し合いをはじめた!!

――香港と五星家の滅亡を企む、韻麗王。目的達成のための血のいけにえを求め、今夜も彼は街をさまよう。六絃琴を手にして……。

冷酷で邪悪な敵を相手に、アルディーンの妖力は、どこまで通用するのだろうか!?

ますます盛り上がる、香港三部作第2弾!!

teen's heart
X95-13

講談社X文庫

都市戦記・妖魔アルディーン3
香港魔界行（ホンコンまかいこう）

井上ほのか



目次

第五章　魔斑のある少女
——騎士エリックとエディランド……8
第六章　賑わう街角で
——新界新総督ミハイル……86

第七章　羽根の護法（ごほう）
——呪術士（じゅじゅつし）キュロスの秘密……163
第八章　香港（ホンコン）最強の剣士（けんし）
——笑うセリオス……225
ページをめくっていくと、
あなたは『あとがき』に出合う……298

前巻までのあらすじ

青い海にうかぶ三日月に似た自治区・香港。主として2つの島に分けられ、三日月の上部を本島と呼び、下のほうの島には〝新界〟の街がある。

新界の街の住人には、しばしば魔術の素養をもつ者が生まれ、彼らはクリスタルと呼ばれる呪具により、魔術の使い手となることが可能である。

――香港の魔力は、黒の呪法の存在を禁じている。遠い昔に5人の偉大な術士たちが、すべての魔法をあわせて、この地での邪悪な術を封じる魔法をかけたのだ。封印は長く続いて……香港の魔力は繁栄した。

5人の術士たちの末裔は、香港を代表する五名家――五星家――に。魔力と呼ばれる力は、子孫たちに失われて久しいが……5つの最古のクリスタルは、各家に伝えられ、4年ごとに行われる元宵節という祭りの夜、五家の当主が捧げて集まる習わしとなった。それにより、古い封印を保つのだ。もっとも、封印の存在と役割は、人々の記憶から失われてしまっている。

32年前のこと。けたはずれの能力をもつ術士、イリヤが封印の秘密を知った。

彼女は封印を破り黒の呪法を復活させんと、暗黒のクリスタルをつくり始めるが、完全になる前に、五星家の一家韻の当主、韻大人の手で殺害された。

イリヤの死にぎわの呪いで、韻大人の一子麗王が、ひそかにイリヤのもつ魔力を受け継ぎ、より邪悪な術士として黒のクリスタルの完成を企む。

――連邦歴211年。元宵節のめぐるその年に……香港の海上に魔界船があらわれ、異様な殺戮をくりかえした。麗王のひそかな手による船だ。いかなる武器と護法で守った船も逃れることはできない。

――香港の人々が、あとわずかで伝統の元宵節をあきらめようとした時だ。2年の航海をへて、故郷に帰ってきた者がいた。五星家の当主の一人、レン・巧猿だ。彼は封印の秘密は知らないものの、人々の絆が傷つくことに怒りを感じ、なんとしても祭りの続行を決意。それには、魔船の術士を倒さねば……。

――生来の策士でもあるレン・巧猿が助力を求めたのは、香港のもう一つの神秘と呼ばれるレーテア騎士団。

はるか故郷を離れて新界の孤島に本拠をかまえる彼らは、特異な掟と最強の戦闘力を誇り、また香港の呪力をもしりぞける異能をもっていた……。

イラストレーション／瀬口恵子（せぐちけいこ）

都市戦記・妖魔アルディーン3　香港魔界行

第五章　魔斑のある少女――騎士エリックとエディランド

――連邦世界の自治区・香港において、4年に1度、いまも行われる元宵節という大祭がある。

その夜、人々は輝く海を見る……旧世界の昔から元宵神殿と呼ばれている暗礁より、巨大な光の柱が立って空に消えるのを見るのだった。

そのはじまりは、はるか昔の、このような光景だ。いまはもう知る人もないのだが……。

……時がはじまったばかりのように感じられる明け方の渚を、五つの人影が歩いている。彼らはそれぞれ力のある術士であり、のちに五星家と呼ばれる家柄の始祖となるのだ。連邦の歴史の、はるか以前のことだった。まだ世界は術と力に満ちている……。

一人の術士が言った。

「この海を見ろ、これほどの魔力を宿した場所を、ほかには知らない」

「このなかから、邪に通じる力だけを封じることはできないだろうか……？」

年若い一人の術士が、夢見るようにつぶやいた。
「そうすれば、この地は術を使う者たちの繁栄の街ともなるだろう」
人は賢くて愚かなもので、呪う力が身近にあれば、いつかは誰かがその引き金を引いてしまう。そうやって、どの街も滅びていったのだ。
だが、はじめから黒い技が封じられているなら……。
「一人ではできない。だが我らすべての力を合わせて、その封印に捧げればできようか？」
5人の術士たちは、静かに顔を見合わせた。
「そう……できような」
それぞれに想いを決める長い間があってから、一人の術士がうなずいて、懐から輝くクリスタルをとりだして空にかかげた。
「我らのもつ魔力のすべてを、この海に捧げて封印を築くことができる！　それによって我らは力を失うが、我が子孫たちが長く繁栄する美しい夢を得るだろう」
「魔術が長く愛される街が生まれるだろう」
うなずいて、もう一人の術士が自分のクリスタルをかかげた。
「だが……もし外の世界から、黒い魔力が襲ってきた時にはどうする？」
べつの術士が訊ねた。
邪に通じる黒の術を封じてしまって、そのあとに外の土地から邪悪な術士か魔物が、街を

狙ったなら……血を流し合う技をふさがれた術士たちに、なにができる？

「それでは私は、一つの強い武器を遺してやろう!!」

またべつの術士が応えて、ひとふりの刀を空中から現してみせた。

紅のクリスタルが刃になる刀だ。

「仇魔刀と呼んでいる。強い術具だ……それ自体、ある種の意志をもって魔を狩るほどだ。術士の手で祭られていなくとも、永く力を失わない……呪術の心得のない者の手にあっても、変わらずに魔を討つだろう」

……いまや5人の術士たちは、おのおのクリスタルを渚で高くかかげている。

「不変の封印は我らの手にもあまる。数年に一度は新しい力が必要だ」

「祭りだな……のちの人々に守らせねばならないだろう」

「祭りと封印の意味を伝えなくてもよいものか？」

「いや！　知らせぬほうがよい!!　理由がわかっていれば、封印を解こうとする者がきっと現れるに違いない」

5人の影が立つ渚から、少しずつ……海が光を帯びてきている。

底深くから輝くような光はしだいに広がって、島全体を包みこむようにも見える。

これこそが、この海の魔力から黒に通じる力だけを除く印であり、こののち大いなる遺産となるクリスタルがあるかぎり、封印は護られる。

――五つのクリスタルがあり、人々が祭りをなすかぎり。

ずっと黙っていた最後の術士が、そこでかすかな笑みをうかべて、ほかの者たちを見渡した。

「だがわかっているな？　それでもなお変えられない定めがある……」

その時、五つのクリスタルから生まれた光は、輝く波を広がりつつ沖へむかい、一つの暗礁で一点になると、駆け上るように天をめざす！

光が空に達する。言葉の最後の部分は、こだまのように宙にひびいて、きらめきながら消えた。

「……永遠に続く術などはないのだ」

そして連邦歴211年。香港。

――香港の端にあたる暗礁の一端で、轟然たる火柱があがった。

千人会議が終了して数日たった。この年に行われる元宵節はあと半月とせまっている。

その日、多くの呪具が新界で突風にぶつかった鏡のように割れ、瑣末なクリスタルのいくつかは粉々になった。それほど激しい妖気が一時に現れた。

新界にいる百数人の術士たちは一様にその意味を知った。

〝黒い幽霊船〟の本拠地を隠していた結界が、突然、解放されたのだ！

——なぜ!?

香港の内海の南端。新界よりもむしろ本島に近い暗礁群の一角……その場所は、いまやもっとも力の弱い術士にさえあきらかだった。

「よろしいのですか？　これで〝船〟の寄港地が香港じゅうに知られたことになりますが……」

「よい、この先はもう幽霊船は使わないから」

韻麗王は白い頬に凄みのある笑みをうかべて答えた。

——香港、本島からの湾を見晴らす五星家・韻長官の邸宅の奥……跡継ぎの一子、麗王の私室であった。

絹の糸のような雨が、朝から降り続いていた……。

韻麗王は今年で16歳。本島でたぶん、いちばん美しいと称えられる美貌の子供であり、五星家・韻の相続人だ。そのほかに六絃琴の名手としても知られている。

夏虎はその付き人として昔からおぼえられてきた男だった。

——香港の夜の海域を恐怖に陥れた〝幽霊船〟をあやつっていたのは彼らである。

この少年と付き人は、見かけどおりの者たちではないのだ……彼ら以外には、まだ誰も知らないことだったが。

五星家・韻長官の嫡子として生まれた麗王は、じつは韻が32年前に殺害した魔女イリヤの呪いによって生命を得た者で、生まれながらにして邪悪な術士であった。

夏虎と名乗る付き人の身体は……もう32年も前に死んでいる。

――麗王のもつ黒の魔力は、いま新界のどの術士よりも強く、彼の張った強力な結界はこれまで魔の船の位置を、ほかの術士たちの必死の探索から完全に隠していた。

だがこの日、麗王は自分から結界を解いた……もはや本島・新界の両当局と、香港警察は幽霊船の本拠を知ってしまったに違いない。

「かまわないさ、夏虎。なぜならもう、幽霊船も必要ではなくなったからね。それに状況も変わってきた」

そして信じがたく美しい笑みを見せると、どこかから艶のある1個の漆黒のクリスタルを呼びだして、手のひらに受けた。

「クリスタルがここまで育ったのなら、もう元宵節も恐れることはないのだ！」

――麗王が幽霊船をあやつっていた目的は二つである。

次々に襲い、大勢の者を殺した。その理由の一つは麗王が生来、血を好んだことだ……犠牲者の血は、麗王の魔力と身体に貴重な活力をそそぎこんだ。

だが、いま一つ……さらに強い動機があった。

――邪悪で強力な術士である韻麗王が、たった一つ恐れたもの。

それが4年に1度のあの祭り……元宵節である。

「元宵節は香港の邪をはらうための儀式、私にとっては呪いだったよ……」

少年はひどく冷静に言いつつ、かたわらの六絃琴をとってかろやかに弾きはじめた……クリスタルはいま空中で支えもなく静止している。

いにしえの、五星家の5人の術士たちが香港の海に眠る魔力の半分を封じてしまった。

魔力の邪に使われる半分を……。

「だから、いま香港ではふつう、生命と引き換えでもなければ呪殺や、黒に属する魔術は使えない」

旧世界を思わせる魔力の持ち主が新界にはまだ何人も残されているが、力は占いや護法にかぎられていた。

32年前……不世出の術士であった魔女イリヤは、触れるべきではない邪悪な魔力に憧れ、かろうじて黒のクリスタルのかけらを手にいれたが、完全にならないうちに五星家・韻長官の手にかかって殺されてしまった。

――イリヤはきわめて賢い……力の強い術士であって、元宵節の夜、華やかな祭りの陰に隠れた封印の秘密をさぐりあてたのも彼女であった。

韻長官の一子・麗王の生命は、そのイリヤの死に際の呪いで授けられたものであり、はじめから邪悪な黒のクリスタルとともにある。

巷のよく知るところでは、韻家の麗王は美しいがやや病弱で、人前にもあまりでてはこないとか？　そう、4年ごとに麗王の生命力は弱くなる……禁じられた黒の呪術に使われる力が、この少年の心臓を動かしているのだから。

——動く死者を満載した船が、夜ごと……香港の海域を獲物をもとめてさまようのは恐ろしい。

「私にはそれが必要だった」

元宵節の夜祭。人々は祝うための船を海にだすのがしきたりだ……だが誰にも追えない怨霊船の恐怖が、この年の海からあらゆる船を追いはらう手はずであった。

それは思わぬ、余波も生んでくれた。すなわち、

——本島と新界にわかれた香港の二つの島で……呪術士はこれまで、いつも新界の血から生まれていた。

だから悪魔のような船の術士も当然、新界からだと人々は自然に——新界の者でさえも——思ったのだ。幽霊船の背後に術士の存在が確実になってきた時、香港警察は新界の術士と民間の人々に、手がかりを告げてほしいと千回も呼びかけていた。

「だが、どれほど訊ねても、新界の者が術士の名を言えるわけがない！」

誰も知らないのだから。

本島の人々は強い疑惑をもちはじめ、新界の中でさえ人々は疑心暗鬼となりつつあった。

――その時、香港の人々の前に二つの道があった。

一つは、あくまでも邪悪な船を追い、強大な黒の魔力をもつ術士と戦い、これを倒すことである。香港当局で最強の部隊を率いる新界の総督、ウィリアム・几城はこの道を選び、嵐の海に消えてしまった。

そしていま一つの道は、新界を憎み続けていた麗王の父、本島の韻長官の手によって示されたものだ。

疑惑と恐怖に耐え切れなくなった長官は、新界の街に火を放っても魔の船の術士をあぶりだせと、最高決定権を持つ市民会議（通称・千人会議）の席ではかったのだ。

かつて魔力が悪とみなされたことのない香港で、事実上の魔女狩りだ。そのために彼は自らの手で、セントラル・ボードの傭兵を――ひそかに凶悪な経歴の男ばかりをえりすぐって――集めもした。

〝彼らに全権を与え、新界の強制捜査を！〟

先日、本島に集まった委員たちは、すんでのところでそれを許可するところだったのだ。

「あの野犬たちが新界に入れば、すぐに誰にも抑えきれなくなった。術をもつ者も一般の市民もみさかいなく、殺しや略奪がはじまっていただろう。すこし楽しみだったのだが、おしいことをしたね、夏虎？」

透き通った瞳のままで、麗王がうれしげに笑う。邪悪な呪詛によって生まれたこの少年に

は、生まれつき感情が欠落している。〝韻麗王〟としての仮面をきわめて上手に見せてはいるが、人としての喜怒哀楽は実際にはもたない……人格というよりも悪霊に近い。

心から笑うのは血を見る時だけだ。

ちょうど元宵節を前にして二つの香港に血で血を洗う争いがはじまっていたはずなのだ。

――そうなれば元宵節の秘蹟は失われていたはずだ。

なぜなら、いにしえの5人の術士の血を継ぐ五星家の率いる本島と、魔力の残り火をもつ新界……二島の心が祭りにおいて一つでないかぎり、光る海の封印は起こらないのだ。

「飛び入りのレン・巧猿のおかげで、思いもかけない成り行きになったが……企らみというのは、時に思うようにいかないものだな」

麗王は笑いやんでから、軽く肩をすくめた。

――千人会議には、ほかに選択の余地はないはずだった。

異常な殺戮を続ける幽霊船は、邪悪で強力な術で守られている。新界のどの術士の〝力〟も通用しない。新界総督の守備隊までが破られた以上、もはや対抗できるのは韻長官の私兵たちだけと思われた。

会議がはじまる時点で、麗王はもうなにもせずに新界の破滅が見られたはずなのだ。二つの香港が血を流しあう無残なありさまを！……同じ五星家の一家の当主、レン・巧猿がこの街に帰ってきたあたりから、企らみの歯車がどこか狂いはじめたのだと思う。

まず新界総督の部隊が破滅した夜。相続人のミハイル・几城も捕らえて、五星家の一つを根絶やしにできるはずだったのだが、たまたま通りかかった巧猿の船によって邪魔がはいってしまった。

「しかも奴は千人会議の当日、あらたな加勢としてレーテア騎士団をともない、議場に飛び込んできたのです！」

夏虎がうなるような憎しみを込めて、瞳をぎらつかせた。

香港の別島に本拠をかまえる最強の騎士団レーテア。香港の住人の目にも神秘に映る彼らは、いかなる傭兵団にもまさる戦力のほかに、魔力とはまたべつの異能を身につけている。

「150年このかたない、シャトル機で戦うほどの大会戦はべつとして、接近戦でなら彼らに勝るものはないという……」

――きわめて誇りたかく、従うのは彼らの王家の言葉のみとか。

「奴めが……いったい、どうやって説得したのだろうな？」

ふと、麗王が不思議そうに首をかしげていた。

レン・巧猿という若者は、五星家の当主であっても、これまでそれほど輝かしい評判などないはずだった。香港仔らしく陽気で享楽的だが、軽はずみな言動がいささか多すぎた。

韻長官などは、かねてから軽蔑しきっていたはずだったが……。

「だが人というのは土壇場にならないと本性がわからぬ時もある。ククク、レン・巧猿

……意外に油断のならない男だったようだな。よい、見ておれ!!」

瞬間、凄まじいほどの冷気が麗王から押し寄せた。

「こざかしい巧猿、よくもこの麗王の邪魔をしてくれたな！　なんの魔力ももたぬくせに、生意気にも新界の命乞いか？　ククク、いいさ……いまに見るがいい！」

お前がわずかにのばした香港の生命は、すぐにもっと残酷な手でひき裂かれることになるだろう。よけいなおせっかいをした報いも、その血で思い知らせてやる！

――その白い顔には笑顔をうかべたまま、腕の六絃琴が恐ろしい音をかなでた。

ひざまずいていた夏虎がここで面をあげて、訊ねた。

「さて、どうなさるおつもりですか？」

「どうもせぬ……いや、したくとも、いまはどうすることもできない」

麗王はふたたび六絃琴を鳴らして、薄く笑った。

「夏虎も知っているだろう？　これから元宵節が近づくにつれて、私の魔力は徐々に衰えていく」

――しばらくの間、目眩まし程度の弱い術しか使えなくなってしまうのだ。

巧猿や香港の追っ手たちには、けっして知られてはならない秘密であった。

幽霊船の……配下となっていたのは、じつは生ある人間ではなくて、惨殺された犠牲者の遺体が麗王の魔力により、ふたたび動かされていた〝死人返し〟の亡者だったが、これもい

まは寄港地の洞窟でサメなどの食い荒らすままにされていた。

「結界もいずれは、完全でなくなってきたかもしれない。〝船〟も……水夫を動かすことができないのだから、くれてやれ！　はかない手柄にでもするといいさ！」

一瞬、ドクロの鳴るような声で少年はカラカラ笑った。

〝こちらはもう、クリスタルがこれだけの姿になっているのだから！〟

たしかに黒いクリスタルは――その色は香港では異常なことだったが――いっそう輝きを増し、より強い力の存在を夏虎の目にも感じさせた。

黒のクリスタルは、人の魂を食って育つ。

「人ならば誰でもいいというわけでもない、まず強く……そして、どこかで並外れた力をもつ者の魂でなくてはならないのだ。愚かな並の者どもでは、死人返しの亡者にでもするのがせいぜいさ」

これまでクリスタルが満足するほどの魂はただ二つきりだった。

一つはいま目の前にいる夏虎で、32年前には魔女イリヤの一の部下だった者だ。

あとの一人は、嵐の夜に麗王のワナに落ちた几城総督だ。麗王の眩術で二重の罠にかかって、無残な人鬼となりはてている。

――クリスタルに魂を食われた者は人鬼と呼ばれる最強の魔獣となる運命だった。

香港警察が、もしも手柄をはやり、

「寄港地にそのまま押し寄せてくるようなら、おもしろいぞ！　なにしろあそこにはいま几城が待っている」

人鬼となってまだ日が浅い几城は、人語も解さず……ただ妖魔の性に従って殺すばかりだ。麗王のクリスタルはまだ完全ではないが――それにはまだ二人ばかりの魂がいった――勇敢で高潔だった几城総督を手に入れたことにより、強力に育ってしまった。

それは運命だったのだろうか？

「天はどうやら我々の味方らしい。クリスタルは強くなった……元宵節など、もはや夢だよ！　見たいか？　夏虎！」

「どうか、ぜひ！」

麗王がうなずくと、クリスタルが漆黒の色あいを濃くした。手のひらほどの結晶の内部には、たしかに何かうごめくものがある……かき消すように彼らの姿が消え、瀟洒な部屋は無人となった。

……そして新界のはずれ近い水際の路地に、二つの人影がひっそりと立っていた。

新界にはよくある、つないだ小船の酒場だ。傭兵や船乗りが行くあまりはやらない場所。剝げた木の扉がいつのまにか開き、なかにいた目がなぜか同時にその二人づれに集中して動かなくなった。みな奇妙に不安で青ざめていたが……だが、すぐになくなった。

――なんだ、きれいじゃないか！

ほっそりとしたほうの人影はフードをかぶり、少年か少女かもわからないが、それでもひどく白い美しい顔だちをしていた。誰もが肩から力を抜いた。

香港仔には、どこの街にもないほど美貌を尊重する変わった気風があるのだ。

〝歌はいかがですか？〟

銀細工のような白い手が、マントのかげから六絃琴をだしてすすめると、たちまち拍手がおこった。流しの歌姫か！　よくある二人組の……その片方はどんな芸をするつもりか、胸もとに1個の黒いクリスタルを抱いている。

「よし、1曲頼む！」

香港仔はまた歌曲がたいへんに好きだ。雨のなかを現れた見知らぬ歌人は優美な作法で一礼すると、白い指で六絃琴に触れた。

うっとりするような、誰も聞いたおぼえのない曲がその小船に流れだす……。

うつろな目をして聞き惚れていた一人の船員が、やがて立ちあがると隣の男の胸にナイフをつきたてた。血しぶきをあげてくずれ落ちる人間に、しかし誰一人として注意をはらわなかった。

彼らもまた、それぞれ立って殺し合いをはじめていたからだった。

「夏虎……おもしろいだろう？」

狭い小船の空間で地獄絵が展開されているのを見て、麗王がにっこりと付き人をふりかえった。夏虎の手で捧げ持つクリスタルは、邪悪な輝きを帯びて笑っているようだった。

指先はまだ六絃琴からはなれない。耳をおさえて床にうずくまっていた最後の男が、悲鳴をあげて立ちあがると、よろめきながら殺戮にくわわる……。

「もやいを解いておいで」

ギラギラするような瞳をみかわして、麗王は夏虎に命令した。もやい綱を解かれた船は、そのまま流されて岸を離れていく……叫びも悲鳴も、聞きつけられない。

「誰の心にも、陰になる部分はある……」

甘い旋律をかなでる横顔は、子守歌をひいているように見える。わずかな不満、わずかな暴力の眠っていない心などあるものではないのだ。

「このクリスタルの力は、それをひきだして増幅できるのさ。どの心にも闇はある……この術からは、常人は誰も逃れられない」

それは術士にとっては眩惑の技の一種だったが、黒のクリスタルを媒体とした時には、恐ろしい錯乱をも自由に与えられる。

「まだそのままで死なせることはできないが、狂わせて殺しあいをさせるのなら思いのままだ」

――レン・巧猿があくまで元宵節の船をだすというなら、その夜の海にはこの調べがゆ

く。

「ああ、素晴らしい技です」

目を輝かせる夏虎の喉の奥から、人らしさのない満足げなうなり声が低くひびく。

いま船には小規模な結界が張られていて、術の影響は小さいものだ。だが、血が流れればすべての船がつらなり、よろこびに瞳を輝かせた人々が集まるその最中に、野火のように流れるほど、殺戮の輪が広がるほど、術は無限大に広くもできる。

恐ろしい光景が広がるようになるだろう。

麗王はようやく六絃琴から指をはなして、夏虎の持つクリスタルをみつめて言った。

「ごらん……生きはじめている」

さっきまでの物音は不気味にやんで、あたりはシンとした静寂につつまれている。

重なりあった死体は二度と声をたてないからだ。

それからゆっくりと顔をあげて、夏虎の目に鋭く焦点をあてる。

「お前はこれから、レン・巧猿の身辺をさぐるのだ」

麗王は別人のような険しい表情で夏虎に命じた。

――気になるのは、巧猿の陰にいる奇妙な妖気だ。

嵐の夜、海上で巧猿の船とであった時にも、その主のために傷一つつけられずに取り逃がしてしまった。

香港のものではない力。異質で、しかもあなどれない魔の気配。
「……私の知るかぎり、あのような妖力は、新界のどの術士の使う魔でもありえません」
かつて魔女イリヤの腹心で、新界の魔力に精通している夏虎が断言した。
「だが妖魔だな。それも恐ろしい力を持った」
夏虎は青ざめた顔でうなずいた。
「巧猿めはどういう手でか、そいつを手なずけているようすです……」
いまや麗王にとって、元宵節は彼自身の祭りにできるだけの魔力が用意できた。
騎士団も本島のいかなる力も、防ぎようがないはずだ。
ただ一つ……未知数の敵があるとすれば、それはあの嵐の夜に幽霊船の前に立ちふさがった奇妙な妖魔の気配だけである。
韻麗王が静かに言う。
「予感があるのさ、あの魔がこれから我らの最強の敵になる気がする。知りたいものだな、巧猿がどうしてあの魔を見つけてきたのか……」
「だが、たとえなんであれ二度とあなた様の邪魔はさせません！」
麗王の前で夏虎が誓った。たとえ妖魔であれ、香港の特異な魔力を知りつくしているのは我らなのだ。
「やらせません……あるいはレン・巧猿に、この上の秘策があっても！」

……同じ日、同じ雨が降り続くそのころに、新界のレン・巧猿の別宅では、風変わりな客がひそかに集まっていた。

夜もかなりふけた時刻である。

――千人会議の日まで、レン・巧猿を陰から助けた者がじつは3人いた。

それぞれに奇妙なメンバーだ。

可愛らしい顔だちの黒髪の少年。

黒衣の背の高い青年が一人。

そして、新界の呪術士でキュロスという名の老人だ……遅れて入ってきたこの術士は、ボロのマントから雨水をしたたらせながら、たったいまからこの屋敷はある種の結界につつまれていると、主に告げた。

「どの程度、有効かは保証できんが、とにかくわしに張れるかぎり強い結界を張った」

敵である幽霊船の術士にも、そう簡単に破れるものではないだろう。

「屋敷にいるあいだは、術による攻撃があったとしてもさほどは効かない。かの術士が遠視の技をもっていても、屋敷の中で話したことなら安心じゃ……もちろん一歩外へでて動きだせば、秘密はいずれ漏れるのじゃろうが」

「キュロス、ありがたいよ！　でも、いいのか？　こんなにまで手を貸してくれて！」

レン・巧猿はうれしげに両腕を広げた。
新界ではいま、術士というだけで危険なことなのだ。この老人……キュロスは、新界の術にかけては街の生き字引であり、自身も有数の術士だった。
皮肉屋で意地が悪い。おまけに守銭奴という評判である。
「もちろん！　ただではないぞ!!」
そういいながらも、キュロスはこの先の助力を約束し……それから、ふとどこかいつもとは違う声音になって、
「新界の術士にとって、新界以外に生きられる場所は、連邦世界のどこにもないのじゃよ……巧猿、お前さんが街を守ろうとしてくれるのなら、術士のわしがくるのは当然じゃ」
と言った。
――嵐の行方は、いまやこの巧猿自身の運にかかっているといってよいのだ……。
この老術士にはすでにそれがわかっていた。
巧猿とはわりあい古くからのつきあいだったが、これほどの危機に耐えられる者かどうか考えたことはなかった。
ただ意地悪でドケチの老人なりに、キュロスはレン・巧猿という青年が好きではあった。
――五星家当主レン・巧猿の年齢は20歳だった。
彫りの深い顔だちと、生気にあふれる茶色の瞳をして、美人と美声に弱い根っからの

香港仔だ。遊び好きで、生来の遊び上手で……ふだんはまぎれもなく何も考えていないが、あなどって害を与えると、突如立ちあがって予測のつかない反撃をしてくることがある。

香港仔にはときどきこういう男が生まれた。

――生粋の香港仔だ。この男の力も弱点も、この街と同じなのだ……。

「新界の術士である以上、わしに使えるのも基本的には護りの術だけじゃ」

護法・占い・時には死者の霊の召還。

もちろん、人の使う術であるからには、そこにはいささかの――いや多彩な――悪用やペテンも存在する（キュロスなどはそのエキスパートだ）。

それでも呪殺や邪悪な魔の召還など、あきらかに黒に類する呪法は使えなかった。人々は術士を恐れなかった……幽霊船が現れるまでは。

「幽霊船の術士が使うのは、もっと強い黒の呪法なのだが、それでも護れるかぎりは護ってやるさ……どこまで通じるかは本当にさだかではないが、最後の保証はしてやろうな」

「……なにかな？」

「油断した時には、葬式をだしてやる」

キュロスは化け物じみた顔でニッと笑った。

「僕もあなたに協力するよ、巧猿。友達だものね！」

巧猿の隣にいて、はつらつとそう言いながら笑いかけてきたのは、黒髪の小柄な少年だ。

――名前は涼・雨宮といって、16歳になるらしい。
レン・巧猿の二人目の、強力な助力者だった。
外見は年齢よりも少し小柄で、賢そうな漆黒の瞳をしている。性質はひとなつこく、素直で、孤独そうな者をみかけると、吸いよせられるようにそばにいって座る奇妙なクセがあった……。
――運命が巧猿を中心に回りつつある証拠のようなものだ。
韻麗王が恐れている強力な妖気は、まぎれもなくこの少年の背後から放たれている。
ネオ・ナリタからきたこの小柄な子供は、かの土地の妖魔アルディーンの主でもあった。
過去に力のある妖魔と融和して、無心のまま生き延びた者である。乱れた白髪の陰でキュロスは視線を動かして、気配をかすかにうかがった。
――まだおなごのような顔をしているが、間違えてはいかん……この妖気！　そしてこれほどの魔力を体内に抑えこんでいられるのは、よほどの精神力の持ち主だけじゃ！
この街に彼をつれてきたのは、思えば巧猿の船だったのだ。〝結局それは奴の強運の一部とはいえないだろうか？〟
巧猿とは友好関係にあり、よろこんで力を貸すだろう。
――幽霊船との対決には、いずれにせよ強い力だった。
さて……最後の一人の客は、キュロスの視線に気づいたとしても無表情だ。敵なのだろう

か？　味方なのだろうか？　無垢な目をした妖魔の少年と違って、キュロスにはまだよくわからない。ともあれ、

――この部屋でいちばんの凶相じゃな、おそらく……。

観相は専門でなかったが、それでも年齢の功でいささかのことはわかる。

巧猿とキュロスは、ナイトハンドというその通称しか知らないのだ。

長身の黒衣の青年で、香港暗黒街では不敗の伝説をもつ人物である。

――冷酷無比のクライムハンターで、香港では正体はまだ誰にも知られていないとか。

顔のほとんどを隠してしまう黒の傭兵型のサングラスを、部屋に入ってからもはずそうとしないので、キュロスの目にはわずかにのぞく口もとしか見えない。

それでも、目を閉じればこの青年の背後に暗い炎が見えた……。

――修羅の火だ……殺され、殺しあわねばならぬ星の下に生まれた者はたしかにこの世界にいるのだ。

〝遠い過去にいまもしばられている〟。こうした直感はいつも間違っていない。

おそらく……過去に無残な血を見たことがあるはずだ。その時にきっと情というものをどこか断たれてしまったのだろう。それゆえ、殺戮の血をどれほど浴びても冷ややかに落ち着いていられるのだ。

こういう凍てついた気配の主とは、なるべくならかかわりあいをつくらないのが利口だ。

――だがいまは、味方につけておけばおそろしく役立つだろうな。実戦になれば殺しの手だれで、どんな闇にもたじろがないだろう。

そして捨てゴマが必要な時には、まっさきに見捨ててかまわない点も便利だ。

――頭もかなりいいようだから、簡単には使われないだろうが……。

それでもキュロスは胸のうちだけでペロリと舌をだした。

近い未来が予想できるだけに、きわめて気楽だった。

この青年にとって世界は、血の色以外には灰色の荒野があるばかりだろう……華やかな色彩と歓楽にいろどられる、巧猿の見ているような世界とはちょうど逆だ。

――よろこびを知らぬ世界は、捨てても少しも惜しくなかろう。

キュロスは過去に何人か例を見ていた。こういう心を持つ者は無意識にいつも死の隣を歩いている……たいがいは傭兵か殺し屋になる。

そしていずれ、手にかけた敵の怨念が返ったような恐ろしい死をむかえる。

――自分から待っているので、避けようがないわい……。

それは遠くもない未来のような気がした。

誰一人愛さず、何も知らず、生まれた時と同じようにゼロのままで死んでいくのだ。

――もう望みはないかな、こやつ……いずれ死ぬまでこのままかな？

自分はしかしこの男の素顔をみな見たわけでもない、だがそれほど大きくはずしているわ

けでもない自信があった。

例外は、心にまだわずかでも情が残っている場合だけだろう。

――血の色以外の色が、心にわずかでもあれば未来はまた変わるかもしれないが……。

一瞬、氷のような一瞥が感じられ、観察はとっくに気づかれているとわかった。

黒衣の青年は、冷ややかな声音で黒髪の少年をふりかえると言った。

「ことわっておくが……私はまだ、手を貸すと約束したわけではないのだからな、アルディーン。くだらぬ話だと思えば、勝手にさせてもらうまでだ」

どこか緊張した空気のまま、会合ははじめられた。

さて……幽霊船の本拠地を隠していた結界は、この日に消えうせていた。

彼らがここに集まったのは、状況が大きく変化したからだった。

一刻もはやく叩こうと言う巧猿を、キュロスはバシッとしかりとばした。

「愚か者め、あれは間違いなく幽霊船の罠じゃ！　その証拠に、術士の正体を隠す結界はいまだにビクともせず存在しているのだからな。邪悪な術士が相手なのじゃ……なんの用意もせずに手にのってノコノコと行ってみろ、葬式の世話がなくていいわ！」

キュロスの言葉に、巧猿もうなずいたが、

「だがレーテアとの契約は、元宵節のその夜までだった。そのあとは僕らは、彼らをとど

めることがまたできなくなる……グスグスしているヒマはないんだよ！」

最強の騎士団との契約が有効な間に――元宵節の当夜までに――なんとしても、あの寄港地を叩かなければならない。

さもなければふたたび香港は、幽霊船と正面からあたる手段をなくしてしまう。またしても韻長官の勢力が力を得るだろう。

「しかし韻長官の集めた傭兵どもであろうが、レーテアの騎士であろうが、あの船と戦って倒すことは、どちらにもまだできん！」

杖で床をイライラと叩きながら、キュロスが断言した。

――巧猿が幽霊船と遭遇した時、船員はほとんどが死人返しの亡者だった。

レーテア騎士の異能は、この使い魔にはかなり有効だった。

「だが一匹だけ、別格の魔物がいたはずじゃな？」

それは人鬼だとキュロスは読んでいた。黒い術の使い手が操るなかでも、最悪の魔獣だ。

「ただ殺されたのではなく、自分から何かを呪って黒に生命を捧げたものが、人鬼になりうる……もとは人間だったことは亡者と同じだが、力は段違いだ！」

魔力そのものは術士に依存していても、ある程度の術は使ってくることがある。

すでに死んだ者なので、戦っても滅ぼすことができない。

「人鬼は黒の術士の命令には絶対に服従する。甲羅を経た奴ほど能力も高く、悪賢いの

じゃ。幽霊船の術士が何人の人鬼を動かせるのかはわからんが、これをどうにかせぬかぎり勝ち目は絶対にないぞ、巧猿！」

「だがキュロス、いったいどうしたら……？」

――人鬼が滅びる道は二つだけだ。

「旧世界の術書によれば、怨念の消失とともに人鬼は存在できなくなるという。したがって奴らが死に際まで抱いた執着を断ってやれば、存在は消える。だが、これはとても不可能だ」

いま一つの道は〝仇魔刀〟と呼ばれる妖刀を得ることだ。

「これさえあれば……人鬼は倒せる。人鬼に守られた幽霊船の術士を滅ぼすことさえ夢ではないのだ！」

「仇魔刀……キュロスはこの前も、その名前を言っていたな？」

32年前に失われたものだったはずだ。

……それから、キュロスが知るかぎりをすべて話して聞かせた。

「五星家に代々伝わっていた降魔の呪具だった……旧世界からそのまま与えられた、非常に強力なもので、ある意味では危険ですらある」

「危険……というと？」

仇魔刀はそれ自体、一種の妖魔に近い……と、キュロスは言った。そして象牙細工のテー

ブルの上に幻をだして見せてくれた。キュロスの知る、仇魔刀の幻影だ。
「鮮明なものではないぞ……わし自身の目で見た記憶がないのだからな」
長い刀身をもつひとふりの剣が、三つ目の竜をかたどった台座の上に立てられている。〝刃の部分がクリスタルだ……それも紅い〟、涼が小さく目をみはった。
「……この色は、魔物の血で染められたものだそうじゃよ」
キュロスが低い声で言った。
「旧世界の術というのは、いまの術士の目から見れば、けたはずれだ。仇魔刀は常のクリスタルと違い、術士がいなくても魔の気配を感じると現れて、襲いかかるとか言う話だ」
「……便利な話じゃないか？」
ナイトハンドがあざ笑うような調子で、キュロスに訊ねた。
「その話が本当なら……幽霊船の術士は使い魔も利用しているはずじゃないか？　どうしてその場に仇魔刀が便利に現れないのか？」
おそらく封印がかけられているのだろうと、キュロスは答えた。
――この妖刀は32年前に五星家の手から失われ、それ以来行方が知れない。
警察や当局は以前に何度も捜索をしているし、キュロスもほかの術士たちと呼ばれて、探索に協力させられたことがあった。
「だが、どう術を使っても奪われた先は見えなかった！」

だからこそ、彼ら全員がイリヤの術だと認めたのだ。
「イリヤは力の優れた魔女で、新界の我らすべてをあわせたよりも強い術を使ったものだ」
ただし、旧世界からの呪具を砕くほどの技はもたなかったと思う。
――仇魔刀はどこかに隠され、結界でその猟犬の性質を眠らされているのだった。
「どこか……は、まったく見当がつかない。ただし逆に言えば、新しい幽霊船の術士の結界はおよんでいないのだ。術の二重掛けは不可能だしな」
それだけが有利な点だといえようか？
「ふつうの場合、新界の術士が失せ物捜しを依頼されたらどうするのだっけ？」
巧猿の言葉に、キュロスは説明した。
「強い呪力のある品物が紛失した時、ふつうはゆかりのある品から気配をたどっていけばたやすく発見される。宝石ならばその箱、剣ならばその台座」
視線が一様に三つ目の竜に集中した。
「では、キュロス！　たとえば君を、この台座のある場所につれていけばいいのか！」
巧猿の言葉に、キュロスはわずかに眉をひそめた。そうは言っていない。
「この像はただの台座で仇魔刀の呪力とはべつのものだから、もちろんいまだに香港当局の手にあって、五星家のお前ならば動かす許可もおりよう……」
イリヤが死んでから、32年の月日が過ぎているのも少しは都合がいい。術士の死んだあと

の封印や結界は、生きている時よりは少しは破りやすくなる。
「……だがこのイリヤの結界に関してはほんの少しだ。この像をいま使うことができれば、年月もたった、わしの力でもイリヤのかけた封印を多少は解くことができるかもしれん……しかし正直なところ、それだけでは成功は予測できない」
真実を言っていると知ってもうれしくはなかった……死んだ術士でありながらなんという魔力！　巧猿は目に見えて肩を落としたが、その時、黒髪の少年がにっこりと笑った。
「できることはまだあるよ、巧猿！」
思わず巧猿がふりかえると、まっすぐにみつめ返してきて、うなずくのだ。
「僕がおとりになる」
――なにを、バカなッ！
巧猿と黒衣の青年が、はっきりと怒鳴りつけたのは、ほぼ同時だ。
「……そんなことが、なんの役に立つ！」
「でも巧猿、考えてみて。仇魔刀は魔の気配があれば、自動的に襲ってくる性質をもつのでしょう？　キュロスが術で呼ぶあいだ、僕がその場所でアルディーンとして呼び続けたら……」
まぶたをゆっくりと閉じてから、ふたたび開いた時には、瞳の色が深紅に変わっていた。それだけで別人のように幼い顔が変わり、妖気が表にでてくる。

このうえもなく強い、妖魔の気配が、仇魔刀を目覚めさせる可能性は充分にあった。
術士の呼びかけと同時ならば、妖刀に内側から封印を破らせるだろう。
「キュロス、答えてほしい。可能性はありますよね？」
一瞬ですべての気配がもとにもどったものだ。
キュロスはきわめて低い声で、ある……と答えた。イリヤの術も破れるかもしれない。
「だが、危険だぞ！　わかっているのか⁉」
「でもね……ほかに方法がない以上、しかたないでしょう？　ねッ、巧猿……ね？」
――やらせてくれるよね！　大丈夫さッ！
やや青ざめた巧猿の顔を下からのぞくようにして、ねだるような声を出している。彼がこのすべてを、とっておきの冒険だと考えていることはあきらかだった。
キュロスはこわばった顔で、同時に手立てを考えていた……放っておいたら、妖魔の少年は現れた仇魔刀に一撃で貫かれて終わりなのだ。
――仇魔刀が現れるより早く、この坊やを結界で保護してやる……獲物を見つけた妖刀より強い結界が張れるだろうか⁉
首筋がチリチリするような気持ちで、キュロスはうめいた。恐ろしく危険だ……。
「キュロス……できそうか？」
「わからない……」

眉をしかめたままで、老人は妖魔の子供のほうをチラリと見た。
この場合、彼の妖魔としての力はなんの守りにもならない。むしろこの子に、賭けに勝つだけの強運があるのかどうか……。
澄みきった目をして恐れもなく立っていた。まだ少女のような顔のむこうに、勇敢さときらめくような闘志が見える。
「僕、あなたが好きですよ、キュロス」
ふいに、口をひらくと涼はそう言って笑った。巧猿も、彼の愛するアリエナという娘もみな好きだった。
「この街で会った人は、みんな好きになりました。だからやるんです、僕自身の街と同じように。賭けもします！　友達に力を貸すって、そういうことでしょう？」
「妖魔の坊や……」
キュロスは一瞬、まぶしいように目をまたたいた。
「それにもう一つ、仇魔刀が欲しい理由があります」
……何かを願う時のように無意識に手を前で組んでいた。
「キュロスはいいましたよね、人鬼になったのは激しい恨みや執着があって、自分自身を生け贄にさしだした人だけだって」
「ああ、言うた」

——何かを呪って自分から生命を投げだしたなんて……。

この美しい街を知るほどに、生きて喜びを知れる素晴らしさを感じるのだ。それを捨ててまでかなえたい憎悪や執着とはどんなものなのか……涼にはまだ考えもつかない。ただそれほどまでに何かを望んだ気持ちは、ひどく哀れだった。

だが、それがなんだというのか？　同情しやすく、子供っぽいまなざしを見て、キュロスの表情がみるみる険しくなっていく……。

「仇魔刀がもしも最強の術具なら……そしてもし僕から妖魔としての力が引きだせるのなら、その力で人鬼になった人の執着を断ってあげることはできませんか？　あなたなら！」

〝彼らを……自由にしてあげることは、あなたならできませんか？〟そのためなら、多少の危険は恐ろしくないと言うつもりだった。

だが、その前にキュロスの杖が力いっぱい肩にふりおろされて、思わずアッと声をあげて倒れこんだ。

「このバカめ！　よくもそんなッ……たわけた夢を見て言いおったな!!」

「キュロス!!　おい、やめないかッ」

倒れた涼の上から、キュロスはかまわずにさらに打ち続けた。

「うるさい、巧猿！　こんな奴は、こうして教えたほうが薬なんじゃ……人鬼を自由にしてやりたいだと？　次はなんだ、奴らのエサにでもなってやりたいか!?」

――悪霊の醜さを知らないのにもほどがある!!
吐き捨てるように言って、杖をふりまわす。
「いいかッ、よく聞け、なによりも仇魔刀にはそんな力はない！　あれは魔をみつければ滅ぼすだけの呪具だ……それでいいのだ!!」
ひとたび魔に魂を売った者は、二度と人らしい気持ちにはもどれない！
闇から生まれたべつの生き物になったのだから。
――黒髪の少年の頬がうっすらと青ざめていた。
もっとささいな妖魔でも、生命を落とした者は大勢いるのだ。
まして人鬼のような化け物を前にして、こんなに甘く気をゆるめているのは許せなかった！　どんなに脅してやってもたりない。
力があればあるほど、下手をすれば死よりも恐ろしい運命がまっているのだ。
「いま、わからせなければ大変なことになるとも！」
「もうよせ、キュロス！　わかったが、そんなにまでしなくても……」
巧猿が老術士の腕から杖を奪い取った。息をきらせて、手をおろしたキュロスは、よろめきながら立ちあがった涼を冷ややかにながめて命令した。
「妖魔というのは、みんなそうだ！　人から生まれて魔になった者も同じだ。まず情愛を忘れる……心が死ぬ！　そのあとは獣と変わらん」

術士の口伝にもある。滅ぼす以外の目的で、魔物に近づくな。命乞いを聞くな。

絶対に話しかけるな。

――ズル賢いぶんだけ、獣よりも危険だった。

彼らは人のように話し、時によっては涙を見せることすらあるが、

「それはみんな、見せかけの仮面だ！　信じて近よせて、餌食にするまでのお芝居よ。お前のようなバカ者が、これまで何人くさった罠にかかったかッ……」

……激高しているキュロスには、涼の顔がすうっと青ざめていくのがわからなかった。

「奴らには、感情など本当はもうないんだ！　話しかけるな、心がないのだから無駄なんじゃ！」

「でもキュロス!!　僕はただ……」

まだ言うか！　キュロスはカッと目をむいた。

「つまりは、呪われた魔と言葉をかわすだけで、汚れだと知らないか!?」

その瞬間、泣くような激しい空気の鳴りが天井に響いて、目の前の少年の瞳がいっきに深紅に変わった。黒髪がうねるように逆立ち、キュロスがハッと息をのんだが、

「キュロス……よくも言ったな!!」

ワナワナと、ふるえるくちびるを噛みしめた妖魔の少年は一声叫んだ。

赤い血が頬をつたって流れているが、それももう妖魔の血には間違いない。彼はクルリと身をひるがえすと、とめる間もなくそこから身をひるがえして走りでていってしまった。

――おお、しまった。わしとしたことが……。

呆然としたキュロスの横で、鏡が数枚砕けて床に飛び散っていた。

ナイトハンドが影のように部屋をでていた……。

廊下をかなり走ってから、涼はようやく足をとめた。

涙があとからあとから流れてくる……もうとっくに、いつもの少年の姿にもどっていた。

〝妖魔の感情は見せかけの落とし穴だ！　情けをかけるだけ汚らわしい！〟

〝妖魔も、魔にかかわる者も、すぐに心が死ぬ。最低の感情もなくなる〟

「ウソつきだ、あいつ！　そんなことがあるものかッ！」

大声で叫んでもほとんど反響もないのだ。はじめて涼は目をあげて、あたりを見回した。

五星家・巧猿邸はとても広い。

緑の大理石を敷きつめたこの廊下は、遠くの大広間まで続いていた。屋敷では滅多に人のこない一隅で、冷え冷えとしてあかりも暗かった。

……深いタメ息をついて、彼は涙をぬぐった。

大理石の豪奢な柱は、少しもなじみがないように見える。

ネオ・ナリタに帰りたかった！　ネオ・ナリタのみすぼらしい廃品置き場が、たまらなく懐かしくて泣き続けた。

廃品置き場の倉庫の家には真夜子がいる。真夜子なら、きっとみんなわかってくれる！

――会いたい。真夜子はわかってくれるんだ。僕が本当はただの涼だってこと……真夜子ならちゃんとわかっているんだ。

真夜子なら、何も知らなくてもわかってくれる！　目を閉じて、冷たい大理石の柱に額をつけた涼のうしろに、黒衣の人影がいつのまにか立っていた。

「アルディーン……」

その声が誰か、涼にはわかった。

「アルディーン、こちらをむけと言っている」

答えずにいると、乱暴に反転させられた。

「放っておいてくれよ！」

少年は腹立たしげに手をふりほどこうとするが、ふりむいたその顔はまだ涙があふれそうだった。肩をつかんだ手を、ナイトハンドはややゆるめた。

「……貴様、あの術士に言われたことが、そんなに悲しいのか？」

彼には不可解なほど泣きじゃくっている。

――例によって、バカげたまねをはじめたから追ってきたつもりだった。

巧猿など香港人たちの前で弱みをみせるのは許せない。
だが……泣いている涼を、ナイトハンドは殴りもせずにしばらくそのままで見ていた。
この少年のなかに妖霊がいることは確かだった。もはや一体化し、性質もほぼ融和している……戦いの場でひどく激しく、血で活力を得てしまうところも見たことがあった。
それから、闇の世界でナイトハンドという……少年をつねに妖魔のアルディーンの名で呼ぶこの青年は、意外な言葉を口にした。
「お前はそれで、ちょうどよくなった」
「……え？」
――新界の術士の言い草がどうであれ、この妖魔に関してはよく知っている真実があるのだ。
「アルディーン、お前は確かにもう妖魔だが、それでちょうどよくなったんだ」
よく知っていることなので、ナイトハンドはただ淡々と話してきかせた。
無敵に思える妖力のほかにも、この少年がアルディーンから手に入れたものがある。
――考えてみれば自分は、この子が妖魔になる以前に会ったことはなかったが……。
「それでも容易に想像がつく。お前は優しすぎて、ろくに戦うこともできなかったはずだな？」
妖力を得る前から、並外れて賢く、強い精神力をもっていたのは知っている。

だが何一つ、できなかった。ずっと閉じ込められたような場所にいて凍えながら、誰かを傷つけることばかり恐れて、戦おうと考えもしなかったのだ。

「そのままだとお前はたぶん、ゼロのままで死んでいったのだろう……」

奇妙にもナイトハンドは、キュロスが思ったのと同じ言葉を口にした。

手をのばしてまだ泣いている顔をあげさせて……頬の血を見るとやや眉をしかめた。

「戦いのない世界はない！　貴様がどう言おうとそれは真理なんだぞ、アルディーン」

少年もかすかにうなずいた。自由や愛を勝ち得るためにすら戦いはある。

――そうだ、アルディーンに憑かれる前のお前は、どこへ行っても長くは生きられなかったに違いないんだ。

「ネオ・ナリタの妖魔が哀れんでお前と一つになった……妖魔としてなら生きられるようにな。ずっと前から私はそう思っていたぞ。だからお前はそれでいいんだ、アルディーン！　いまでさえ優しい……いい子だ」

わずかな血をぬぐってやると、傷ももうなくなっていた。

青白かった頬に血の気がもどってきたのを見ると、この男はさっさと背をむけて廊下をもどりはじめた。

「ナイトハンド……待って！」

涼はいそいでそのうしろ姿を追いかける。追いついて〝ありがとう〟というと、露骨に嫌

な顔をされた。
　誰かをなぐさめたかのように礼を言われるのは、彼にとっては経歴の汚点のようであった。
「言っておくが、あの術士の言うことが本当は正しいのだ。敵に情けをかけるな……魔にかぎらず貴様はどうも、たぶらかされやすい傾向があるのだからな！」
〝反省するがいい！〟、生意気にも暗闇の妖魔は反撃してきた。
「だってさ……少しくらいたぶらかされても、僕はまだ生きているよ。信じてよかったことだってあるんだから、人に優しくするっていいことさ！」
　――君も少し、そうしたらどう？
　サングラスごしでも、眉がキリキリつりあがったのがわかる。かんしゃくを押し殺すような声で、
「優しい？　そんなのは愚か者のオモチャにでもくれてやれ！」
「でも、僕にはいま優しいのが、いいところだって言ったじゃないか？」
〝言うか、そんなこと!!〟、堪忍袋の緒が切れたと感じて、細い首をつかんで吊りあげたが、それでもまだ言い張るのだ。
　――言ったよ!!　たったいま聞いたんだもの！
「私は、言わない！」

「言ったね、聞いたもの！」
「言わない……しつこいぞッ！」
〝言った！〟〝言わない!!〟。廊下のかなり先までひびいていることに、二人とも気づかないでいる。
とりあえず明るい少年の声を聞いて、巧猿とキュロスがホッと胸をなでおろしていた。

――翌日になって、キュロスが〝黄金の針〟へこいと呼びだしてきた。
その理由の一部は、すでに昨夜のうちに巧猿の屋敷で知らされている。
「仇魔刀を捜すのなら、同時に見つけねばならぬものがある」
もう一度、空中に幻影を呼びだした。
深紅のクリスタルの妖刀には、よく見ると巻きつくようにして一つの首飾りがかかっていた。3個のつややかな紅玉がつながれた首飾りだ。
「この紅玉が必要なのだ」
それは仇魔刀の補具としてあるもので、強力すぎる妖刀の抑えとも護りともなるものだった。
「さっきも言ったとおり仇魔刀は危険な呪具で、用のない時にはかならず結界で囲んでおく必要がある」

結界の外にあれば、魔を感じると自分から動きだしてしまうほどなのだ。

「猟犬のような妖刀で見境がないのだ」

——そこで紅玉が重要となってくる。

「術士も、能力の高いものになると魔と似た気を放つことがある。仇魔刀は口伝によれば術の素養のないものでも使用できるはずだが、やはり……魔と向き合うことに慣れた上級術士のほうが使いこなす」

3個の紅玉が埋められた首飾りは、その際術士の身の護りになった。

「これなしでは、高位の術士は仇魔刀に触れられなかったのだ……なにしろ、結界から持ちだしたとたんにグサリじゃ」

連邦歴創始以来の記録によれば、仇魔刀は過去に何回か当局の要請で使用されたという。

「じゃがこんどは、そのどの一件とも違う事情ができてしまった。敵方も魔を使うが、こちらにもまた力を貸してくれる坊やがいるということだ」

——敵と味方の両方に魔がいるのだ。

仇魔刀には見境というものがない。だから涼も人鬼も同じように的にされる可能性がある。たしかに幽霊船の寄港地に踏みこむ時までには、仇魔刀はなんとしても必要だった。

問題は、その時涼がどこにいるかなのだ。

「当日、仇魔刀を結界からだす前に、坊やのための結界をきっちり用意して、ずっとそこに

いてもらうのは簡単なのじゃが……」
「それじゃ僕は一歩も動けなくなるじゃありませんかッ？」
そう……護りの結界から一歩もだせないとなると、戦力は激減する。
そしてキュロスはまた、言うのだ。
「魔力が強ければ強いほど、術士の身体にはたいがい何かの反動がくる。魔船の術士は恐ろしい牙の敵だが、おそらく……奴自身は肉体的には弱いのではなかろうか？」
――奴自身が攻撃を受けたときには、むしろ常人よりも弱い者かもしれない。
「だから正体を必死で隠す」
術士の使う魔性は不死身であっても、術士自身の生命は有限であることはよくあるのだ。
だからこそ、呪術士はより強い魔性でおのれを守ろうとし、術士の魔力に依存する妖魔たちが彼を守る。それは共生の関係といえる。
幽霊船の術士が誰にせよ、滅ぼしたいならまず奴をかこむ人鬼どもを殺るのが先決だ。
〝幽霊船の術士の魔力からして、あやつる人鬼も複数いる可能性がある〟
「しかも、敵ももちろん増やしていこうとするだろう……強力な使い手が必要なのだ！」
いま新界のどの術士と比較しても、可能ならば坊やが最高の魔刀の使い手になる。
「魔力だけでなしに、なにせこちらはおいぼれが多いでなあ」
解決の方法は一つだとキュロスが言った。映像にある3個の紅玉は魔の気を遮断する。

「だから、この紅玉を坊やにかけさせればよい」
「そうすると僕にも仇魔刀が使えますか!?」
キュロスは重々しくうなずいてから……じつは、この紅玉も現在行方不明だと言った。
しかも魔刀とは違って、術による追跡ができないという。
「こいつはいま、解体されて3個がバラバラになっているらしいのじゃ……気配が分散されてしまって、よく見えない」
キュロスをのぞいて、全員がうんざりしたような声をだした。
「キュロス！　その手の情報はこれからゴミの日にもってきてくれと言ったろう？　すぐだせるから！」
〝そう悲観したものでもないぞ〟、老いたる呪術士は一人だけうなずいて歯を見せた。
「手掛かりはないわけでもないのだ。最初の1個の場所はもう知っている……明日な、〝黄金の針〟へくるといい」
ヒッヒと笑いながら、キュロスは去っていった。

――〝黄金の針〟は新界最大の歓楽街である。
鋭い尖端を持つピラミッドのような建物で、内部は複雑に迷宮化している。
劇場があり、酒場があり、ひと足踏み入れた瞬間から、さまざまな誘惑が四方から手招き

をする。

レン・巧猿はこの場所を（どうも）よく知っているらしい。涼は今日は巧猿の見立てで、香港らしい服を着せられ、もの珍しさがいっぱいの瞳でついてきている。

〝黄金の針〟の入り口に立っていたナイトハンドは、きわめつけに不快そうだった。

――あのいかがわしい巧猿の屋敷でないかと思えば、こんどは〝黄金の針〟だと!? ふざけている！

彩りがないといえば、この青年はこの方面において不思議なくらい彩りのない感性の持ち主だった。

「……女が嫌いなのかね？」

レン・巧猿がソッと涼に身体をかたむけて訊ねた。女も男も子供も大人もと、涼は軽蔑したように首をすくめた。

「銃とナイフ以外のものはみんな嫌い」

――へー、信じられない。

美しいものに過敏な香港人の目は、彼のもつ一種凶暴な優美さにひそかに感心させられずにはいられない……黒衣に傭兵型のサングラスで、ほとんど全身を覆っているほど、足どりのしなやかさがきわだつ。

――じつをいえば、だからこそナイトハンドはあの屋敷のなにもかもが気に入らなかった

のだ。

五星家の当主でありながら、軽薄を誇りにしているようなレン・巧猿という男……もともとナイトハンドとは水と油だ。アルディーンが、すっかりそれに手なずけられた顔をしているのを見るのはどこか不愉快だった……友達だと？　〝貴様の友人は私ではなかったのか!?〟

〝あなたと巧猿と両方。いけないかい？〟

どうだっていいとも！　だがムカムカする。奴の屋敷へ行くとどこででも見かける可愛らしいメイドたちもめざわりだった。

ごく最近、深夜に数回だけおとずれた、顔を隠した——しかし美男子そうな——謎めいた黒衣の青年は、彼女らのひそかな熱視線をあびているのだが、誰一人として優しい口をきいてもらった者もいないのだ。

この世が自分の思いどおりになるなら、女などまとめて焼却炉に送ってやるといいと、常々から思っている。

——女というものはドブネズミのように頭が悪く、そのくせ欲が深くて夢だの愛だの、いつもなにか得体の知れないものを欲しがっているらしい。

奴らには誇りも品性もない。なぜなら。欲しいものを見つけたときのあの手口の汚さ……作り笑いか、涙で獲物をとろうとする。幸運にも男と生まれた者のほとんどが、ああした吐

き気がするような手で骨抜きにされるのはいかなる呪いか？

だが自分だけは断じてそんな下等生物を近づけまい！　かねてより強く誓っていた。

「その気になれば可愛い恋人ができるだろうに……惜しいなあ」

美しい恋人より武器を欲しがる感性は、巧猿には理解しがたいのだ。

……思わずあとずさるほどの冷酷な視線がとばされ、巧猿があわててキュロスとの会合場所に案内した。

そこは〝黄金の針〟の中でも最高のクラスの劇場だ。言ってはなんだがキュロスにはふさわしくない。

「何をいうか、バカ者めが！　それにな、ここでなくては話にならんのだ」

なんだか謎のようなことを言う。巧猿が飲み物のグラスを手にした。

「アリエナに頼んで、紅玉に関する資料を見せてもらったよ」

32年前の妖刀の紛失以後、3個の紅玉は管理がややあいまいになってしまっていた。護符としても力があるが、宝石として最高の逸品だったという話だ。

「そこを誰かがちょろまかしたらしい。キュロスの言うとおり、3個はバラバラにしてさばかれているんだ。9年前ぐらいに、それらしい一つが女性用の首飾りとして盗賊市場で売りにだされた記録がある」

しかしながら、そのあと、また誰の手に渡ったかがさだかでないのだ。

「いや、わしはそれがいま香港にあって、持ち主が誰かも知っているのじゃよ」
新界の住人である彼は、まったくの偶然から、ある時〝黄金の針〟の入り口で、ある女性の喉にその紅玉がかかっているのを見たことがある。その時は追いもしなかったが、たしかにその一つだった。
「それがいささか、やっかいな女性でな……」
「誰だい、キュロス？」
香港暗黒街では知られた名前だ。盗賊ギルド――それは香港独特の組織であり、五星家のように香港の闇の世界を陰で統べるのだ――の上位の関係者であるという。
巧猿は深刻に顔をしかめた。
「ギルドか……困ったな！　ギルドの上層になると警察もうかつに手がだせなくなる」
実際にはギルドは香港警察よりも歴史が古いらしい。
香港らしい話だが……おまけに組織としてはきわめてプライドが高いという。
「誘拐した幹部に爆弾をセットして返して、脅しの駆け引きに使おうとしたが駄目だったぞ」
ナイトハンドがとんでもないことを平気でつぶやいた。
「しかし盗っ人のことは盗っ人がいちばんよく知っている。いつ盗まれたかもさだかでない盗品を捜すのなら、ギルドにやらせるのがいちばん手際がいいはずだ」

説得するにしても買い取るにしても、巧猿の口が理想的に達者だとキュロスは言う。
「彼女は非常に美人で……前はよくこの劇場に現れた。わりあい馴染みなのじゃろう」
「その……その女性は誰かの情婦かい？」
キュロスは、はっきりと首をふった。女でありながら、みずからも最強の海賊の一味をひきいるという。
「知っているかな？　梨花夫人という絶世の美女よ！」
――別名をスコルピオン。かつて香港海域で並ぶ者なかった大海賊狼大の美貌の未亡人でもある。
「とにかく女の胸から気に入りの装身具を渡してもらおうというのじゃから、男から買い取るのとはわけが違う！　手荒いことはきかぬし、よほどうまく出方を考えないと……」
「ううん、そうだな……どうしたものかな？」
ずっと黙っていた涼が、その名前を聞いたとたんうれしげにクスクス笑いだしてしまったので、巧猿とキュロスは驚いてふりかえった。
「涼、どうしたんだい？」
「きれいなきれいな梨花夫人だね？　あの人なら大丈夫……きっと僕らの力になってくれると思うよ！」
――どんな力も貸してくれるはずだよ！

「どうして⁉」

「どうしてって……あッ、巧猿、キュロス！　そのひとをつかまえて！」

スコルピオンの名を聞くなり、スウッと顔色が悪くなったナイトハンドが、誰にもことわらずにこっそりその場をはなれようとしていた。

巧猿とキュロスがすかさず飛びかかって、押さえ込む。

香港海賊の長、威梨花。

美を愛する香港仔がご贔屓の美人や歌姫のなかで、誰がいちばんかという口論に敗れたときに必ず言う言葉は、〝チェッ、でもお前はまだ梨花夫人を見たわけじゃあないからな！〟

妖花とまで言われた極上の美貌だ。

――彼女が海賊狼大にみそめられたのが、わずか11歳の時だった……と噂ではいう。

この美女のまわりはいつでも噂が妖しい宝石のようにとりまいているのだ……どれが本当のことだったか、本人にわからなくなる時があってもおかしくはないほどだ。

すべてに共通して真実なのは、ただ一つの序章だ。

〝威梨花と呼ばれる少女がいて、女神が羨むほど美しい姿をしておりました……〟

――当時梨花は香港有数の海運財閥、葉家の持ち物だったという。

売られてきた少女……と言っても、美しさ、利発さから宝物のように大事にされていた。

葉家には梨花のためだけに花園があった。そこが梨花の育ったところだ。

教えられたのは香港の淑女になるための最高の教育だ……優美な歌と舞、凝った複雑な装身具のとりあわせを習うこと——そこには、おびただしい作法や習慣があって、香港上流の娘たちが悩まされる難関だったが——梨花はどれも天性のよい生徒だった。

夜の海をとおすような透き通った声をしていた。少女は葉家の持ち物にすぎなかったが、名門の跡取りが羨望のタメ息をつくような宝石をいくつでも持っていた。

たとえ家宝の首飾りでも、幼いこの少女の喉ではオモチャのように見えるのが不思議だ。

——いずれ葉家の三人の跡取りの誰かと結婚することに決まっていた。

だが梨花が11歳の年に、海賊狼大が梨花の歌声を聞いてさらいにきた……新界の海上で、葉家のもっとも美しい船が襲われるとは異常な出来事だった。豪華な船室で、侍女達に守られてふるえていた少女は、しかし現れた狼大を見るといちばんあでやかな笑みを見せた。

——海の日差しに灼け、顔じゅう荒くれた傷のある男だったが、目はどうしようもなく自分に恋をしていると直感でわかったからだ。

はじめて見た荒々しい強い男。一目で気に入った。

白いドレスを着た梨花は、喜々として狼大につれさられ二度ともどらなかった。

葉家では追撃の船もだしたが、狼大は次々と……葉家の金と船を狙い、ついに追っ手をだす力が尽きるまでやりつづけたという。

大財閥葉家は、梨花一人のために滅びたのだ。

――11歳から15歳までの間、梨花は狼大の妻だった。

年齢は40も離れていたが、狼大は梨花に無法な海の暮らしの楽しさを教えてくれた。少女は自分が海の風と、強い船を従えていく略奪がおおいに好きであることを知った。

海賊の男たちは感情が激しくて、月に1度は梨花の微笑みをめぐって血で血を洗う決闘があったものだが、そんな時狼大はゲラゲラ笑いながら梨花を肩にのせてながめていた。

梨花が15歳の年に、狼大は海上警察との撃ちあいで死んだ。

腹を撃たれてもどってきた彼は、泣きながら駆けよる梨花を見て、ひどく不思議な笑顔を見せた……。

〝よし、どうやら俺は最後まで逃げきったな……これでお前が本当の恋をする日を見ずにすむようだぜ〟

そのあと狼大はすべての部下に、これからは威梨花を主人にしろと命じて息をひきとった。

梨花は1年泣きの涙ですごし、それから香港海賊の女あるじとなった。

大胆に船を襲い、次々と恋もした。

海賊狼大の部下を継いだのが女だと聞いて油断していた船主や警察関係者は、すぐ横っ面をはたかれたようなどえらい被害にあったものだ。

なにしろいまや梨花の部下たちは、女あるじの爪を飾る宝石一つのために手足を懸けるの

だ……微笑み一つで生命まで取った。

——香港随一の妖花、威梨花。

すでにその周囲には、妖しい美貌をめぐって数知れぬ伝説がある。

船10隻の積み荷をやられて声高に復讐を誓っていた宝石商人の前に、ただ一人、息をのむほど麗しい夜会服で現れてにっこりと笑った。

〝おかげさまで、気に入るドレスができましたの……女にはどうしても必要ですもの〟

深紅のイブニングの裾からびっしりと、ルビイで縫いとりがされている。このドレスにあうケープも必要だと言われて、すぐに財産をかたむけて宝石を用意したとか……。

欲しいと思って手に入らなかった男は一人もいない。

まだ少女だったころと同じように、どんなに力ある強い男でも、梨花にとってはオモチャだった……。

——つい、このあいだまでは。

「奥様、彰黄がセントラル銀行の輸送船襲撃計画をまとめて参りましたが……」

……威梨花、一の部下であるショーン・小杉がファイルを持って入ってきた。身長五尺の空手使いだ。女主人の知略と美貌に絶対の忠誠を誓っている。

「ありがとう、ショーン……いいように進めておくれ」

薄い紗で織られた薔薇色のカーテンがかかった部屋は、夕暮れ時がいちばん美しい。美女梨花も気に入りの部屋で、逢引も部下との連絡も好んでこの部屋を使っていた（元来、その二つのあいだにはあまり境がないとも言えた）。

――だがここ数か月というもの、梨花夫人は新しい恋人を探すことをパッタリやめてしまった。

何時間も物思いにふけっていて、新しい計画にも興味をあまり示さない。

いつもは何人もの美青年にとりまかれて笑っているこの部屋で、たった一人寂しげにしている姿を見て、忠実な部下たちは心配していた。

「新しい髪飾りをごらんになりませんか？　気が晴れますでしょう」

〝いまはいいわ〟、梨花は悲しげに首をふった。

――奥様、お気の毒に……。

長年梨花夫人の影となってきたショーンにはわかっていた。タメ息に似た小さな声で梨花が言う。

「ショーン、お願い。少しまた一人にさせておくれ……」

「はい、奥様」

香港暗黒街の華・威梨花。

女という女の中でナイトハンドがもっとも――鳥肌がたつほど――嫌っている存在だった。

目が眩むほどの美女で魔性の魅力がある。恋の手だれで多くの男たちを陥落させてきた。そのすべてが、むかつくほど気に入らない……だが何よりも最大の嫌悪の理由は、彼女がナイトハンドを熱烈に愛しているからだった。

――愛しているのよ、昼も夜もお前のことばかりなのよ……。

ひどく不思議な気持ちだった。ただ一人の男に、この梨花がやつれるほどの恋をするなんて。それも相手は……。

――顔も名前も知らない男。会えば私に死ねとしか言わないの。

あいつは冷血のクライムハンターで、ナイトハンドという呼び名しかわからない。黒衣にいつも顔を深く隠して、素顔を見たものはみんな殺してしまうという。

梨花にとっては、これまでのどんな男とも違っていた。

魔人のような強さや、鍛えられた若い力はもちろん梨花の好みだった。難攻不落の相手を落としてみたい気持ちもたしかにあった。〝あの高慢な奴がひざまずいて私に恋を打ち明けはじめたら、まあどんなに気持ちがいいかしら！〟

だが心の底にあった本当の気持ちは、気づかずにいてもすぐに……鏡にまで映るようになるものだと知った。

――本当はただ喜ばせたかったのだ。

笑わないあの顔に、笑顔が見られたらどんなにいいか……。

〝どうしてあの男は、私が嫌いなのかしら？〟せいいっぱい着飾っているのに、目もくれずに銃口をむける。心から誘い……笑いかけても、うれしそうな顔ひとつしてくれない。そのたびに胸がしめつけられるように痛くなるのだ。

ああ、こんな気持ち！

――たくさんの人を泣かせてきた、これが報いかしら？

なぜなのだろう？　彼でなければ、もう二度と恋などできないとわかっていた。

ずっと前に死んだ狼大は、いつか私も本当に恋をする日がくると言った。死に際に笑いながら、〝恋はつらいぞ梨花、覚悟をしておけよ〟と。

その時は何のことかもわからなかった。

――ええ、あなた……このことね？　いまはわかります。こんなにつらいわ。

会いたい！　せめてもう一度でも会いたい……だがこんど近づけば、間違いなく殺すと言われているのだ。

――いっそ、あいつの前に出て身投げして死んでくれようかしら？

そう思いつめる夜まであったが、そんなことをしてもあの悪魔はきっと眉一つ動かすまい。二日とたたないうちに忘れてしまう……金の鈴のような声で、梨花はすこし笑った。

「ホホ……おかしいわ、それなのにまだこんなに好きだなんてね！」

千人の天使よりも、あの悪魔めがよいのだった。

——好きな男に嫌われている……そのことよりもまだつらいのは、あの男のまわりにある暗い気配だった。

あれほど強い男なのに、みつめる目には、追いつめられた生き物のような気配を漂よわせている。愛することも愛されることもかたくなに拒み、自分が追いつめられていることにすら気づかずにいるのがたまらない。

傷だらけのくせに、どうしてわからないのだろう？

——梨花がいるのよ！　呼んでくれればどんな夢でも見せてあげるわ！

あいつはとても潔癖なので、梨花など汚いもののようにしか見えないらしい。誰もが見惚れる手足も瞳も、せせら笑って見向きもしてくれない。

でも、もしもいつかあの悪魔の気が変わってくれたら……かなわぬ夢を見る梨花は、せつない甘い吐息をついた。

——もしいつか、あのドアからあの人が入ってきて、梨花踊りに行こうと言ってくれたら……。

そうしたら、どんなにかいいだろう！

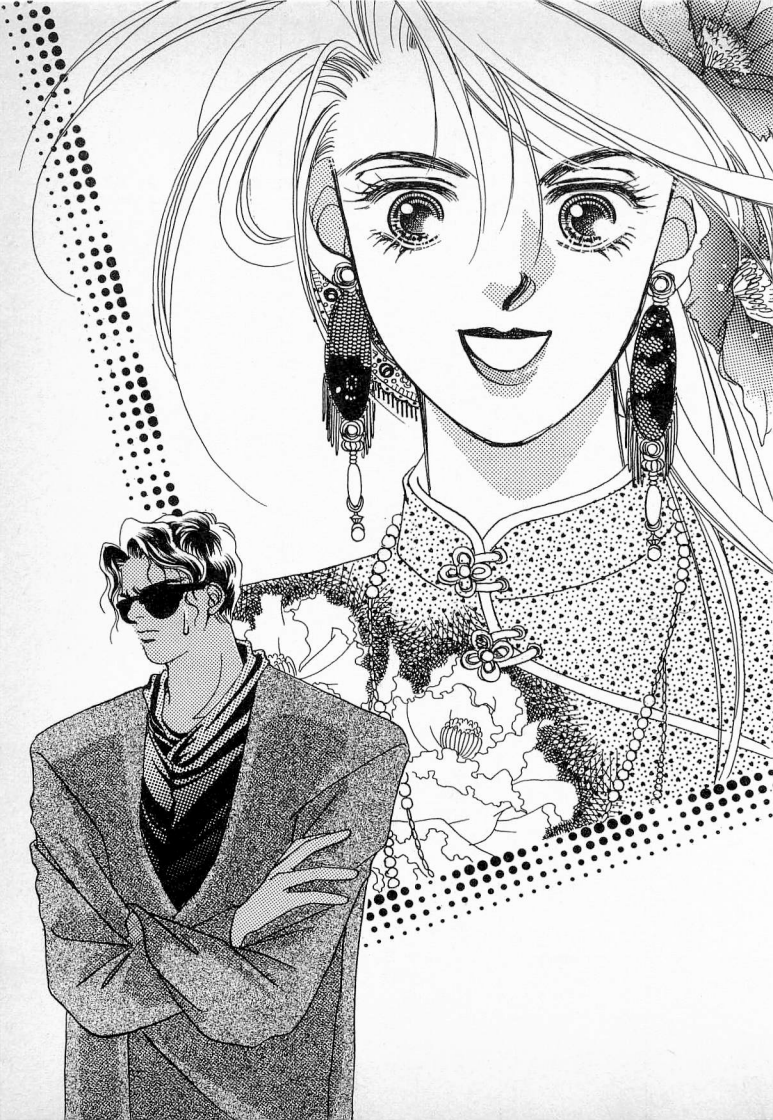
——私は花を腕いっぱいに飾ってついていくわ！　どこまでも、あの人の行きたいところまでね！

……胸の痛みは梨花をさらに美しくしている。半身をひねり、上がりはじめた月を見る面

ざしは銀のように白い。
なよやかにまなざしをあげて微笑んだものだ。ナイトハンド、お前、ほんの少しでも私を好きになっておくれでないの？
――威梨花は女のなかでは誰よりも美しいのよ。
そして〝こい〟と一言いいさえすれば、爪の先までみんなあなたのもの！
美しい爪なのよ。
あなた。

……もの思いにふけっている梨花のもとに、部下のショーンがきて頭を下げた。
「奥様、〝黄金の針〟から奇妙な伝言が入ってきたのですが……」
新界最大の歓楽街、〝黄金の針〟は当然ながら暗黒街と深くつながっていた。
梨花夫人のもとにきたその伝言は、とりきめられた暗号もキーワードも使わずに、ただ、できるだけ早く会いたがっている者たちがきている……としか書いていなかった。
――ショーンが疑ったのも無理はない。
盗賊ギルド幹部の威梨花と知って、いまさら警察がしかけてくるだろうか……にしても、お粗末すぎる手だと思う。
女賊スコルピオンも、はじめは眉をひそめて文面を読んでいたが、黒い髪の少年と背の高

い……けっして素顔を見せない黒衣の男だと知るやいなや、美しい顔がパアッと輝いた。
「ショーン、でかけるよッ……すぐしたくをおし！　そうだ、待って、いちばんきれいなドレスで行くのよ！　新しい髪飾りというのはどこッ？」
「あ……はいッ、ただいま！」
「そうよ、とにかく最高の姿で行かなければ！　靴もドレスもみんなおだし！　でも急がないといけないの……だからね、お前たち、早くしないと生命がないよッ」
……念には念をいれて着飾った梨花が、〝黄金の針〟をおとずれたのは見事に15分後のことである。
黒髪の少年がまず目を輝かせて、うれしそうに笑いかけた。
「アルディーン……まあ懐かしい、妖魔の坊やね！」
「お久しぶりです、梨花夫人！」
それから、かたわらの巧猿とキュロスと、最後の一人を指さした。ワイヤーロープと護符で足どめされている。キュロスがはじめからこの場所を会合に選んだのはじつによかった。
「ごめんなさい、本当はこちらからたずねるべきだったけど、どうしてもこれ以上ひきずっていけなくなって……」
――ナイトハンドは誰も彼も滅びてしまえという顔で、そっぽをむいたままでいる。
ただし梨花の背後にいるお供の青年たちが、みなかなり訓練されたよい動きをしているの



にはすでに気づいていて、ゾッと眉をしかめた。
——あれがみな、梨花の部下だと？
人的資源の最高にばかげた無駄遣いとしか思えないのだ。

スコルピオンはもちろん紅玉を使わせてくれると約束した。
それぱかりではない。残り二つの宝石を捜すために、彼女は涼たちを、ギルドの現在のトップへとつないでくれた。
——盗賊ギルドの長は新界のゴクウという男だった。
抜け目のない目をした中年の男で、香港随一の鍵あけの腕をもってのしあがってきたらしい。
彼はひととおりの話を聞き終わると、非常にすんなりと手助けを承知してくれた。
それにはちょっとした、事情もあったのだ。
彼は巧猿にむかって、さしむかいで話がしたいと言った……。
「あんたが巧猿か、千人会議の噂は聞いたよ！　じつはこちらもあんたを見込んで頼みたいことがあったのさ……それでよければ協力するぜ」
頼みというのは亜香という少女のことだった。
亜香はこのギルドの術士で、占いに強い才をもつ少女だった。

「亜香は当てものの名人なんだ」
隠された財宝の場所や、金庫室の位置を見事に当てるのだという。盗賊ギルドにとってはかけがえのない術士だ。
けれども、この少女はいまなんとしても新界から逃がしてやらねばならない事情ができてしまった。鋭い目で巧猿をジッと見ながらゴクウがいう。
「例の新界総督の裏切り者、高チュアンは亜香の実の兄だったんだ……」
……妹といっても、むごい兄自身の手でギルドに売り飛ばされてきたくらいだった。
「ムカムカしたぜ……いくら素質があったといっても、若くてきれいな娘にクリスタルを使わせるなんてふつうするか？」
「いや、するものか！」
巧猿が力いっぱいあいづちをうった。
魔力を増幅させるという、クリスタルを使う香港呪術最大の特徴は、術士の外見に魔斑を現すことである。
魔斑というのは、くっきりと容赦なく浮かびあがる黒の斑点で、呪術士が100人いれば99人までが奇怪な姿をしている。
盗賊ギルドに売りこまれてきた亜香にも、額から染めたような魔斑ができてしまっていた。
「亜香は……それさえなければ、きれいな娘なんだろうけどな」

実の兄の手によって、いまではもう人並みな姿ともいえない。

買いとったギルドでは、亜香の魔力が重宝され大事にもされた……あの兄のもとにいるよりは少なくとも幸せだったろう。

「だが、そんな兄でも高チュアンの妹と知れれば、いまの新界では連座はまぬがれない。下手をすると生命にかかわるほどやばいのさ！」

高チュアンのために、新界総督の守備隊は全滅した。

親友や身内を殺されて恨んでいる者も数え切れないほどいるのだった。彼らは妹でもいいから八つ裂きにしてやりたい。

――だがそいつはあんまり哀れというものだ。

気づかれる前に、亜香をどこかへ隠してやらねばならない……ゴクウは鋭く光る目で巧猿をみつめた。

「新界はどこも駄目だ。だがあんたならば、いい場所に屋敷を持っているし、この騒ぎが終わった日には、亜香を表に出してやれる立場にもいられそうだ」

「わかった。その娘さんのことはまかせてもらいたい」

事件が終わり、ほとぼりの冷めるまで、巧猿の屋敷の奥深くに保護することを誓った。

ゴクウはようやく満足した笑いを見せて、手を叩いて部下を呼び寄せた。

「おい、貴様！　亜香がどこにいるか知らないか？　ちょっとここへつれてくるんだ！」

だがちょうどその時、亜香はあいにく外へ出ていた。
いつもはめったに表に出たがらないのに……ゴクウは太い眉をしかめた。可愛がっている小鳥が病気になって、どうしても必要な品物を買いに、何か月ぶりかで新界の街に出ていたのだ。
——いけないな、こんな時に表に出るとは……。
ゴクウはイライラと手をうって、手近にいた部下たちを呼びあつめた。
「貴様ら、はやく行って亜香を捜してこい！」
そのころ、新界の海上では1隻の船が香港の外からもどってきていた。
泡立つ舳先のむこうに、白亜の要塞島が見えはじめたら、香港の港まではあとわずかなのだ。
——本島の南西の海上に位置する騎士団の要塞島は、セイラ・テンプルと呼ばれている。セイラとは、彼らの故郷の古語で〝門〟を表す言葉らしい。世界各地からもどってくる騎士達をむかえる門の意味であるという……。
騎士団がすべての戦場にいる騎士たちに呼集をかけてから、はや数か月がたつ……どこよりも離れた場所にいて遅れてきた騎士が二人、ようやくここ新界の海上を行く船の上にいた。

——名はエリックとエディランド。

このところセイラ・テンプルに集まる両刃の剣の紋章を見慣れた香港の者たちでも、この二人が並んだ姿は、思わず見直さずにはいられないだろう。

鏡に映したような相貌の騎士たちだった。

同じ背丈、同じ金髪……ふりむくしぐさまでがそっくり同じ若者であるが、よく見ればエリックはやや物静かで、エディランドはむこう気の強い表情をしてみせる。

——見てのとおりの双子であり、騎士団のなかでも異色のパターンをなすエリュシオンであった。

すでに19年も前のことになるが、レーテア生粋の騎士であったヘーザーズは、とある北の戦線でともに戦っていた二人の息子を一時に亡くしてしまった。

能力も強く、すでに長老となってもよいほどの力ある騎士だったが、二人の我が子を同時に失う悲しみは、老いた胸に癒やしがたい傷をつけていった。

騎士らしく嘆きを表にださず、請け負った任務を果たすまでは、セイラ・テンプルへ帰還の願いすらださなかった彼であるが、いざその自治区での紛争が終結して香港にもどるという時に、死にかけた女がいて懸命に彼に一人の赤子をたくそうとした。

——我が子を亡くしたばかりの者が、死にかけた母親の必死の手で腕をつかまれたのだ。

〝お願いです、どうかこの子を安全な香港まで運んでください！　豊かな街だときいていま

す！　あの街でなら母のない子もきっと生きられるでしょう……どうか騎士さま！〟

彼女はその時死にかけていて、頼れるものは何もなかった。家族とも夫とも、戦火でバラバラになってしまったらしい。子供も、もとは双子だった……だが一人は逃げる途中で引き離されてしまった、と。

――ヘーザーズは、どうしてもその子供を受けとらずにいることができなかった。

彼はその子供を香港にもどるまでのあいだ保護し、香港でどこか適当な施設へ預けるつもりだったのだ。だが赤子はすぐに騎士団の異能の兆候を現すようになり……セイラ・テンプルの幹部たちは、乳飲み子を抱えたヘーザーズの釈明を聞くことになった。

遠く離れたその自治区から、まったく同時期に異様な能力を示すようになった双子の片われが、セイラ・テンプルに送られてきたのは、それからさらに数か月後のことだった。

――以来、彼らは騎士ヘーザーズの侍者として、セイラ・テンプルで養育された。

ゆりかごで夜泣きをする侍者というのも異例なものであったが、成長してからも彼らは一風変わった騎士になった。

いつも二人で行動し、戦地へも無論その組み合わせで行くと言い張った。武術であれ能力であれ、ヘーザーズにしつけられて言うことのない水準だったが、どことなく騎士らしからぬ言動をみせることがたまにあった（特にエディランドのほうが）。

〝あのエリックの内気と、エディランドの軽薄さはなんとかならんのか？〟

足して2で割ると、ちょうどよいとよく言われた。彼らがラーラをなくしたのは11歳の時で、すでに8年にもなるというのに、まだ侍者を捜す素振りさえもみせない。

——最長老エトルタは彼らが香港へもどるたびに、一度はかならず呼びつけて説教するものだった。

〝お前たち、いつになったら別れて侍者を捜すのだ!?〟

そのほかはみなささいなことで、能力だけを見れば申し分ない二人なのだ。だが、それなのに……エリックとエディランドの顔を見ると、長老はここ数年、頭をかきむしるようになってしまっている。

——香港へむかう船の上で、この騎士エリックとエディランドがセイラ・テンプルに帰る最後の一組であった。

それぞれの腕には、彼らのラーラから贈られた紅玉の輝く対の腕輪をはめているのだが、それはまだすこし先の話でいい……。

二人はいま、船縁にもたれてそれぞれリンゴをかじっている。

ふいに、エディランドがふりむいてエリックに話しかけた。

「……俺たちだって考えていないわけじゃないさ。な、エリック」

「侍者のことだね」

前ぶれもなくなぜ話が通じ合うのかは不思議だが、エリックはうなずいて賛成した。



「ラーラは最後まで、僕らによい侍者を、と言っておられたっけ……」

ラーラ・ヘーザーズは騎士としてはめずらしく天寿をつくして逝った。

〝エリック、エディランド……お前たちのおかげで、私の11年は本当に幸せだった。お前たちがいなければ、失ったものの重さに負けてしまう恐ろしい年月だっただろうに〟

戦いの技と力は、教えられるだけのことをした自信がある。

〝だが私にできることはここまでだ。王家に対してもっとも重い務めは、どの騎士も一人だけで果たさねばならない〟

ただ一人しかいない力の後継者を見つけて、我がものとなすのだ。

老いたヘーザーズは両腕をのばして、彼の二人の侍者の髪にふれて笑った。

〝おお、だがありがたいことにお前たちだけは一人ではないな〟

騎士団が始まって以来の異例……二度とはあるまい。

〝私のように安心して逝ける騎士は二度といるまい……エリック、エディランド、お互いに助け合うのだぞ？　新しい果てのない海をごらん。そしていつまでも仲よく……〟

それから何年の間、二人で思い出にひたったものだろう。

――ラーラは優しく、強く、誰よりも賢かった。

時には失った悲しさが終わりなく続いて、このまま懐かしい記憶とだけ生きようと誓いあうこともあったが、ようやくいま、ヘーザーズの言った新しい呼び声が遠くから――それと

も胸の奥からか――聞こえてくるような気配がある。
「決めた！　エリック、俺はこの香港で必ず侍者を見つけてみせるぞ！」
眼を輝かせて、彼は近づいてくる香港のポートを見やった。あんなにも人がいる……あの中にきっと自分だけの魂が！
力いっぱいに手をふってリンゴの芯を海に放り投げると、いつもはそんなことをするなというエリックまでもが、同じことをして大胆に笑って見せた。
「僕も同じつもりさ、エディラ！」
わけもなく肩をだきあって大きな声で笑った。近づく香港の街で、きっと素晴らしいエリュシオンが待つ予感がするのだ。自分にも、兄弟にもきっと似合いの誰かがいるだろう。
「ほら！　あそこにいる子たちだって、相当いい感じがしないか？　あれかもな……ハイ、きれいな子！」
「よっ……よせよ、エディランド！」
こともあろうに騎士団の制装の青年から、いきなり声をかけられた少女たちは、キャーッと笑いさざめきながら埠頭を走って逃げていってしまった。
頬を真っ赤にしたエリックから、さんざんに怒られたエディランドは不服そうにマントをひるがえして横をむいた。〝声もかけずにどうやって知り合いになれというんだ？〟
――だが、エリックの言うことにも一理ある。

「いきなり、かっさらってくるのが騎士団らしいのかも知れないな？」
「そんなことは一言もいっていないぞ！」
エディランドは我知らぬ顔で、香港の海を見つめた。まだ見ぬ自分の侍者……どんな相手だろうか？　ただ一つだけ、もう決めていることがあった。
「侍者を選ぶなら決めているんだよ、エリック。誰よりも強くて、誰よりも美しい騎士になれる子さ！」
「ああ、だってラーラの力をつなげるんだから、そうでなくちゃ駄目さ」
誇らしげにエリックがうなずく。
「シルビアの北斗よりも強くて、イグナチウスのリューよりもきれいな子だ。見つけたらきっと捕まえて俺のものにする！　長老がどう言いつくろっていても、レーテアの愛は奪う愛だ……親からも兄弟からも奪って、もう一つの地平を見せるのさ！」
そう思わないか、エリック……兄弟の問いかけに、彼は静かな目をして答えた。
「わからないよ、エディラ……僕にはまだ。君の言うことは正しいのかもしれない。どの騎士も故郷を捨ててついてきたんだ。嘆きもせず、ふりかえりもせずに。だから人が言うのだろう、愛によって互いに盲目……呪われた誘惑の騎士団……」
セイラ・テンプルの〝両刃の剣〟の紋章。この香港の街においてそれは、凛々しく最強の騎士団の象徴として憧れの目をむけられる印だったが——同じように——美しい子をも

つ母たちに、ひそかに恐れられてもいるのだった。
キッと眉をひそめた相手を、穏やかに見つめかえして、
「でも違うだろう、エディラ？　僕らは誰よりもよく知っている、ラーラのくれた愛が僕らから何かを奪ったかい？」
「何も、エリック！　何も！」
「うん、ラーラはただ僕らにすべてをくれた。だから奪う愛とか、魔性の愛とか……レーテアの愛はそんなものではないような気がするんだ……」
だが、それが何かはまだよくわからないのだ。
「僕はそれを探すのさ、この香港で。きっとこの街でわかる気がする……そしてそれがわかれば、僕のエリュシオンもそこにいるに違いないんだ！」

船が香港の港について、彼らは軽やかにおりたった。
いつものようにまっすぐセイラ・テンプルへの船を探さず……顔を見合わせて、少しだけべつべつに歩いてみようとうなずいた。
エディランドは、にぎやかな皇花街へとむかい。
エリックは、港の裏の静かな小路に魅かれた。
……香の薫りがかすかに漂う、不思議な看板の多い道をたどっていくと、ふいに脇道から

助けを求める少女の声がした。
「お願いです……やめてください！」
「見ろよ、こいつ！　呪術士だぜ！」
下等な顔だちの傭兵が数人、華奢な少女を取り囲んで苛めている。
囲まれている少女の顔は見えないが、地味な服装をして手に鳥籠を抱いて守っていた。
傭兵の一人が、何かを奪った。
「アッ……返して！」
「汚ねえな、魔女、触るんじゃないよ！」
ゲラゲラ笑いながら手に持っているのは、どうやら黒い色のヴェールらしい。
エリックは駆け寄って怒鳴りつけた。
「貴様ら！　よさないか!!」
「なんだと!?」
「生意気な、レーテアじゃないか！」
エリックの制装を目にして一瞬たじろいだくせに、人数を頼んで愚かな反撃にでる気になったらしい。
「ぶちのめして、さらしものにしてやるぜ！」
飛びかかってきた体が大きいだけの男を、軽く数メートル投げとばした。

次にきたナイフの男も、たやすく倒す……そこへまた走ってくる足音があった。
「エリック！　大丈夫か!?」
遠くても、お互いに何かあると気配がわかるのだ。新手のエディランドを見て、男たちはついに足の速いものから我先にと逃げ去っていった。
「待てい、貴様らこそさらしものにしてやるからなッ！」
――残った運の悪い者たちだけ、血の気の多いエディランドの手で港にたたきこまれた。
シーンとするほど静かになったその小路で、エリックと少女だけが残された。
声をかけようとすると、うつむいてふるえていた。
――怖がることはないのだ……。
慣れない優しい言葉をおそるおそるかけて、足もとのヴェールを拾って手渡すときに、はじめて目と目があった。
額から目までも染めたような無残な魔斑、思わずアッと息をのんでしまった。
少女はかぼそい悲鳴をあげて、泥まみれのヴェールを身につけると飛び去るようにして逃げていってしまった。
もどってきたエディランドが、途中から見ていた。
「あれが新界の魔斑か！　まだ若い娘の顔なのにあんな……」
〝可哀相に〟という目で見送って兄弟をふりかえると、エリックはまだ娘の足音の消えた先

を見ていた。

「エリック……？」

「……ああ、エディラ。でもなんてきれいな目をしていた子だろう！」

さて、近づく祭りのあわただしさにまぎれて、香港警察でさえ知らずにいたことなのだが、新界の一角では最近、怪しい行方不明がたびたび起こると噂になっていた。

つないだ小さな船で営業する酒場は新界の名物の一つだったが、それらがときどき、沖へでていなくなってしまうのだ。

店じまいや場所替えもよくあった。客層も傭兵か船乗りばかりで、さほど騒がれるものでもなかったが、それでもこう次々と行方が知れなくなるのは奇妙なことだった。

いなくなった船の近くで、二人づれの歌人を見かけたという者もいた。

――沖は、麗王の新しい遊び場になっているのだ。

その夜。

やはりもやいを解いた小船は、殺し合いをはじめた客たちを乗せて、ゆっくりと沖へ流れていく。忌まわしい六絃琴の調べが絶えず彼らをはげまし、狂わせるのだ。

笑いながら殺戮の中心をみつめていた麗王が、ふと目をまたたいた。

かなりの人数が殺しあう中央にいて、一人だけ異様に強い男がいたのだ。



歳のころはまだ若いが……金髪で、すさんだ頬に大きな傷があった。
麗王の琴の音色で狂ってはいる……狂ってはいても、あきらかに殺戮に慣れた人間で、ナイフだけで凄まじい血しぶきを巻き散らしていた。
まさに目をみはるほどの強さだ。
またたくまに、その男がすべてを殺し終えて床の中央に立っていた。
ジッと見ていた麗王が六絃琴の調べをとめた。
「ここは……どこだ……？」
夢からさめたように、男は自分の手のナイフをみつめ、あたりを見回したが、そこいらじゅうにある死体を見ても、特に顔色も変えなかった。
ずっとひかえていた夏虎の視線に、麗王がかすかにうなずいた。
「……何者かな、お前？」
言葉をかけたのは麗王だった。
「お前こそなんだ？」
答えずに、少年はケラケラ笑った。
——傭兵だな？　しかもまともな仕事はしていない、おそらく賞金首だ。
身に染みついたすさんだ戦いぶりも気に入ったが、それよりも輝くのはこの男の目にある強烈な怨念だ。

「名はなんという、傭兵？」
「セリオス・ルガ」
なげやりな返事がかえってくる。自暴自棄な空気は、麗王主従がこの船に入った時から、この男をとりまいていたと思い出して、より深い笑みが浮かんだ。
麗王の手がふたたび六絃琴に触れると、違う調子の甘い音色が流れだす……。
「心に恨みがあるのじゃないか？　言ってみろ……力をやるぞ？」
誘うように歌ってやると、ギラつくように目をあげて血のついたこぶしを握りしめた。
この傭兵が憎む相手は、彼にしてなお手のつけられない力をもつ相手だった。
「力だと……どんなことでもできるのか……」
「できるとも」
「レーテアの騎士でも、殺れるのかッ!?」
――麗王の瞳が、大きくみひらかれていく。
「俺は……レーテア騎士団に恨みがあるッ!!」
セリオス・ルガという名の傭兵は、我が胸をかきむしるようにしてそう叫んでいた。

第六章　賑わう街角で――新界新総督ミハイル

――さて、場面をもう一度、盗賊ギルドの根城にもどしてもらいたい。
亜香という娘の話をきくなり、キュロスがひどく興奮した顔色で巧猿をふりかえった。
「……その娘が高チュアンの実妹だというのは本当かね⁉」
「そうだという……だが、それが何か？」
やたらに興奮しているのだ。巧猿がうなずくと、キュロスは鉄をねじ曲げるような力で彼の襟をつかんでささやいた。
「それが本当なら、幽霊船に術をかけ返せるかも知れないぞッ！」
――幽霊船と術士の正体は依然、あきらかではない。
何者とも知れない強力な術士が結界を張っていて、新界の同業者たちの追跡も効かないのだ。これまで……術を試みた者たちは逆にその素性をつきとめられて、一人残らず殺られてしまったという。
――新界の古ダヌキ・キュロスでさえも、自分の術で歯のたつ相手ではないと言っていた

はずではないか？

「そうだ！　だが高チュアンめに、血のつながった妹がいたというのは初耳だ。あのな、巧猿、どんな強力な結界のもとでも血縁者の呪声があれば、死人を降ろすことはできるんじゃよ！」

〝亜香というその娘がいれば、高チュアンの霊を呼ぶことができるぞ！〟

新界総督下の裏切り者・高チュアンが幽霊船に通じ、そのあとで殺されたのは確かだった。

その死霊が呼びだせれば……針のような白髪のキュロスがうなずいた。

「降霊はできる！　もちろん奴の知っていることしか聞きだせんじゃろうが……」

それでも、比較にならないほど大きな手掛かりだった。

幽霊船は魔物や術を使って、多くの船を襲い……船員を殺した。殺された乗員の何割かは、邪悪な死人返しの術をかけられ、亡者として術士に使われることもあった様子である。

――だが、高チュアンただ一人だけは、生きた目で幽霊船の内部を見ているはずなのだ！

「……妖魔の坊やも力を貸しておくれ」

「はい、キュロス」

結界と……元宵節が近いために、魔力の場がとても不安定だとキュロスが言った。降霊中に、万が一招かれざる魔物がきてしまったら、その時はアルディーンの出番になるのだ。

高チュアンという男自身、極悪の犬だった。
「おそらく非常に性の悪い死霊がくるはずだ……心して、スキをみせてはならぬぞよ」

「亜香がもどりましたぜ」
ゴクウの部下の一人がそう告げにくると、すぐあとから華奢な少女が連れてこられた。
ギルドの呪術士・亜香である。
こうしてギルドの内部にいてさえ、いつもうつむきがちに歩き、その額から目にかけて翼のような魔斑が広がっている。
……地味な黒い着物の裾が、泥によごれているのを見たゴクウが声をかけた。
「どうしたんだ？　何かあったのか？」
亜香は小声でなんでもありません、と答えた。
「ただちょっと、港で傭兵に脅かされて……」
ゴクウは眉をひそめたが、何も言わなかった。それよりも、いまは伝えねばならないことがある。
「亜香、そのお方が五星家のレン・巧猿殿だ。お前はしばらくの間、そのお方の屋敷にかくまってもらえることになったぞ。いいな？」
「はい、お頭。わかりました」

そう言って頭をさげながら、すこし不安そうな表情で巧猿を見た……レン・巧猿が、ごまかしのない目でうなずき、隣に新界のキュロスがいるのを見て、はじめてホッとしたような表情を見せた。

この少女は魔斑と……新界を裏切った兄のために、いま二重の意味で生命が危ないのだ。

キュロスの口から、降霊の話を聞くと、青ざめた顔でうなずいた。

「心配せんでもええ。術自体に危険のあるものではないし、それにここには敵方とはべつの魔もついている」

はじめて会う亜香の魔力を眼力ではかりながら、新界のキュロスは成算を感じていた。

――なかなかいい呪力だ。若くとも強い術士なのだろう、フム。

だが目に、はかない陰がある。望まずに、兄の手で術士にさせられた娘。

老練な術士キュロスの目には、クリスタルを使わなくてもこの娘の不幸なさだめが見えるような気がした。哀れなことだ。瞳にこうした曇りのある者の……たとえば恋は、キュロスの知る限り実ったことがない。

――恋も希望も知らずにすごすのが、この娘の幸せということか……。

それから目をそらして、すぐ仕事にかかった。

「死霊返しは、この場ですぐに行うほうがいいな……香はあるかな？　ここに六絃琴はあるか？」

キュロスはゴクウに広間を提供させ、複雑な儀式の準備をした。必要な香をとりよせ、こみいった魔法陣を床の上に描きあげる。

亜香の手のひらから血を少量取り、銅の鉢にうけた。

彼女と高チュアンのあいだの血の絆が、いかなる結界も越えて、死者をこの法陣の中に呼び寄せるだろう。

キュロスは、自分と巧猿たちを保護する目的の結界をその離れた場所にひとつ描いた。

最後に、亜香のためだけの結界をべつに作ると、ゴクウの部下たちの手を借りて、少女に法陣を踏ませぬようにして文様の中央に仰臥させた。ゴクウはそのあと部下たちをさがらせて、以後呼ぶまでは誰も近寄るなときつく命令した。

亜香は胸に自分のクリスタルを抱いて、ジッとしている……このクリスタルが術の間の亜香の身の護りとなるのだ。

術の先導はキュロスがやるが、中心になる術士はこの場合、亜香であった。

「……術士に負担が大きい術だから、質問は一人一問だけにしてもらおう」

キュロスはその場に残っていた顔を見回して言った。

巧猿、涼、ナイトハンド……そしてギルドの頭ゴクウ。

「あと、死霊になっても悪党は悪党だ。こういう相手を呼びだした時には、よく訊ねることを考えねばならん」

死者となってさえ、邪欲に目の眩んだままだ。こういう魂は生きている者をねたんで、偽りこそ言えぬはずだが、答えにとんでもない罠をしかける時がある。

「できるだけ、イエスかノーかで答えられる問いかけにしたほうがよいぞ」

キュロスは、ゴクウのもとから借り物の六絃琴を手にし、しばらく調子を見てからゆっくりと鳴らしはじめた。

――六絃琴は旧世界の遺物の一つでもある。

弾き手によっては呪具としても使うことができると知られていた。ただクリスタルと違うのは、弾き手にそうとう強い魔力がなければ、まったく術にならないことだった。

香港ではむしろ美しい音色の楽器として、人々に愛好されている。

……巧猿はキュロスがこの呪具を使うところをはじめて見た。

大きな術でなければ、使うことはないのだろう。曲が流れはじめた時には、思わず椅子のひじをつかんだ……地の底に吸いこまれそうなめまいがしたからだ。

涼の目には、亜香という少女がしだいに眠りに入っていく姿が見えた。

眠りながら亜香が、その曲にあわせて歌う。かぼそい奇妙な歌声が、徐々に……酷薄な男の声に変わっていくのがわかったナイトハンドが、わずかにうめいたようだった。

歌声は、たち切れたようにやんだ。

『俺に……なんの……用だ？』

〝高チュアン！〟、生前を知っているただ一人のゴクウが、一気に青ざめて歯をくいしばった。生きていた時、亜香があれほど怖がっていた兄の声だった。

「新界総督下の将校、高チュアンか？」

『そう……だ。おお……誰かと思えば、貴様……キュロスだな？　新界の、おいぼれ犬め！　よく……この……亜香をつきとめたな……ハハハ、こいつは確かに俺の妹だった。売りとばしてやっ……た……がね！』

「お前さんが、最高に高く売りとばしたことは知っているよ」

――そのために、少女は額に消えない魔斑をつくっているのだ。ただ美しい娘よりも、術が使える術士のほうがはるかに高く売れる。

キュロスは舌うちして、〝外道めが！〟とつぶやいた。低い声で笑い続ける高チュアンをさえぎって、

「高チュアン！　お前を呼んだのは聞きたいことがあったからだ！」

そして巧猿らに〝早く問え！〟とせかした。はじめにゴクウが、チュアンの手で裏切った新界総督の守備隊にいた、ギルドの数名の関係者について知りたがった。

名前をあげて、

「……一人でも、まだどこかで生きているってことはないか？」

みな殺しだね！　というのが死霊の答えだった。ゴクウが火のような呪いを口走った。



数もまた、ごまかしがきかない。
「幽霊船の術士は人鬼を使うな？　いま……何人だ!?」
巧猿の問いに、高チュアンの霊は二人だと答えた。
『2匹だ……俺が死んだ時にはな……』
「すると現在敵方には、術士一人に人鬼が二か……」
つぶやく巧猿のあとから、ナイトハンドがゆっくりと訊ねた。
「お前は……魔船の術士の正体を知ったのか？」
きわどい質問だった。もしイエスと答えが返れば、どんなことをしても吐きださせてやるつもりだったのだが、
『俺は……知らない。奴らは、最後まで素性を隠していた……』
神経を研ぎ澄まして聞いていたキュロスは、かすかに眉をあげた。
――こ奴、怯えておる。
死霊となってからも、怖い相手なのだろうか？　いや……むしろいまになってのほうが、彼は恐れていたかもしれない。
『あいつは闇のような色の、黒のクリスタルをもっていた……』
かすれた風のような息づかいで、高チュアンが言う。その一瞬、たしかに部屋の中の闇がざわめいたようだった。

「黒のクリスタル!?　それはどういう意味なんだ!?」

誰か立ちあがりそうな気配がしたので、あわててキュロスが制した。それから彼自身の質問として、以前の幽霊船とのかかわりを訊ねた。

――32年前にも幽霊船と呼ばれた船があって、その時の術士はイリヤという新界の魔女だった。こんどの魔船の術士は、イリヤとなんらかの関係がある者なのか？

「高チュアン、お前は知っておるか？　イリヤとつながりが、あるかないか？　もし、知らなければ答えるなよ」

『かかわりは、ある……俺は聞いた』

高チュアンの霊は知っていた。寄港地で、一度だけ供の人鬼が言った言葉を聞いたのだ。

〝日に日にイリヤ様に、似てこれる……〟

『そう……言っていたぞ……』

「よろしい……そして巧猿、どうやらそろそろ術を解かねばならぬようだ。術士が耐えられなくなる」

キュロスが六絃琴の音を絶やさずに、巧猿をふりかえった。亜香に、もしものことがあってはなるまい。あと一つ、最後に何かたずねるとしたら……涼がハッと気づいて叫んだ。

「キュロス、ミハイルのお父さんのことを聞いてみて！」

新界総督ウィリアム・几城の生死は、いまのところまだ不明であった。

ミハイルはその嫡子で、嵐の夜にたった一人、巧猿の船に救助された生き残りだ。
「聞いてよキュロス！　ミハイルのお父さんはどうなったんだ？　万が一、生命があるならいまはどこにッ……」
だがそのとたん、死霊がキュロスにもおさえかねるほど激しく騒ぎだしたのだ。
地獄の底から響くような高笑いがして、部屋じゅうがきしむ。
『新界総督の生死だと!?　知らない……俺は知らないね！　ハハハ、新界総督は生きているか……死んでいるか？　いいや、俺は死んでいると思うぞッ……大笑いさ!!　ウィリアム・几城はなあ、もうあとかたもない！』
「ここまでだッ、術を解くぞ!!」
キュロスが大声で叫んで、魔法陣を壊した。
突然、きしんでいた暗闇の叫び声がとまった。明るささえも増している……横たわっていた亜香が、よろよろと起きてあたりを見回した
「亜香、よくがんばったな……」
キュロスがめずらしい、いたわりの声をかけてやった。兄とは言え……あのように邪悪な魂を身内に呼び返すのは、やさしい仕事ではない。邪悪な精神と生涯のすべてが、わずかな時間につきぬけて消えていった……これほどの悪があったとは、肉親とて知らなかったはずなのだ。

何を見たかはおぼえていない、だが青ざめた亜香にキュロスが言う。
「かまわずに忘れることだ……いいな？」
頬に涙がひとすじ伝っていた。
――亜香は小さいころからずっとこの兄が怖かった。

亜香を新界からつれだすまでは、ゴクウが信頼できる手の者にやらせると言い、巧猿は屋敷で少女の保護を約束した。
キュロスによる強い結界が張られているので、都合もよいだろう。
すべての段取りがすんで外にでた時、巧猿がふとキュロスをふりかえって首をかしげた。
「なあキュロス……幽霊船の目的は何なのだろう？」
32年前の幽霊船のイリヤは恐ろしい術士ではあったが、目的はおおがかりな略奪だったようだ。
今回の術士は違う。はじめ、海賊船のように見せかけていたが、略奪が目当てではなく黒い術を完成させるのに必要な犠牲を集めていたのだった。
正体もいまだにわからない。
「だが考えてみれば、僕たちにはまだ奴の本当の目的すらわかっていないんだ」
――彼はなんのために、幽霊船を復活させたのだろうか？

〝黒のクリスタル〟、高チュアンの死霊の言った言葉は、巧猿にはひどく気にかかった。新界にかつて、そんな色のクリスタルを所持していた術士は一人もいなかった。

「32年前のイリヤと、どうやら本気でかかわりがあるとはわかったものの……」

それは、むしろ魔船の素性の謎を深めたと、巧猿には思えていた。

「もしも魔船がイリヤの残党の復讐なのだとしたら、狙われるべきは追討にたずさわった本島だけのはずだろう？　だが実際には2島が同様に襲われている」

――イリヤという魔女は新界の人間であり、生地に愛着こそあれ恨みはないはずだった。その残党がいたとしても、新界の者であるはずだった。

だが……韻長官の怒りが新界をあやうくしかけた時にも、魔船は無関心だった。

「なぜだろう、キュロス？　奴が目的とする獲物は本当はなんなのだろうか？」

キュロスの目が巧猿とであった。一瞬だったが、キュロスはひどく年老いて疲れたように見えた。それから彼はゆっくりと首をふった。

「わしにもわからない。黒の術士は……黒であるがゆえに、生命を憎むことがあるそうだ」

黒いクリスタルはたぶんイリヤのめざした大きな呪法なのかもしれない。だがイリヤという女の周囲に、あの当時彼女の呪法を継げるほどの者はいなかった。

それが彼女の残党でないとしたら、誰なのだろう？

わからない……キュロスはふたたび首を横にふった。ほとんど聞きとれないほどの声で彼

はつぶやいた。

「まだ一つ……わしが試みていない術があるのじゃが……」

――新界では、すこしずつ祭りの準備がはじまっているようだった。

「また間違えた！　この不器用者めがッ！」

ピシリともものさしの鳴る音がして、キュロスが怒鳴っている。五星家はレン・巧猿の屋敷の……特に奥まった1室である。

ちかごろ数日、この部屋からたえまなく騒音が聞こえるという家人の評判である。昼も夜も、耳をふさぎたくなるような楽の音が聞こえる。むやみに扉を開けると、気の立った呪術士が襲ってくるので、メイド嬢らは近づかないようにと注意されていた。

――キュロスが涼に六絃琴の特訓を続けているのだった。

六絃琴は旧世界から残っている術具の一形態で、もとから魔力の強い者が弾きこなせば、クリスタルにまさる強力な技となる。

――旋律の力を借りて、内在する魔力を形にするものだ。

かつては多くの術士たちが使い、自分自身の呪歌をあみだしたという。感応力・魔力を増す訓練にもなった。複数の術士の力を、共鳴によってつなげることもできた……。

巧猿に話しながら、キュロスは一度だけ善意のある笑顔を見せた。

〝幸いなことに、あの坊やにはどうやらクリスタルと共鳴する力がないようなのじゃ、だから六絃琴を教えて、とにかく結界だけでも自分で張れるようにさせるぞ〟

繰り返していうが、クリスタルを利用した術を一度でも使うと、奇怪な魔斑が顔に浮かぶのだ。〝あの可愛い顔をわしのようにする手助けなぞは、寝覚めが悪いというものさ〟

しかしながら、六絃琴による魔術は、クリスタルのそれよりもずっと習得がむずかしい。

――何より、この楽器を自在に弾けなければならないのだ。

六絃琴は最上のものを巧猿が用意した。

銀で細工された美しい六絃琴を渡され、キュロスがまずお手本に楽譜の一つを鳴らしてみせた時には、少年は心からよろこんで瞳をいっぱいに輝かせた。

〝すぐに弾いてみたい！〟

朝だったのだが、食事などはあとでもいいと自分から言いはった。ワクワクしてコーチを受けはじめたのだが……。

「下手くそ！　最初からやりなおせッ……どこにその指をかけておるつもりなんじゃ!?」

以来、昼も夜も特訓が続いている。双方がはっきりとやつれだしていた。

「ねえ、キュロス……頼むからなにか食べさせてくれない？　おなかがへった……アウッ」

「やりなおしじゃ！」

赤い筋がまた1本増えた手で、あわてて涼がバラバラの騒音をたてる。それは数にして81

枚めの楽譜だった。

――自分で聞いても頭がイライラするよ。

キュロスはそろそろ気が狂う寸前に近づいている。〝なぜできん!?〟

怒鳴られても涼にだってその理由はわからない。

――物覚えのよい涼は、基本の指使いはすぐに体得していた。

しかし術具として使うならば、まだその先があるのだ。キュロスが涼に会得させたかったのは、魔力によってこの楽器の絃を共鳴させることであった。

涼の手にあるのとはべつに、もう一つの六絃琴をもってきて前に置くと、手は触れずに共鳴させてごらんと命令した。

一度は手本を見せる。

部屋の端の離れた位置からキュロスが六絃琴をかなでると、卓上の二つめの楽器が誰の手もなしに高らかに鳴りはじめたのだ。

しかも、いつ聞いたよりもはるかにきれいな響きだった。術士の魔力による時、六絃琴とは格別のものとなる。

――その音色は、一つで十五の音色を圧すると言われていた。

〝最上の弾き手ならば、指さしただけで六絃琴を歌わせることができたともいうぞ〟

不思議そうに目をみはっていた涼はしかし、心のどこかでやり方を感じとっていたらし

い。

わずか半時後に、二つめの六絃琴が鈍い音をたてて共鳴をした。

〝オオ、いいぞ坊や！　さすがの妖力じゃ、こんな早い習得はきいたこともないわい！〟

――そして、こんなにとほうもなくヘンな音色も！

それがわかってくると……キュロスの眉が直角につりあがってきた。

共鳴だけはしたが、いつまでもいっこうに曲にならなかった！　ある種の魔力があるのはわかる……いまやふつうに弾いても、聞いたこともない妙な音がでるようになったからだ。

二台の六絃琴が、ビヨビヨ騒音をぶつけあう最中で、まず巧猿が耳を押さえて駆け込んできた。

〝キュロス！　この音はッ……もう少しなんとかならないのか⁉〟

〝駄目じゃ、とにかく1曲を弾かせないとやめられぬわい！〟

――1曲でも弾けるようになれば、この坊やの妖力なら結界くらいは、たやすく張れる……その1曲が！

その1曲が最上級の結界となる。促成栽培は承知しているが、これほどの魔力があれば、できるはずなのだ。なぜ、できない⁉

――そうだ、わかったぞ……。

異様な底光りのある目をした術士がうなずいた瞬間、涼の背筋にも悪寒が走っていた。

――この坊やはやむなく攻撃された時以外に、魔力を意識して使ったことなどないのだ。つまり〝魔力を外界にだす努力がたりない！〟

いきなり、ものさしで打たれて涼は飛びあがった。

「よろしい！　こうなれば特訓あるのみじゃ！　覚悟せい……これまで怠けていたぶん、とりもどさせてくれるわ!!」

誰か、助けて。見回す涼の前に、キュロスは楽譜をドンと置いた。

六絃琴の呪歌には、わかっているだけでも数百種類あって、人によってどれが共鳴・展開しやすいかは違ってくる。

〝こ……こうなれば、お前さんにぴったりあった曲が見つかるまで根比べだ！　できねば死ぬまで探そうなッ……のう坊や？〟

嫌ですの一言が、顔が怖くてどうしても言えなかった……それからすでに数十曲を、泣きながら弾かされたのだ。不眠不休、食事も抜き。手をとめるとものさしでバシバシなぐられた。

……キュロスは額の汗をぬぐって、楽譜の束から82枚めをひきだしていう。

「よいか……この怠け者めが……魔力に集中せいと、百回は言ったはずじゃな？」

ちなみに、涼にはそれがまったくわからない。ただ譜面のとおりに弾こうと必死である。

キュロスの顔を見あげて、あいまいにうなずいた。

術士はひきつったような笑いを浮かべた。

「まだわかっておらぬようじゃな？　よいわ、もう何も言わん……とりあえず、必死になれ！　貴様のありったけをぶつけて共鳴させい……魔力を火のように望んでみよ!?」

言われたとおりに涼は、ありったけの集中力をぶつけるべく努力した。必死になるぞ！

言われたとおりに、僕は火のような気持ちにならなくては！

ええと現在、火のように望むといったらなんだっけ……。

――まず六絃琴を港に放りこんで、お祭りを見にいきたい！　キュロスはものさしで打たないでほしい！　少しでいいから寝たい……なによりも昨夜から、食事をしていないんだッ！

「違う、違う、違う!!」

子犬がキャンというような声と同時に、ドアが開いて巧猿が入ってきた。

「様子はどうだい……と、わかった」

右手を押さえて恨めしそうな顔をしている涼と、こめかみをさすっているキュロスを見て、あわててまわれ右をしてもどりそうな様子を見せた。

「待たんか、巧猿。逃げるんじゃないわい！」

キュロスが襟首をとらえて引きもどす。

……巧猿はキュロスに、術士としてのアドバイスを求めにきたのだった。

「ミハイル・几城殿のことなんだが……」
——ミハイルが？
その名前を聞いて、涼の目がすこし見開かれた。
新界総督の嫡子、ミハイル・几城は16歳で同い年だった。
勝ち気で気丈な緑の目の少年で、幽霊船から助けられたあと数日、回復のためにこの巧猿の屋敷に滞在していた。
涼は一種の護衛兼として同じ部屋で寝起きしていたのだが、あかりが消えるとしゃべりだすのは少年も少女もまったく同じである。
大人たちが不思議がるほど短い間に、彼らは生涯の友をつくりあげてしまう……ミハイルは新界の街、父のことなどを話し、涼は真夜子のこと、ネオ・ナリタのことなどをすっかり打ち明けた。
——魔には慣れた新界の16歳の御曹司と、育ちのよい妖魔の子は互いに親友になった。
別れる時はきっと、きっと、と、さんざん手をふっていったのだが……。
「ミハイル・几城殿の周辺に、近ごろその……噂があるんだ」
「と、いうと？　どんな」
よくない、と巧猿は眉をくもらせた。
「彼はどうも、記憶喪失らしいんだよ……」

ミハイル・几城が幽霊船の魔手から助けられたのは、それほど前の話ではない。

その時、彼は人鬼や使い魔たちの妖気に、かなり長くさらされていたはずなのだ。邪悪な妖気を長くあびていると……体質にもよるが、さまざまな後遺症が残る場合がある。

ミハイルは救助された翌日に、高い熱をだして、記憶にかなりの混乱をきたしていた。

「それがどうやら、まだ続いているようなんだ」

不安げに巧猿が首をかしげる。

巧猿の屋敷にいた期間では、ミハイルの発熱はすぐに終わり、記憶の混乱もその日のうちにおさまったように見えたのだが。

今日になって、千人会議場で五星家のハイシャ・Bが彼を呼びとめて、この話を伝えたのだ。

「とにかく几城殿のまわりは、やっきになって噂をもみ消そうとしているが、もうかなり知られてしまっている」

〝ミハイル・几城に故障がある！〟、この噂はいまの新界にとって大きな陰であった。

香港という自治区の特殊な相続法によれば、警察署長などのある種の役柄は代々世襲となっている。

新界総督がその一つで、五星家・几城の家が継ぐことになっている。父であるウィリアム・几城が死んだと確実になってきたいま、次の総督を継げるのはその第一子ミハイルのみ

なのだ。

——新界は現在、かつてない困難な局面にたたされていた。

「ただでさえ、若すぎる大役というのはゴタゴタがつきまとうものなんだ」

過去のいくつかの例を思い出して巧猿は言った。

ミハイル・几城の故障は、いまのところそう深刻なものではないらしい、と巧猿は聞いた。

「自分自身のことや重要事項の記憶は、さすがにはっきりしているそうだが、身近にいる人間の名前や階級なんかが、ふとでてこなくなるとか……」

やはり魔船に間近に触れた後遺症だろうか？

キュロスは〝間違いなく、そうだ〟とうなずいた。

「しかし、そいつは簡単な清めの術でなおせるはずだぞ？」

「ミハイル殿のまわりも、そう考えている。問題は、彼が頑としてそれを拒否していることなんだ」

「……また、なぜ!?」

たぶん……魔船の記憶のせいではないかと巧猿が言った。

「香港では最強の守備隊が全滅した光景を、ミハイル殿はぜんぶ見てしまったはずなんだ」

その恐怖は、想像するだけでも凄まじい。

気丈でも16歳の心では、すべてを明確に思い出すのはとうてい耐えられないことだろう。恐怖が彼を霧のなかにとどめている……。

「だが、それはいかん……危険じゃ。そこまで魔の痕跡が残っているとすると、これからどんどん記憶の混乱が激しくなるばかりだぞ」

「とにかくミハイル殿は、断固として術士の治療を受けないんだ」

この噂を巧猿に伝えたハイシャは、さらに不穏な空気を心配していた。

〝ミハイル殿がこのまま治療を拒否すると、彼の相続に問題が起きてくる可能性があるのだ！〟

新界総督は本島長官と並ぶ大任であり、まして現在の状況のなかで、故障のある相続人がそのままで認められるわけがないのだ。

「まだ16歳だというだけでずいぶん難しいのに、記憶に混乱がある総督はなァ……」

タメ息をついた巧猿が、椅子を立って窓のそばによった。

――気の毒に、わずか16歳の肩に新界の荷がかけられている。

「父君さえ生きておられたら、こんな事態には間違ってもならなかったんだ」

新界総督亡きあとの第一継承者はミハイル・几城である。

仮に……ミハイルの相続が危うくなると、後見人という形の問題がでてくるはずだった。

重要な役職や富家の後継者が、幼いか、あるいはなんらかの重大な故障をもつ場合には、

香港では後見人が立つ。
「後見人……それがいい時もあるが……」
巧猿とキュロスは意味深に視線をかわした。
五星家（ファイブ・スターズ）しかも新界総督ともなれば、その後見人は胸一つでたいへんな利益に近づく……特に新界総督の権力は素晴らしい。
「ミハイル殿のまわりには、まだ具体的な名前はあがっていない。だが、野心のある人間はすでに水面下で動きはじめているに違いないと思うよ。むしろそのほうがずっと危険だ！」
新界新総督ミハイル。
「いちばんいいのはなんとかして彼を説得して、治療を一刻も早く受けさせることだ！」
――だが、その結果あの少年の精神がバラバラになるほどの答えがでれば……。
本人のことを思えば、ためらいはある。
「それじゃというて、若い総督のまわりには、狼どもがたかりはじめている様子ではないかね？」
キュロスはせきばらいをし、
「気持ちはわかるが、いまつけいられるスキを与えてはならんじゃろう……」
巧猿が強くうなずいた。
――やっかいなことに、五星家の几城には親族が、わりと多くあって、後見人になりうる

ほどの名前が複数、存在しているのだ。
数人がすでに、水面下で暗闘をはじめているとの情報をハイシャはつかんだらしい。
〝新界の事柄に本島が干渉するのは、原則では好ましくないのだ〟
だが今回は、せめて……事態が落ちつくまでの間、うしろ盾になる人物を見つけるべきかも知れない。ハイシャはそう言って去っていった。
具体的に何かがある、ということではないかもしれないが、
「僕はアリエナに頼んで、ミハイル殿の身辺を警備するガードを送ってもらうつもりだ。とにかく、いまスキを与えたらひどく危険なんだ……」
――わずか16歳の肩に、新界の運命がかかっている。
それぞれに、目を閉じ考えずにはおられなかった。
ずっと黙ったままで巧猿らの話を聞いていた涼が、この時ソッとドアからでていったのに、二人は気づかなかった。
六絃琴はさすがに持ってでたが、譜面のすみに書き置きがのこされている。
〝ミハイルに会いにいきます。晩ごはんは、いりません〟
新界総督の執務室に、ミハイルはいた。
つやのよい赤毛と、翡翠のような緑の瞳の少年である。きつく引きしめた口もとに気丈さ

があるが、瞳にはどことはいえない絶望的な陰がただよっている。
すこし前に、彼がこの部屋に入ってきた時には、かげりはまだほとんどなかった。
子供だったころから見慣れた執務室だ。一歩、足を踏みいれた瞬間に、異状に気づいたのだが……。
――何かが違う！
ただ……それがなんなのか、はっきりと思い出せないのだ。懸命に思い出そうと努力して、ようやく右手奥のドアがなくなっていることに気づいた。
総督のSPなどがいるべき控え室ではなかっただろうか？
ガラスとオークの机のインターホンを押すと、急ぎ足の男が入ってきた。
「控え室のドアはどうしたんだ!?」
「いささか落ち着かないと思いまして……」
男はいんぎんな笑顔で説明した。
――落ち着かない!?
執務室で何かがあった時に、たちどころにガードが駆けこんでこられるための通路なのだ。緑の目がカッとなった。
「落ち着く、落ち着かないの問題じゃないだろう!?　あのドアは父上に万が一の危険があった時に必要なッ……」

ツカツカとまっすぐだった歩調が、断ちきられたようにとまった。

「父上……ではない。僕だった……」

目を閉じて、ふいにうつろになった口調の前にいて、男は穏やかな顔をまったくくずさなかった。

目をひらいたミハイルはあたりを見回した……右手のドアのほかにも、足りないものがいくつもあるような気がした。

男は、笑顔をくずさずにミハイルの腕をとって、総督の机にむかわせた。もう一度インターホンを押すと、数人が書類を運んで入ってきた。

「すでに目を通したものばかりですので、どうかサインだけをお急ぎください」

「いや、ちゃんとぜんぶ見て許可するから」

誰も表情を変えはしなかった。しかし渡される書類を読みながら、ミハイルはときどき目をあげてあたりを見回さずにはいられないのだ。

突然、ペンを投げだすように置いて立ちあがった。

「そうだ！　おいッ、なぜ彼がいない!?」

父総督からの第一秘書で、老練な実務のエキスパートの部下がいなかった。総督が執務中にはつねにそばにいたはずの誠実な顔が、この場のどこにもない！

「〝彼〟とは……？」

「彼だ！　第一秘書のッ……」

はじめに入ってきて、ピッタリとそばにいる男がわざとのような不思議そうな笑顔で首をかしげた。必要な人員はずっと全員そろっている、と彼は言うのだ。

――そんなはずはない！　誰か、いちばん重要な人員が一人かけている。

「彼なしでは実務にさしさわりがあるはずだろう？　どうしていないんだ？」

「困りましたな！　名前でおっしゃっていただければ、わかりますのですが」

「……名前……」

青ざめて何度もくりかえすミハイルを、男は黙って見下ろしていたが、しばらくたってからほかの者たちに首をふって、

「どうやら総督はお疲れのご様子だ。これは我々で処理しよう」

「ア……待ってくれ」

〝ごゆっくり、お休みくださいませ〟と言いながら、すべるように出ていってしまった。

一人になったミハイルはやがて、うつむいて頭を抱えこんだ。

もしかすると、いなくなったのは一人ではないのかも知れない……冷たい塊につつまれたようなミハイルは、もっと不安なことを思いだしてくちびるをかんだ。

――まるでいるのが当然のような顔で、自分のそばにピッタリついていたあの男。あの男が誰か、どうしても思いだせないのだ。

記憶が……毎日、あやふやになっていくような気がする。
それと同時に――まるでスキをつくように――毎日、不審な人物が周囲に増えていくような気がしてならないのだ。あの男を中心に、見知らぬ顔が加速度をつけて増えていくような気がする……。
ミハイル・几城にも、おぼろげに事態はわかっていた。まるで隔離されているかのような、この部屋のドアをにらむようにして……どうすればいい!?
瞬間、あえぐように喉がなった。
――それでもッ……治療はいやだ！　どうしてもいやだ!!
思わずあとになるほど自分の手に爪をたててしまった時に、
――窓の外で、物音がする……？
ふりかえると背後の窓ガラスのむこうに、黒い髪の少年がはりついていた。
「涼!?　ここは、12階なんだぞッ」
〝いいから、開けてよ〟手ぶりで催促するので、長らく開けたこともない天窓を開いてやるとヒラリと下りてきた。
「やあ、会いにきちゃった！」
片手に六絃琴をしばって、あちこちに羽毛をつけている……人ではない身軽さで、建物の外壁を伝ってきたのだが、

「誰にも見つからなかったけれど、鳥がすごく警備に関心があるみたいで……行きとどいてるね、君のとこ」

——あっきれたなあ！

こらえきれなくなったミハイルが笑い出すと、ようやく涼も笑顔になった。

「うれしいな。どうして、また急にきてくれたんだい？」

「六絃琴のレッスンが嫌になった！」

キュロスはさぞ怒るに違いないけれど、今日はもうどうしてもサボることに決めたのだ。

——そうだ。僕も、もうどうしても……。

ふたたび陰の生まれた緑の目に気づいて、涼はすぐにそばに行き、よりそって腰をおろした。

ビルの下の街では、もう飾りや屋台が出はじめていると知っているかい？

「ああ、もちろんだよ。元宵節の日まで、新界ではずっとこのままカーニバルさ。新界の祭りは、本島よりもひと足はやいんだ」

「ふうん」

涼がどこか上の空で返事をした。巧猿の話によれば、香港の名家の子供というのは誘拐を恐れてほとんど屋敷の外へはでない。当然、街も歩かない。

風にもあてられないように育つというが……どうだろうか？　どうも、そうではないよう

な気がする。そう言う巧猿自身があやしいものだし、ミハイルにしたって……。

〝本当は行ったことが、あるんだろう？〟

勝ち気そうな目がキラッと光った。

「もちろん！　抜けだしたもんさ！」

瞬間、涼がグイッとその上着をひっぱった。〝それなら、これから抜けださないかい⁉〟

自分はまだ新界を一人で歩いたことはないし、祭りもはじめてだ。ミハイルがついてきてくれれば、どんなに心強いかしれない！

――今日だけだよ！　ミハイル。今日だけ、何もかも抜けだしてでかけてごらんよ！

額をつけあうようにして見交わす小悪魔たちの目がグングン光を増す。

〝行っちゃえ、行っちゃえ！　もう冗談じゃないや！〟

〝おかしな相談は、やりたい連中にまかせて行こう！〟

カーニバルがもうはじまっているのを、大人たちは知らないのだろうか⁉

「ようし、夜まで大丈夫かい？」

「置き手紙してきた！」

足どりも軽やかに、彼らは立ちあがった。

その夜。

新界海上の孤島、セイラ・テンプルの礼堂では、レーテア騎士団の集会が行われていた。礼堂にレーテア騎士団の全員が集まっていた……騎士と侍者、あわせて700名ほどが、整然と列をつくる。王家の決定を伝えられるのを待っている。

——香港のレン・巧猿に請われて助勢するであろうことは、かなりの騎士たちにすでに知れ渡ってはいたが、騎士団ではあらゆる決定は王家の言葉として伝えられてはじめて動かぬ約束となるのだ。

純白の王衣を着けた兄王レアルが、中央の扉より入ってきた。

なみいる騎士たちをみわたして、澄み切った笑顔を見せる。

「王家の子らよ！」

——それは、レーテア王室の習わしであり、王は騎士団にこう呼びかけることが多い。

まだ25歳をすぎたばかりの若い王だ。

その場の騎士の中には、もちろん王の父親ほどの年齢の者もいたのだが、我が子と呼ばれて違和感を感じる者はいない。

——それだけの威と懐かしさがこの若者にはあった。

代々の王のなかでも、秀でた輝きを持っている。王家がいつよりも困難な流浪の旅にあるこの時に、ほかならぬこの王を得ることができたのは騎士団の強運にさえ思われるのだ。

聡明で、静かな勇気がある。そればかりでなく、どの騎士もわけへだてなく愛し、はっき

りと心を一つにすることができた。

「王家の子らよ、みなよくもどった！」

ついに故郷への旅にでるのだ……その言葉を聞いて、礼堂がさすがに大きくどよめいた。

もはや借り物の戦いは終わりだ！

美しい故郷から突然追われて、呪うべき大公との一進一退は苦しかった。それから長い時をかけて、受けた傷を返し、運命への負債はもう充分に払ったはずだった。

――帰ろう、待ちわびた故郷へ！

「その日はきたと、私は信じている！　子らよ、もう一度、我々の故郷をめざそう……長いさすらいも、あと少しで終わりを告げるのだ。騎士たちよ、王家とともにこのいくさに賛成してくれるな？　君たちのエリュシオンに、幻ではない故山の夏を見せてやろうと！」

力を合わせてきた騎士たちの瞬間の激情は、その若い侍者の胸にとどこおりなく流れ入る。無上の喜びが心から心へ、輝きを伝えていくのだ。

「だが、いま一つだけ、我らに寄せられた願いがある」

香港の海の安全を脅かす幽霊船を、五星家ファイブ・スターズの当主の願いで狩りにいく。

――血の気の多い若い騎士たちに否やのあろうはずがない。

また年かさの慎重な者たちは、自治区香港に対してセイラ・テンプルの名誉を示すことの利を知っていた。

ドッと歓声があがり、手柄をたてようとする瞳がはやくも抑えかねるなかで集会は終えられた。

「王家に栄光あれ！」

そのすぐあとで、最長老のエトルタが一連の名をつらねたリストを持って、兄王レアルの前に現れた。

「レアル様、巧猿殿の船団に乗せる騎士の組み合わせは、かようでいかがでしょうか？」

レン・巧猿の話が本当なら、幽霊船との戦いには騎士団の闘気が不可欠であるようだ。したがって選び出した人数も、射撃や白兵戦の実力もさることながら、異能の力の強い者を特にえりすぐって組ませた。

それぞれの騎士たちの力量と、エリュシオンのいる者はその力の伸びもはかって、100名ずつにわけて一隊にしてある。

「……闘気は強いのですが、船上での戦いの経験がない者もおります。この者たちは用心のため、敵が新界か本島の陸へ逃げこんだ時の後詰めに一隊といたしました」

ていねいに目を通したレアルは、うなずいてエトルタ長老の労をねぎらった。

リストはよく考慮されて、どの隊も攻守のバランスのとれた組になっていた。すべての騎士の経験と力を知りつくした長老でなければできないことだった。

「いささかの手落ちもない。あとはただ勝機を祈るのみだな、エトルタ、いずれにせよ今回の巧猿殿との約定は、長老たちに面倒な仕事を増やしてすまなかった」

故郷への戦いがはじまる間際になって、香港の嵐に進んで巻き込まれるのは、愚かな選択になりかねないと承知していた。

レーテアの地を見せもせず、この海で一人の騎士でも失えば悔やんでも悔やみきれない。

「だがそれでも、巧猿殿の苦闘を見過ごすことはできないだろう……助けを求める声を聞き捨てて、ただ先を急ぐのは騎士団の道ではない。まして香港は恩ある街だ」

〝我らがいまあるのは香港のおかげでもある〟、若い王はそう言ってどこか遠い目をした。

「かつて我らが敵によって故国を離れなければならなくなった時、さまざまな国を通り……この香港がはじめて我らを出迎えてくれたのではなかったか？」

「まさに、快く移住を許可してくれました」

香港という自治区のひらかれた一面である。千人会議の審査さえ許せば、どんなけったいな異邦人でも——いや、むしろ奇妙な旅人であればこそ——香港仔はそれを受け入れるのだと豪語する。

「私自身はその時のことを知らないが、それでもこの街が我らに多くを与えてくれたことはわかる」

騎士団と王家に無期限の居住権を与え、新界海上にセイラ・テンプルを築くことを許可

した。

戦う騎士たちはこの要塞に集まり、疲れを癒やしてふたたび次の戦地へとむかうのだ。仲間とであい、心を許せる者たちの間で、つかのまの聖域を楽しむことができる。

「この場所がなければ、いかに騎士団といえどもいまごろは長い流浪に疲れ、バラバラになっていたかもしれないだろう。だが我らは幸運にも二つめの故郷を得ることを許された。その恩義は大きいだろう、エトルタ？　やはり捨てては置かれない！」

エトルタ長老もうなずいた。

「何もおっしゃいますな、王よ。王家の決定は、そもそも騎士団のものですぞ」

レーテア騎士団の最長老エトルタは、先代の王に仕えた若い日に〝生涯を王家に捧げる〟と誓った者で、妻子も侍者も持ったことがなかった。

その誓いどおりに、すべてを王家と騎士団のために生きてきた騎士である。当代の王レアルと、その弟王アルベリヒは、どちらもエトルタの手によって育てられたようなものだった。

神秘の掟をもつレーテアにあって、王家は絶対の存在であった。ともに長く戦い、愛情を返されてきた。そればかりでなく、エトルタは知っていた。

――騎士団は中心を必要としているのだ。

最強の騎士団であっても、なお――いや、最強であるがゆえに――騎士団にはすべてを捧

げて忠節をつくす導き手が必要だった。
異能のもとに呼びあう魂を探すレーテアの騎士たち。
至福の絆を見いだすまえに、しばしば傷つき……絶望をかみしめるのが定めだった。
——暗闇に灯台が必要なのだ。
王家はつねにあって、へだてのない愛のありか示す。苦しい時にいつでもここへ帰れと、あの海を越えて照らしてこそ……騎士団は異能に立ち向かえた。
ただすがるものもない自由であっては、胸に血を流しながら倒れていく。それがレーテアのもう一つの定めだ。
——いつのまにか、教えたことをはるかに上回る王になってくだされたのが誇らしい。
長老は穏やかな笑顔を見せた。
「そのうえに、この街は王妃様の故郷でもあるのですからな?」
若い王の頬がさっと染まった。
「エトルタ、待ってくれ! 私はそんなつもりではなかったぞ、たしかにここは王妃の故郷だが、だからといって……」
ややうろたえた王の言葉をさえぎって、老いた騎士は静かに首をふる。
「しかし、我々はそのつもりでおりましたぞ、我が王よ」
——王妃様にゆかりのある大切な街だと思えばこそ、戦う気概も倍になるものです。

不動の位置にあることを要求される王家であるがゆえに、時として……政略結婚もありえる代があった。

レーテアにあって唯一、王家には望む愛が許されないことがある……長老エトルタは、なろうことならこの代の王に、そのような犠牲を払わせたくはなかった。

――だが我が王は、まぎれもなく祝福を受けておられる！　そんな心配はまったくの杞憂だったのだ。

商都で抜きんでた兵器商の可憐な娘であるカナリアが、レアルの新王妃となった。非常に仲むつまじい二人になった。日ならずして、すこやかな王子も生まれた。

レアルがカナリアを愛する様子は、すべての騎士団に新王妃を心より愛させた。

「我らに愛させてくださいませ、それが我らの力ともなります」

「ありがたく思う……エトルタ」

長老エトルタは気の強そうな白い眉をあげて、ニヤリと笑った。

「そもそも、王が騎士団の力をみくびっておられるのは困りますぞ。たかが怪しげな術を使う者に、レーテアがおくれをとる心配でもしておられるようだが？」

年に似合わぬ不敵な表情を見せたものだ。

「聞けば相手はたったの1隻だというではありませんか？　ならば長老会だけで、本当は充分でござりまする。手柄をたてるために敵の数が少なすぎて、血の気の多い者たちの間に功

名争いが起きることのほうがよほど心配でござるわ！」

稲妻のような眼光でこぶしを握り、いまにも新界へ飛びだしていきそうな気配である。

おお、エトルタは元気でなによりだ……レアルが懸命に笑いをかみ殺している。

「それに、そのほかにも……ですな。ウム……」

老人は、こんどは年相応の頑固そうな表情になって眉をしかめた。

「エトルタ殿はどうやらおっしゃりたいことがあるようだ」

王のかたわらに控えていた一人の騎士が、微笑をこらえて言った。イグナチウスという名前の黒髪の騎士で、背が高く、恐れを知らない鷹のような目をしている。

王の信頼厚い聡明な男で、その侍者のリューという少女はさきごろ王妃の近衛に任ぜられた。

近衛などの資格にはうるさい長老会だが、こんどの王みずからの抜擢に異論をはさむものはいなかった……イグナチウスのリューは、わけあって片翼の侍者なのだ。

リューには闘気だけがあって、癒やしの技をまったくもたなかった。

――その技をイグナチウスは、誰とも知らぬ相手に奪われてしまった……。

王の御前でありながらも、エトルタの心がふとそれていた。

なぜなら、それは騎士団にとっては悪夢のような事例だったからだ。

――その相手に彼は、7年も前……まだリューに会う前に出会っていた。

アーサーという名前の少年で、イグナチウスは数週間、武芸の教師として彼と接した。きわめて短い期間にその少年の何かを手放しがたく感じたらしい……イグナチウスはそれについて、長老会に多く語ろうとはしなかったが。

ひどく奇妙な事情のもとに、アーサーは一夜で影のように消え去ってしまった。

――途中からでも報告を受けていれば、長老会は警告できたかもしれない！

だが、どうだろうか？　エトルタはいまになって、それは不可能かもしれないと思う。

イグナチウスを責めることはできない……相手は、異様なほど手掛かりを残さずに消えうせたのだ。アーサーという名前さえ、偽名だった。もしも途中からでも知っていたら……おそらく、エトルタはすぐにイグナチウスを帰還させただろう。

こんな、とりかえしのつかないことになる前に！

――最初からすべてを隠したままの相手に魅かれたイグナチウスは、やはり不注意を責められてもしかたがない奴だった！

しかしリューには、罪を受けるいわれはない。

イグナチウスもまた長い期間、悪夢のような孤独をさまよって過失を償ったと思う。

――だから、レアル様のお目は正しい。

〝あのリューを近衛の一員に〟、レアル王より声がかかった時に、エトルタはためらわずに賛成した。地獄の火をくぐった経験をもつ騎士と磨かれたあとの力を得たリュー。

傷よりも、その生還を愛するのがレーテアの力となるはずだった。

——そうともッ……苦しみも充分に知らず、気楽にたわけている者どもにくらべたら、数千倍はましかも知れないわ！

エトルタ長老の眉毛が、いきなり直角につりあがったのは、はたしてどの顔を思い出してか？　きっと顔をあげると、有無を言わせぬ口調で断言した。

「一部のバカどもには、少し活をいれてやる必要がありまするぞ、王よ！」

「そ……そうなのか？」

エトルタ長老は、首も折れよとばかりにうなずいた。

まったく……若い者どもは少し目を緩めるとすぐにたるむ！　セイラ・テンプルにすべての人数が集まるようになってから、長老エトルタには頭の痛いことばかりだった。

さまざまな特徴をもつ若い騎士たちを、一つにとりまとめておくのは、まったくなまやさしいことではないのだ。

——やはり、幽霊船はちょうどよい試練だろう。

「放っておくと、どこまでたるむかわからぬ輩がおりますでな！」

〝とりわけ、あやつら二人は心配でござる!!〟。誰よりも騒動を起こす前歴のある二人組。許しが得られるなら、首に縄をつけておきたいと、長老は真顔で言った。

「あー、それはもしかして……エリックとエディランドのことか？」

どこか視線をそらしたままで、レアルが聞くと、間違いなくそうだとこぶしを握った。
「先日も新界で乱闘騒ぎを起こし、あろうことか警察の世話になりました！　どうやらエリックが始め、エディランドが駆けこんできて全員を湾へ投げこんだとか」
——騎士の威厳をなんと心得ているのか!?
「理由は何だとエリックは言っているのか？　あれはそれほど、いわれのない争いをする者ではないはずだが……」
長老は肩をすくめた。どう問いただしても、言わないのだ。
「言わない？」
「はい、珍しく頑固で下をむいたまま石のようでしたので、とりあえず夕刻まで懲罰房に入れ、いましがた頭も冷えたことと思い呼びにやり、連れてこさせようとしたところ……」
そこで大きなタメ息をついた。
「……逃げました」
——逃げた!?　あのエリックがか？
どちらかと言えば内気で賢い騎士だったと記憶している。長老にそこまで逆らうとは思えないのだが、
「逃げました、相棒ともども」
エトルタ老は太鼓判を押した。

エリックとエディランドの悪さに我慢のならない点が、いま一つある。

――あやつらは、いつも同じ罰を二人で分けあおうとするのだ！

イグナチウスという騎士がクックと笑った。

「どうしようもありませんな。とにかく、彼ら二人を見分けられるのは、あの二人のラーラだけでしたから」

たとえばどちらかの騎士が事を起こす、懲罰を逃げるような者ではなかったが、どちらが犯人か呼び出して二人に聞くと、

〝わたくしが、いたしました〟

声をそろえて同時にひざまずくのだ。彼らがその気になると、なにもかもそっくりに動いて見せることができた。目撃者のある場合でさえも、こっちだということはできなかった。

――騎士ヘーザーズだけが、彼らを見分けた。

エトルタは不吉な調子で続けた。

「いまごろは、どうせ新界あたりではありますまいか……調べると小ボートが一つ足りなくなっております。おそらくは乱闘の続きでもしにいったのではと思いますと、真実情けなくなります！」

あの者たちだけは、こんどの任で海の藻くずと消えようとも、少しも惜しいことはございません……と、彼は断言した。

「きっとまた翌朝までには、騎士団の面目に泥をぬってくることでございましょう！」

予言者のように繰り返して、長老エトルタはクルリと背をむけて退出した。

その姿を見送ってから、レアル王は苦笑した。

「エトルタはあの二人を可愛がっているからな……」

――ときどき、あの二人を気にやむことが、エトルタの生きがいではないかと疑うことがあった。

騎士エリックとエディランドは、死んだ騎士ヘーザーズの後継者だった。エトルタ老とは、長い間戦友同士だったヘーザーズの侍者なのだ。

「エトルタはすこし心配しすぎる。彼らはあのヘーザーズの侍者ではないか？　無鉄砲に見えても、どこか騎士らしくなってきた……言いつけにそむいて新界にむかったのも、ひょっとするとエリュシオンにしたい者に出会ったのかも知れないじゃないか？」

もしそうならば、少しくらいの秘密は大目に見てやるがよいと、レアルが言った。

侍者に関してだけ、騎士団のあらゆる掟は例外の存在を許すことがある。

「ただ一人のエリュシオンが現れた時、騎士に何が起こるのかは、本当に予想もつかないことだから……」

イグナチウスが一度だけうなずいていた。

――二人の騎士は、エトルタ長老のにらみどおり新界にいる。
先に逃げようとけしかけたのはエディランドだった。
「とにかくこのままだと、間違いなく二人とも重禁足になるぞ。いやだよ、せっかく香港で待者を探す計画が全滅になる！」
罰則がなんだ、この際まとめてあとではたそうじゃないか？
――いつもは止め役のエリックもうなずいたのは、なぜだろう？
「いいだろう、エディラ。僕も行くよ」
新界のポートまで着くと、ふたたび別れて行動することになった。〝少し、捜してみたい人がいるんだ……〟、エリックはそれだけ言って兄弟と別れた。
――たずね人……誰だろうな？
いささか肩をすくめてから、エディランドもまた歩きはじめていた。彼にもまだ見ぬたずね人がいるのだ……次の出会いは、騎士エディランドの番になるようだった。
――蝶々のように着飾った香港仔が、異国的な飾りつけの下で浮かれ騒いでいる。
新界のカーニバルがはじまっているのだ。
騎士団の制装のままで、エディランドも人波にまぎれて歩く。
その、すぐそばの街角には涼とミハイルがいた……こちらは二人とも、アッという間に姿が変わっている。

――手際よく総督府の建物を抜けだすと、ミハイルは最初にあった古着屋に入って、着ていた服を上から下まで売りとばしてしまった。

代わりにもっと粗末な服を手に入れる……あとのGは涼と山わけにした。

一つだけ残したのは、新界総督の紋章の入った腕輪だけだったが、これは袖の奥深くにしっかりと押し込んで見えないようにした。

「さあ、涼！　ついてこいよッ、みんな案内するからな！」

いちばん、にぎやかな場所。いちばん、飾りの見事な広場。いちばん、うまい屋台の街角までちゃんと知っているミハイルだった。

――何もかも忘れて、熱狂的に遊んだ！

ダンスがあると聞いては走って見に行き、誘われたので動けなくなるまでまざって踊った。

巧猿から前にとめられた冷たい飲み物の屋台にも首をつっこんだ。

「平気、平気！」

意外に賭けごとに強かった涼が、露店のカードで特賞をもぎとった。

食べ物の屋台のはしごも、もちろんして……ふと、隣の席に目をやると、日に灼けたおかみさんが六絃琴をひざにおいて仲間としゃべっているのに出会った。

――あ、この女性も六絃琴が弾けるのか。

急に気になって見ていると、クルリとふりかえってきた。涼は見る見る赤くなった。

〝可愛い坊やだねえ!!　なんの用かい!?〟

「すみません！　ただ、あの……どうしたらそれが弾けるようになるかと思って……」

そう言う手にも、まだしっかりと自分の六絃琴を持っていた。

――涼の奴、結局いっときも放そうとしないんだものな！

ミハイルも気掛かりだったが、どうにも手助けは思いつかなかった。

――呪力だけで六絃琴を弾けなんて、術士でもできないことが多いのに……。

新界全体を探して何人の術士が、六絃琴を呪具として弾きこなすだろう？　老練なキュロスよりほかの名前は、とりあえず思いあたらないほどだった。

――それに涼って〝力〟があるのは確かなんだろうけど、新界の術は何一つ知らないみたいだものなあ……。

〝どうしたらいいのだろう？〟。一方、屋台のおかみさんはその銀の細工に目をみはった。

「こんな上物はじめて見たなァ！　いいわねェ……ちょっと弾かせて！」

「ええ、どうぞ」

「簡単よォ！　あたしなんか七つの年齢から弾いて、上手いもんなんだから」

六絃琴はただの楽器として、香港仔に広く愛好されている……巧猿の言葉どおり、彼女が楽しそうにかき鳴らしはじめると、通りのあちらからもこちらからも、同じ曲で弦の音が

続きはじめた。
「さすがにいい音、するわねェ！」
〝お姫様になったみたいな気分だね〟、彼女は涼にむかって片目をつむってみせると、それから急に勢いよく弦を2回、強くはじいた。
――それは香港仔のあいだで常識の合図である。
「何がはじまるんだ？」
「見てなよ！　涼」
弦の音が響く限りのところにいた腕自慢たちが、その前に集まってきた。
「あたしがいちばん得意な曲でいくよ!!」
彼女は涼が知らないメロディーをなめらかに弾きはじめた。それは新界では古くからお馴染みの曲で、誰もがよく知っていた。
上流の音楽教師が生徒に教えることはまずあるまいが、下町ではまったく愛されていた。
短くて、単純だが美しい調べだ。
早く弾けば陽気な曲に聞こえ、静かにしみいるように鳴らせば哀愁をおびて感じられる不思議な曲調だった。
おかみさんは、涼の隣でそれをどちらもやっている……その前で、六絃琴を抱えて集まった人々の中から、まず顔見知りらしい若い娘が進みでて同じ曲を弾きはじめた。

二つの楽器から流れる同じ曲が、その場所に同時に響く。

わずかの間に、見物がこぞっておかみさんのほうを指さした。〝あんたの勝ち！〟

若い娘は元気よくしかめ面をすると、ケラケラ笑ってうしろに下がった。

次にきた男も、数秒で敗退した。その次の弾き手は、その場からあやうく蹴りだされるところだった……涼とミハイルが笑いころげている。

――ルールはただ一つ、勝ったものが長く弾き続けるのだ。

はじめての涼にも優劣はなぜかよくわかった。隣のおかみさんが弾いている音色のほうが格段にきれいで、チャレンジャーたちを黙らせてしまうのだ。

「そうよ。なにしろこれはあたしのとっておき……この曲で亭主をつかまえたってわけ！」

ちょっとだけ弾く手をとめて、おかみさんは涼に楽器を返してくれた。手早く教えて、〝坊やもついてきてごらん？〟

それから、自分自身の六絃琴を手にとると、

「さあ、もうっ、束になってかかっておいで！」

ドッとざわめくように興奮の輪が広がって、手に持っている全員がいっせいに弾きだしたが、それでもおかみさんの響きはひときわ見事につきぬけるようにしてわかるのだ。

――六絃琴がある種の感応力を鍛えるというのは、確かだった。

おそらくこの弾き上手のおかみさんの血には、新界の術に通じる素質もあったのだろう

……若い、美しかったころの幸福な記憶が重なって繰り返し弾いたこの曲だけは、まだ誰も彼女にはかなわなかったものだ。

大勢の音色を前に、一歩もひかない。

吸い寄せられるように、涼も楽器を手にとった。

――そろそろ勝負ではなく、ただ大勢で同じ一曲をかき鳴らすことに熱中していた。屋台の周囲は、もう押すな押すなの人垣になってしまった。曲の中心にいる女性が巧者なので、熱狂的な声援が惜しみなく降りそそぐのだ。

涼も必死でついていく。興奮で目が輝いている。どれほど新しい弾き手が加わっても、目をとじればいちばん輝いている音しか聞こえないのだ。

――ああ、きれい！　あの音を越えたい！

夢中のまま、そのことしか考えてはいられなかった……ふいに、渦の真ん中で、誰もまだ聞いたことのないような澄んだ音色が響き渡った。

誰もが息をのむほど驚いた。

〝誰!?〟〝銀の細工をした六絃琴を持つ、黒髪の坊やの音だ！〟

――目を閉じて、くちびるをしっかりかんで、頬がバラ色に上気している。指先は絃に触れるか、触れないか……。

いつの間にか競争の弦の音が減っていき、最後に隣のおかみさんが手をとめるまで、涼は

夢中で気がつかなかったようだ。

目をあけた瞬間の大喝采に、おおあわてで連れの少年にわけを確かめたくらいだった。

「びっくりしたよ、あんた！　あたしゃ肝をつぶしたわよ！」

目を丸くしたあのおかみさんが、笑いながらミハイルごと涼を抱えこんだ。ミハイルが早口でささやく。

「……涼、君やったんだぞ！　バカだな、気がつかなかったのか⁉」

――エーッ、ぜんぜん気がつかなかった！

澄み切った甘い音色。それが周囲の六絃琴を引き込んでいると、何人が聞きわけただろうか？　誰よりも、どの音よりも高らかにそれは響き渡った……。

「みんな聞いておくれよ！　この坊やは六絃琴をほんの今夜、弾けるようになった子なんだってよ！」

木の椅子に立ちあがって、おかみさんが見物全員に伝えている。立ち去りかけていた者までドッともどってきた。

アッというまもなく、輪の中央にたたされた。誰かが酒樽を投げだして、

「みんな、坊やのために乾杯だよ！」

夢みたいだ……六絃琴を抱いて、まだうっとりしたように笑っている涼は、女の子みたいな際限のない可愛らしさなので、頭を一つどついてやった。

「ありがとう、ミハイル！　なにもかも君のおかげだよ、きっと！」
返事のかわりにギュッと抱きついた。
「僕のほうこそさ……」
〝涼……ありがとう〟、何も言わなかったけれども、本当はわかっていた。涼は自分のために、ずっとついてきてくれた……相手はちょっとはにかんだように笑った。
——そんなことはない。僕は本ッ当に！　六絃琴の稽古がいやになっていたんだ。ただ、ミハイルは気丈すぎてすこし強がりだ。そんなところは、涼が知っているもう一人の赤毛の……女の子に、懐かしいほどよく似ていたのだ。
だからこの日、総督府の天窓にいた時にも、途中からだったが見ていたことなどは、絶対言わないほうがいい。ミハイルは、そういうのはきっと辛いはずだ。
それでも……。涼ははじめてミハイルに、あのことを勧めてみようと考えた。
——いまなら、言えるかもしれない。
巧猿とキュロスが心配していた、魔船の後遺症のことだった。放っておいていいものではないと、キュロスは心配していた。
「ミハイル、ねえ、やっぱり君は治療を受けてみたらどうだろう」
「……嫌だ」
突然、腕をふりほどいたミハイルが冷ややかな顔で横をむいた。

「どうして!?」

あわてて、涼が追いかけてその前に回る。もし、必要なら自分も一緒についていこう。

「そんなことは、よけいなお世話だよ！」

「意地っ張り！　みんな心配しているのに、どうしてッ」

目をあげてミハイルの瞳を見た瞬間、涼はアッと後悔した。蒼白な顔に緑の目が、少しも癒やされてはいない苦しみをたたえて光っていた。

「涼までが……涼まで、そんなことを言うんだなッ！」

怒りにふるえる声でそう叫ぶと、彼は力いっぱい涼をつきとばして飛びだしていった。

「待てよ、ミハイル！　待って！」

暗い通りの角に飛びこんでいく姿がチラリと見えた。あわてて、大人たちの輪をかきわけて外へ出ようともがく……。

「さあ、もう一度……乾杯だよ！」

〝ミハイル！　どこだよ!?〟

まださめない怒りをたぎらせているミハイルは、気配をわざと殺して、捜している涼が行きすぎるのを待った。

「ミハイル……いないの？」

とほうにくれたような悲しげな声になりかけている。〝いい気味だ！〟

――涼の奴！　バカ!!　いいさ、迷子にさせてやるッ……。

そうだ、あいつはこの街を一人で歩いたことはないんだから、ちょっと怖い思いでもするがいいや。爪を噛んで、物陰でこっそりとそう、うなずいた。

真剣に呼ぶ涼の声が遠ざかるのを待ち、ようやく忍び足でそこをでようとした時である。

「こら、ちょっと待て」

ふりかえると、薄闇でグレーに見える騎士団の制装をした青年が、立ちあがって埃をはらっていた。双子のかたわれの騎士、エディランドだ。

「人を蹴りたおしておいて、挨拶もなしか？　新界の少年はしつけがなってないな！」

少年同士がいさかいをするような声だな……と、思った次の瞬間、角を飛びこんできた細い影にいやというほどつきあたられたのだ。

ムッとしたままのミハイルは言い返す。なんだ、土地っ子でもないくせに偉そうに！

「……祭りの夜にボーッと歩いているほうが悪い！」

そう言って、さっさと行こうとする足が、三歩も進まぬうちにもつれて転んだ。

「どうだ、悪ガキ？　一言、あやまれと言っていたんだぞ！」

いつのまに巻きついたのか、まったく気づかなかった。ただ騎士団の青年の手からのびた細いリボンのようなものが、ひざにしっかりとからんでいたのだ。

足元にひっくり返っているミハイルを見て、相手は思うぞんぶん笑うと、
「ま……これで相手を見て、口をきいたほうがいいとわかったよな？」
〝一つ、お利口になったな！〟、せいせいした顔でミハイルを軽くまたいで行こうとする。
完全に血がのぼったミハイルが、その脚に食いついてやろうと上を狙った時である……ふと彼が身につけた腕輪に目がいって、ハッと息をのんだ。
——血の色をした紅玉が、鈍く輝いていた。
涼からもう話を聞いていたので知っていた。巧猿らがいま、死に物狂いで手を尽くして捜す、3個の紅玉の一つに違いない。
——こっ、こんなところにあったなんてッ……！
気がつくと騎士団の若者は、すでに数メートル先に歩いていってしまった。あわてて、はね起きてあとにつく。
「待ってくれ、騎士団の人！」
自分はエディランドという名前だと言って、青年はおもしろそうな顔でふりかえった。
〝お詫びかな？　それとも、もう一度、ケンカを売りにきたのか？〟
背が頭一つ高く、金髪で凛々しい顔をしているが、なんとなくケンカ好きそうな目をしていた。
とにかくミハイルは、まず丁重にさっきの詫びを言って、それから左手の腕輪を見せて

もらえないかと頼んだ。新界の人間の目には、秘めた魔力の気配がすぐにわかる。

――間違いない……きっとこれが紅玉の一つだ！

「騎士団の人……ええっと、エディランド殿、この腕輪は、新界当局が緊急に捜しているものに間違いないんだ。どうか、これを新界総督府に買いとらせてもらえないだろうか？」

目を輝かせて真剣に頼みこんだ。もちろん相応以上のGは支払わせてもらう。

ぜひにも聞いてもらいたい……新界全体が恩に着るだろう！

「悪いが、断る」

〝断る!?〟、愕然としたミハイルが思わず騎士団の上着の胸をつかんだ。

「どうしてッ？　補償はもちろん充分にさ、させてもらうし、価もそれならそちらから望むとおりにしてくれて、か、かまわないッ……」

「新界総督府とやらを売りとばしてくれても、この腕輪の値にはとうてい届かないぜ」

――なぜなら、これはラーラから自分たちに贈られたものだったからだ。

基本的に私物を持たないレーテアの例外は、騎士がその侍者に渡す装身具くらいである。

ラーラ・ヘーザーズも、ずっと昔、エリックとエディランドにこれを与えた。

まだ彼らが7、8歳の子供だったころだ。

――この紅い石は身の護りにもなると、言っておられたっけなあ。

ともかく、新界でラーラにこれを売った商人はそう言っていたのだそうだ……本当だとよ

いがな、と言ってラーラは笑っていた。

〝いずれにせよ、大切にするのだぞ。そしていつか、お前たちのエリュシオンに会えたら、贈り物にしておやり〟

そろいの腕輪をなくさないように、ラーラの手でつけてくれた……そんなわけで、この腕輪だけはなんとひきかえにも渡す気はさらさらない！

「だけど……香港にはそれがいま、本当に必要なんだぞ！」

「ほう、それがどうした？」

エディランドには、この少年がなんだってこんな大騒ぎをするのかわからない。

めらためて見ると、元気のよさそうな赤毛の少年だ。

つやのよい柔らかな赤毛に、瞳の色は翡翠のような色あいだった。見るからにきかん気らしい顎をして、浮浪児のような格好をしているのに、やけに偉そうな態度だ。

しかつめらしい口を上手にきくのが、おかしくて飽きない。

「なかなかおもしろいぞ、お前……もっとやれ！」

……息をきらせてミハイルは作戦を検討した。とにかく何を言っても、この騎士は子供の空想だと思って真面目に受けとってくれない。

――涼がいれば、まだ身なりもまともなのに！

だが仲間はいまごろあさっての方向を捜しているはずだ。〝こんな時なのに……涼の役た

たず！〟

不当な怒りをぶつけてから、ふと自分の手にはめた腕輪に気づいて元気をとりもどした。

「騎士団の人よ、この僕は新界総督として貴殿に切望する……ぜひその腕輪の紅玉が必要なんだ！」

右手の袖を二の腕までずらせて、新界総督の紋章をうちこんだ腕輪を見せてやった。

九つの帆をはった大帆船のモチーフは、この街では新界総督とその後継ぎしか使うことを許されない。〝どうだ、これでわかっただろう！〟

騎士エディランドの表情が、みるみる変わった。

「こらッ、お前はどこでこれを盗んだッ⁉」

「ぬ……盗んでない‼」

絶望的に抗議したが、まったく信じてはもらえなかった！

――なんという……手癖の悪い奴だ！　すこしこらしめてやる必要があるな！

「な、何をするんだ⁉」

エディランドは暴れるコソ泥小僧を、しっかり肩にかついで手近な港へと歩きだした。さすがに香港はすごい街だ、この年齢でこんな代物をギルとは油断のならない奴！

――だが新界総督の名前をかたるとは、大物を狙うにもほどがある。しかけたのが俺だったからいいようなものの、相手によっては半殺しにされても文句を言えないんだぞ！

「わかるか？　小僧……こんどからは真面目にやるか、せめて噛みきれる肉にくいつけ！」
「やめろ！　無礼者ッ、やめないか!!」
「アハハ……その上着にボタンをぜんぶつけてから、セリフを言え！」
港に犠牲者を放り込むのは、もはやエディランドのお家芸といってもよい。
水しぶきのあがった水面に、聞こえているかと首をかしげながら、
「いいか……この腕輪はちゃんと騎士団から新界総督に返還しておくから、安心しろ！　二度と悪いことは考えずにいい子になれよ……小僧め、聞こえているのかな？」
――聞こえてる……覚えていろよ!!
暗い防波堤の陰では、赤毛が怒りで燃えあがっている。
ようやく岸にたどりついたが、ここで上にあがるとまた奴に放りこまれるかも知れない。
〝両刃の剣〟の紋章が気持ちよく笑いながら去っていくのを、ただ……ただ、復讐の念をこめて見送っていた。
「……さらば、赤毛！　これでもう懲りろよ！」
――くやしい、くやしい、くやしいッ！
それから防波堤をはいあがる。びしょぬれだが、少しも寒さを感じなかった。
「あの野郎……いまに覚えていろよ！」
上着をしぼりながらつぶやくミハイルの背後から、まったく気配をみせずに数人の人影が

すべるように近寄ってきて、その肩に手をおいた。
「……新界新総督殿ですな？」
「お前は……」
見上げた顔が、黒いマスクで隠されているのを知って、全身が凍りついた。
飛びすさろうとした瞬間、黒いコートの袖口から、鈍く光る銃口がのぞいた。
「ぜひ、ご同行願いたいのですが」
……青白く、こわばった顔で少年はうなずいた。

ミハイルがつれて行かれたのは、わずかな距離の場所にある倉庫の一つだった。
中に入ったとたんに、見覚えのある男が笑顔になってこちらにきた。
「これはこれはミハイル殿、よくおいでくださった……」
それは執務室の男だった。
どこか気味の悪い微笑みを、抑えかねるようにして浮かべている。〝よくおいでくださった……こんなに都合よく！〟
銃口をつきつけられたままで、ミハイルは椅子の一つに座らされた。
さらにその前にはテーブルがある。卓上には1通の書類とペンが用意されていた。
「さあミハイル殿、いい子だから、これにサインをいただきたいですな」

「これはなんだ？」

丁寧に作成された書類の文面を見て、ミハイルの顔色が変わる。そこには、新界総督自身の意志により〝後見人として左記の人物に全権を託す〟という意味の誓約書があった。

――相手はミハイルの知らない人物だった……だが有力な親族の一人で、卑劣な手段に長じた野心家の男だ。

ハイシャや巧猿がもっとも心配していたうちの一人だった。

「冗談ではないぞ！　こんな書類にサインなどすると思っているのかッ……」

渡されたペンを遠くに投げて、立ちあがろうとした。背後の男が無表情に一撃する。

「手荒なマネはお互いにしたくないものです」

歯をくいしばってこらえた少年を見下ろして、男はにこやかに言った。彼は〝後見人〟の依頼をうけて、かなり前から機会をうかがっていたのだ。

――成功すれば、自分も新界の一部を陰で分けられる手筈になっていた。

わずか16歳のミハイルが父親を亡くして一人になった時から、この計画を待ちかねて牙を研いでいた。

「どのみち、記憶のない総督など、ただで認められると思うのですかな？」

……その一言で、ミハイルの全身が硬直した。

若すぎるだけでなく、記憶の混乱という不利をかかえたミハイルなら、いずれ後見人の問

題が取り沙汰されるのは確実だった。

――ミハイルがなぜだか頑強に治療を拒否しているのは、彼らにとって好都合だった。

〝ミハイル・几城の相続には、二つもの見過ごせない難がある。そのままでは絶対に認められるわけがないぞ！〟

前総督の時からいて、幼い後継者を護ろうとする人物たちが必死に隠そうとしてはいたが……ミハイルはもう、彼らの顔を正確に見分けることもできなかったのだ。

「事実ですからなァ、ミハイル殿。我々が広めずとも、すぐに知れ渡ることでしたよ」

……青ざめたミハイルは、無言のままくちびるをかんでいる。

「いまや新総督に後見人は、まったく不自然ではない状況です。ですから、いちはやく適任者をミハイル殿ご自身で誓約書のかたちにさせていただきましょうかな？」

でっちあげた書類を差し出して、男はもう一度ペンをつきつけた。

「ようするに、こうしたことは早く動いた者の勝ちになるのさ！」

ゆっくりと……ミハイルはペンを手にとって、書類をひきよせた。どうしても、この場所から逃げ道はない。

――それなら、ここだけをまず切り抜けよう。サインはして……すこしでも油断をさせてから、かならずチャンスを見つけて！

ミハイルの心を見透かしたように、男は笑った。

「サインのあと、しばらく別室でお休みになるとよろしい。じつはもう用意がしてあるのです」

彼らはミハイルを殺す気はなかった。それでは書類の正当性を疑われるからだ。

それよりもすぐに、ある種の薬を与えて、意識がほとんどないままで上手に生かしておくつもりだった。

「例の後遺症とやらは悪化することもあるそうですから、これはいわゆる……自然な成り行きでしょう」

「よくも貴様ッ……絶対にするか！」

〝押さえろ！〟、すべてを知って暴れだした少年を数人がかりで押さえ込んだ。

「静かにしろッ！　どのみちサインはすることになるんだ!!　苦しい目に合わされてからよりも、おとなしくしていたほうがまだ得だと思え……さあッ！」

死に物狂いで暴れるミハイルを押さえるのは、大勢の手でもまだ楽ではなかった。

だが、いよいよ身動きできない手にペンをつかませようとした瞬間。

倉庫のあかりがいっぺんに消えたのだ。

「なんだ、どうした!?」

声をはりあげて叫ぶ男の横で、いくつものうめき声が次々にあがる。そのたびに何か柔らかい音がドサッとした。

――ちくしょう、小僧なのか!?

殺意に我を忘れかけた男が、銃をぬいたわずか前の暗闇で、何者かの手がミハイルをつれて消えうせていた。〝逃げるぞ……しっかりつかまれ!〟

そのささやき声で誰だかわかった。銃声がとどろいた瞬間、彼らはすでに空中にいた……騎士団のエディランドの手からのびたリボンは、倉庫の天井の梁にからんで二人分の重量を闇のなかで軽く支える。

「どこへ行った……捜せ、逃がすな!!」

あかりが回復した時にはもう、捕らえた鳥は飛び去ったあとだった……。

「本当に、新界総督だったとはな!」

影か風のようなすばやさでミハイルを追っ手の輪からつれだしたあと、ここなら安全だ、といって騎士エディランドは少年を肩から下ろした。

「騎士団が、どうして……」

「変な気配がしたんで試しにもどってみた。そうしたらあのとおりだろう?」

顔色もまだひどく青い。軽く頬をたたいてやった。

「赤毛ががんばってくれたから、電源をぜんぶ落とす時間ができたのさ」

年齢のわりには、本当に勇敢だった!　だが、まだ無理に立たないほうがよさそうだ……

エディランドは近くの空きボートにミハイルを座らせて、しばらく休ませた。
ミハイルはさすがにおとなしくうつむいている。その姿を見て、エディランドはどう考えてよいのかわからなかった。
――香港では、こんな子供を総督にするというのか！
「……なりたくてなったわけじゃない」
蒼白な頬の少年が、うつむいて小声で言った。総督ウィリアム・几城の急すぎる死によって、ミハイルがやんごとなしに父の称号を受け継ぐことになったのだ。
まだ早すぎた！　ミハイル自身が誰よりもよくそれを知っている。
――僕には何もない！　父上のような強さも、人を従える力量もないッ……。
せめて勇敢に立ちむかわねば、と思うのだが、新界の苦境は少年一人の勇気でなんとかなるような状況ではなかった。毎日のように何かが起きる。息もできなくなるような危険が、毎日ジリジリと四方から迫ってくるようだった。
――危険は特に、この新総督自身の周囲に多いようだな。
さっきからの話を小耳にはさんだエディランドは、赤毛の目を見て訊ねた。
「赤毛、なぜ……その治療とやらを受けないでいるんだ？」
それさえ受ければ、問題の一部だけは解決するらしい……すくなくとも多くの味方が、この子にそれを望んでいるようではないか？



——友達と言い争っていたのも、それだったんだろう？
レン・巧猿とキュロスは、魔船で味わった恐怖を思い出すことが、年少のミハイルには耐えられないのだろうと推測していた。
「何を嫌がっているんだ、怖いのか？」
「違う!!」
突然、堰を切ったように涙がとまらなくなっていた。
——どうして誰も彼も、父上を殺そうとする!?
「だ、誰もがよってたかって……涼まで！　僕の父上を殺してしまおうとするんだッ……」
稲妻にうたれたようにエディランドにはわかっていた。
——この子は父親の死の瞬間を見ていたのかも知れないのだ！
誰もが気づかなかったが、ミハイル・几城は新界総督の守備隊が全滅する、その場の目撃者だった……総督ウィリアム・几城が幽霊船に殺されたとすれば、それもまた見ていたのかも知れなかった。
——ウィリアム・几城氏の生存は、万に一つもありえないと新界は知っていた。
黒魔の術士の手にかかったのなら、それがとても凄惨な死に方だった可能性もある。
「父上は亡くなられたんだと、僕にもわかっている……」
——それでも、ただ一つの希望を胸に抱いていてはいけないのか!?

新界ではいまやミハイルだけが、総督の生還を信じる唯一の人間だった。
「信じて……それだけでもいけないのか？　ほかにはもう何もないのに！」
赤毛が、必死の願いをこめた目でこちらを見ている。
もしも巧猿らの言うように治療を受けて、すべてを――見ていたかも知れない――父総督の無残な死を思い出してしまえば、最後の希望も二度ともてなくなる。
ミハイルの最後の支えが、一緒に死んでしまうだろう。
――僕のなかだけでいい、父上を死なせないで！
エディランドは静かにこの新総督の前に膝をついていた。互いに顔が見える高さまでかがんで、涙をふくためのハンカチを手渡すと、
「なあ赤毛、俺たちのラーラの話をしてやろう……」
ラーラというのが騎士団の何を意味する言葉か、ミハイル・几城はおぼろげに知っていた。顔をわずかにあげて、騎士の口元を見た……かなり優しく笑っている。
「これは、絶対にここだけの話だぞ。なぜなら、これが長老会に知れたら俺たちは間違いなくセイラ・テンプルを追放になるからだ」
ミハイルはつい、顔をあげてエディランドをみつめた。彼がなぜ〝俺たち〟と複数形を用いるのかさだかでなかったが、セイラ・テンプルを追放というのは穏やかではなかった。
「俺たちがラーラを亡くしたのは、11歳の時だった」

ラーラは自分たちを戦地で引き取って育ててくれた方だと、エディランドは説明した。

「嵐の夜だったよ。本当に恐ろしい……」

ラーラ・ヘーザーズは、老いた天命で生命を空に返した。深夜だった。二人の幼い侍者は、それまで彼の両脇によりそって懸命に癒やす光を送り続けていたのだが、ヘーザーズは静かな手で、彼らにどくようにと指示した。

〝もう遅い、エリックとエディランド……お前たちはもう寝る時間だ。私もどうやら眠る時間がきたらしい。さあ、その手を放せ……二人とも、いい子だから〟

これ以上の延命は誰のためにもよくないことだ……ヘーザーズはそう言うと、かたわらの騎士エトルタが静かに同意した。たとえ騎士団の異能を借りても、引きとめられぬ生命がある。これ以上の努力は、幼い侍者たちの生命力を傷つけるだけの結果になるだろう。

当然のことながら、エディランドたちは言いつけをなんとしても聞かずに暴れた。

「最後には、ほかの騎士たちの手でひっぺがさなければならなかった」

どこか遠くを見るような目で、エディランドは低く笑った。

「ラーラは最後まで穏やかで、笑っておられた……まるで俺たちに、この笑顔を覚えておけと言っていたみたいだった」

そして二人の侍者に心からの愛情をこめて、あの言葉……果てのない海を見つけろと言って逝った。

「……果てのない海？」

「ああ、騎士団では……この言葉はある意味で別れを告げるためにあるんだ。赤毛も香港の生まれなら知っているな？　騎士団に属したからには、かならずいつか別れに会う生命だ」

最愛の侍者として受けいれられた者が……かならずや、その騎士の死を看取るのだ。

「愛されただけ、別れは恐ろしいよ……ラーラは本当に誰よりも愛してくださった。だが、たぶんみんなそうなのだろうな！　赤毛の父上もきっとそうなのだろう？」

ミハイルはただ、うなずいた。

「それだから、あの夜は恐ろしかった！　なにもかも、いまでも覚えている。嵐の凄さ、海の真っ黒な暗さ……ずっと育ってきたセイラ・テンプルにいて、はじめて嵐が怖かった」

それはみなラーラがいないせいだと、エディランドにはわかっていた。それまでは、たとえ一人きりでいたって嵐など怖いと思ったことはないのだ。

――ラーラのいない世界！　どの侍者も、いつかその日に直面する。

「俺たちのときは嵐の夜だった。怖かったのさ……とても我慢できなかった。怖さのあまり、俺は何よりもしてはならないことをやりそうになった」

それはレーテアでなによりも重い悪とされる。11歳のエディランドに、その意味するところがすべてわかっていたとは思えない。

ただ彼は双子のエリックを抱きしめて、計画を打ち明けたのだ。

「いますぐ、この嵐の海に船をだそうと言った。誰もあわただしかったから、いまなら見つからずにやりとおせる自信があった」
「船をだして、どこへ……？」
「ラーラのあとを追って」
——追死。
その意味がわかってミハイルの顔色も変わった。
もっとも小さなボートでよいのだ。子供だけで嵐の海に出れば、すべてが解決する。
「きっとうまくいくと思った！　みなは過失と信じて、ラーラの不名誉にもならずにすむと思っていた……」
もちろんただ一人、ラーラにだけは罪を隠すすべがあるまいが、その時はいつものようにエリックと二人で甘えて、甘えて……どうにかして許していただこうよ！
——そうしたらもう二度とおそばを離れない。こんな恐ろしい夜に別れずにすむのだ！
〝行こう、エリック！〟
「どうして助かった……誰かに見つかったのか？」
ミハイルの言葉にエディランドは穏やかに首をふった。
「兄弟が殴ってくれた」
誰にも邪魔はさせないが、大事な仲間のエリックだけはついてきてもいい。

しかし泣きながら、すべてを聞きおわったエリックは、エディランドが見たこともない怒りに全身から発光して飛びかかってきた。

〝エディラのバカッ！　そんなことは許さないぞッ……ここからはもう絶対にださないぞ!!〟

「あいつはまだ幼かったし、泣くと何を言っているのかわからなくなる癖があった。こんなに何年もたってから、奴が言ったことがようやくぜんぶわかってきたよ……」

〝それではラーラが本当に死んでしまうじゃないか！〟

〝ラーラの生命を一つでも減らすなんて許さないぞ!!〟

夜明けまで殴り合って、人々が呼びに来るころに動けなくなって終わった。いちばん長い夜に機会を逸した幼いエディランドは、それからは二度と嵐に負けなかった。

――だって、エリックが正しかったからだ！

目をみひらいたままでみつめるミハイルに、エディランドは優しく言ってきかせた。

「どの海にも果てがあるように、どんなに愛されていても別れる時はくる。だが本当はどの海にも果てなんてものはないんだ！

愛されたことがあれば、その海の素晴らしい美しさや輝きがもうわかるだろう？　だが愛したことがなければ、それがどんなに強いかは、まだわからないんだ」

11歳のエディランドは、その夜だけ、なんのためにこれまで愛されてきたのかを忘れそう

になってしまった。

「それは強いんだよ。生命じゃなくて輝く何かだ。侍者が残るかぎり、失われるものはけっしてないのさ！　ラーラは俺たちを愛して、教えて、心が欲しがるものはみんなくれた！　なんて強かったんだろう……いまの俺には、正直いってまだ想像もつかない」

――ときどき、また見えなくなりそうになる。もしかすると二人のなかでは、自分のほうがまだ危ういのかもしれない。

「だがいつか愛する人ができて、同じような力が必要となったときには、ラーラはきっと蘇るのだろう……俺自身のなかに」

その時、光の中にすべてがもどってくる。ラーラはそこに再生する……何一つ失われたものなどはないのだ！

〝赤毛の父上は、たとえ何があっても死ぬことはない〟

「赤毛がいるかぎり！　それが愛するってことなんだろう」

愛されることには終わりがくる時があるが、愛することはけっして終わりにならない。

「ラーラは俺たちを愛してくれた。別れる時、あんなにも雄々しく笑っていられたのは、ラーラ自身果てのない海を見ておられていたからだと、いまはわかる」

ラーラ・ヘーザーズは自分の生をつなぎ得る愛を、存分に二人の侍者にそそいだからこそ、笑いながら生命を天に返した。

自分の触れたこの海には、ついに果てがないと確信した笑みだ。
――だから赤毛、強くなれ！
一つの嵐を恐れてあともどりしたいと願うのは、本当の海を忘れて遠ざかることだ。
温かい手でミハイルの前髪をひっぱると、騎士エディランドは誇らしげな笑顔を見せた。
「果てのない海があることを、お前に教えたぞ！　いますぐは信じられなくてもいいさ……ただ、それを信じる者たちがいることだけは忘れるな」
だからこそ騎士団は強いのだと、エディランドは胸をはる。
「新総督殿も強くなれ。治療も受けると誓えよ！　本当のことの上でなければ、強さは絶対育たないぞ。赤毛がいま抱いているのはニセ物の希望だ……だって本物の希望なら、何があっても死んだりはしないんだからな！」
〝約束するか？〟ミハイルがそっと手を上にあげると、褒美だと言ってエディランドは左腕の紅玉の腕輪をはずした。
「でもッ、これは……」
「くれてやるよ！　いいさ、ラーラの思い出はこれ一つきりじゃないんだから！」
その翌朝、セイラ・テンプルで、二人の騎士エリックとエディランドはエトルタ長老の前に緊急に呼び出された。

——どちらも、相棒が昨夜何かをやったのだと推理していた。

「あいすいません。わたくしが、いたしました」

二人ほぼ同時にそううなずいて、長老の足元にひざまずく……エトルタは煮てやりたいような奇妙な目で彼らをながめると、

「今朝はやく、新界総督府よりたいへんな礼状が届けられた。昨夜、新界総督自身の危難を騎士団の人間が、優秀かつ沈着に救ったとか……」

非常な働きを深く感謝する文面が、愕然となっているエトルタの前に届けられたのだ。

かつてない異様な迫力で、エトルタ老の追及が響きわたる。

「文面によれば、レーテアのエディランドと名乗ったとやら……さあ言わんかッ、お前たちのうちの、本当はどちらなのだ!?」

左のほうにいた騎士の手が、恐る恐るあげられた。

——その礼状は同時に、二人の騎士を新界のレン・巧猿別宅へ丁重に招く文面もふくんでいた。

エディランドと対の腕輪をはめていたエリックのほうは、巧猿の願いをこころよく聞き入れてそれを渡してくれた。

3個の紅玉がこれですべて揃ったのだ！

「新総督ミハイル殿から、くれぐれもよろしくとお伝えいたします」

いまだミハイルに会ってはいないエリックは、正式な称号を用いた巧猿の堅い言葉に、兄弟がなぜふきだしそうになったのか、まだ理解できずにいる。

「それで治療は受けるとおおせられましたかな？」

「ええ、今日信頼できる術士の手で」

……物陰から、涼と二人でのぞいていたミハイルは、昨夜の騎士がなぜつねに〝俺たち〟という複数形を用いていたのか、はじめて理解した。

――ハハア、なるほどね……。

隣の涼は突然、自分がひどく疲れているのではないかと、心配していたようであった。

〝どうしよう……同じものが二つ見える〟

だがすぐに双子だとわかると、興奮してしきりと袖を引っ張ってきた。

「すごいな、見た!?　双子の騎士なんて……ワア、髪の先までぜんぜん同じみたいだ！」

レン・巧猿の前にきた時、並んでそれぞれにエリックとエディランドと名乗っていた。それなのに帰りぎわ、一度席を立って互いにすれちがっただけで、もうどちらがどちらともわからなくなってしまった。

涼がついにお手上げのサインをだす。ミハイル・几城はかすかに首をかしげていたが、

「僕わかるな……左がエディランドだよ」

ずっと窓から見ていると、左の騎士は通りであった不敬なチンピラの上着をつかみ、突発

的ともいえる慣れた動作で港に放りこんだ。

第七章　羽根の護法――呪術士キュロスの秘密

3個の紅玉が、呪術士キュロスのもとに完全にそろった。
仇魔刀召喚の様子は、くわしく言うこともないだろう。ある朝、巧猿の別邸においてまさに紙一枚のところで、妖刀はアルディーンの目の前の結界につきささった！
――レン・巧猿とキュロス、そして涼だけがその場にいた。
「見事だよ、キュロス！」
巧猿の言葉にキュロスはチラリと歯を見せた。我ながら絶妙のタイミングだと思っていたからだ。彼の術士としての経験が今回はぞんぶんにものを言った。
仇魔刀が現れるその一瞬で、見事にその妖気を結界で包みこんだのだ。
そのあとで真っ先にしたのは、涼に対する護法の手続きである……つまり、3個の紅玉をもう一度――巧猿に用意させた金鎖に組みこんで――一つにして、涼にかけさせたのだ。
涼がそれを首にかけると、キュロスはようやく息をついて、ニッと笑った。
「これでもう、坊やは仇魔刀の敵ではないわい！」

たとえ妖刀が結界を離れていても、この妖魔の子が標的にされる恐れはもうないというわけだ。

――3個の紅玉がそろった時には、この妖刀に魔の気配を遮断する効力が生まれるのだ。

それからキュロスは巧猿に対して、この呪具の正式な使い方を教えておこうと言った。

この……仇魔刀は、旧世界の魔術士より五星家に伝わった強い術具の一つだったが、32年も昔に行方不明になっていたために、巧猿らの若い世代は触れた記憶もなかったのだ。

「どちらかといえば妖刀で、いろいろと注意して扱う必要がある」

キュロスは繰り返してそう言った。

仇魔刀は別名を〝猟犬の剣〟と呼ぶ者もいるくらいで、強力で見境なく、ただひたすらに魔を狩りたがる危険な性質をもっている。

「だから使わぬ時には必ず結界で囲っておかねばならない。そうでないと、勝手にどこへいって何を害するかもしれない。この香港ではそれは非常に危険なことだろうが？」

なにしろ香港の街には、そこここに魔術の気配がある。

高位の呪術士ともなれば、多少魔物と似た気配をもつことがあるし、無害な水霊などを慣らしてペットにする術士もいた。

「これまでに魔刀が使われた記録をみても、事前に新界の全体に警告を出して、かかわりのない術士たちに、それぞれ結界で自分や使い魔の安全をはからせてやらねばならないぞ」

巧猿は記憶しておく印にうなずいた。

「そして、これを結界からだす時には、かならず誰かが使い手としてついていてやらねばならない。所持者……とでもいうかの。その手を離れると、やはり暴れだすことがあるしな」

それは力のある術士が、要請を受けることが多かった。

――伝承によればこの魔刀は、呪力のまったくない者にも使用できるというが、力をもつ手のほうが実際は強く使うからだ。

その場合にかかせないのが、たったいま涼の首にかけられた3個の紅玉である。

それは妖刀にとって、最小の結界ともなる性質をもっていた……そろえば魔の気配を完全に遮断するのだ。

魔の気配を感じられないのだから、妖刀は自分からは動かずに台座に身をゆだねる。

また魔力をもつ者がかければ、自分が攻撃される恐れなしに妖刀をふるうことができた。

――今回、それはアルディーンの名をもつ妖魔の子にかけさせておくことになっている。

「これで僕は仇魔刀に触っても大丈夫ですよね？」

「そういうこと！」

巧猿は笑顔でうなずき、キュロスは何も言わなかった。ただ、

「何があってもはずしてはならんぞ!!」

それだけを厳しい口調で命じてから、白髪の術士は何かを思い出したようにレン・巧猿を

ふりかえった。

——3個の紅玉のうちの二つまでが、レーテアの双子の騎士の手にあったとか？

「そうか……レーテア騎士団が持っていたのなら、術で見にくいのも当然じゃなあ」

もともと、3個がそろいで力をもつ宝石だったのだから、バラバラにされてしまうと魔力の気を追いにくくなってしまうのは事実だった。

しかも、レーテアの騎士という……呪術士にとっては、いわば特殊な相手が所有者になっていたのだ。

「これはもう、偶然を天に感謝したほうがいいわい！」

「……騎士団というのは、そんなにやりにくい相手かい、キュロス？」

レン・巧猿が好奇心をだして訊ねると、新界の老術士は大きくうなずいた。

いかなる術も、彼らがかかわると、非常にかかりにくくなると言った。

「理由はまあ、彼らの異能にあるのじゃろうな。違う種類の力がかかわると魔力が効きにくくなるものなのだ。レーテアの場合もな。どこかこう……かすみがかかったように術がかけにくくなる」

ずいぶんまえだが、術士としての興味から一人の騎士の髪の一房を苦労して手に入れ、過去と未来をのぞこうとしたことがあった。しかし老練なキュロスのクリスタルをもってしても、かすんだような幻影で、わけがわからなかった。

おそらく……騎士団の者は一人一人でいても、つねにレーテアという巨大な精神体の内部にあるともいえるのだろう。術士にとっては、きわめて例外的な相手だった。

「セイラ・テンプルの内側などのぞき見しようものなら、半端なクリスタルは割れてしまうぞ！」

「そんなことしていたのか……」

嫌気がさした巧猿が、頭をかいた。

――セイラ・テンプルの人々は、すでに海上で始動していてくれた。

香港当局からの船舶を借り、魔船の寄港地と目されるあの暗礁は、騎士団の船団によって完璧に封鎖されていた。

いま香港の海上は、昼も夜もレーテアによって警戒されている。魔船の被害はこのところ1件もなかった。

〝このまま、悪魔がおさまってくれるのだろうか!?〟

街の声ではそうした願いも聞かれるというが、

――そこまでは、どうだろうか……？

暗礁から、結界が解けたためにさまよいだした小魔が何匹か、騎士団の力で無事に消滅させられたという報告もあったが、まだ人鬼などの大物がどこかで残っている。

レン・巧猿の頬に不敵な笑みが走った。

――勝負は、まだまだ……これからが本番だな！

ここ数日……彼は新界の街を歩いてまわり、気になることが少しあった。

元宵節がこれほど近いというのに、人々はまだあの熱狂じみた段階に入っていないようだった。もちろんいつもながらの飾り付けはあった。時には街角で、活気のある歌声が聞かれることもあったが、歌の輪はそう広くはならない。

――もっと盛りあがらなくてはなァ！

生粋の香港仔の目には、不満がおおいにあるのだ。

そればかりではない。現在の沈んだ街角は、レン・巧猿の胸に奇妙な不安をもたらしていた。いにしえの偉大な術士を祖にもつ五星家。呪術をなす力は失われて久しいが、それでもなおその鋭敏なカンなどは、時として術士のおよばぬ部分がある。

キュロスはそんな巧猿の様子をチラリと横目で見た。

――このレン・巧猿のなかにすら、その血は流れるのだ……。

このままではよくない。元宵節の準備はまだ完全ではない。

魔船の与えた恐怖があって、2島の間に火を見そうになった記憶がある……誰よりもよくわかっていたが、それでも巧猿はここ数日考えていた。

何かしなくてはならない……二つの街の心を一つにして臨まなければ、元宵節は完璧にはならないような気がする。新界の気が衰えている。

まだ何かがいる……何か人々が夢中になり、集まって熱狂できるようなものが。

――もうちょっと、なんとかして盛りあげたいんだがなあ！

ふと見ると、部屋の隅では涼が六絃琴を抱いて日なたでうたた寝をはじめていた。

「涼……おいで、六絃琴が弾けるようになったというのは本当かい？」

黒髪の少年はふりむいて、笑顔でうなずくと、駆けよって自分の六絃琴を手にとった。

「手くはないよ。だけど約束の1曲は弾けるようになったからね！」

「ちゃんと術だけで？」

自信満面！　巧猿がおもしろそうな顔で、その先を待つ……つい先日までの悲惨な状態を思えば、そんなにすぐに到達できるとも思われなかったのだが。

巧猿自身も心当てを駆けまわって集めた数百曲の楽譜の山。その半分近くまで弾くのを聞かされたが、どれも涼の六絃琴には共鳴できなかった。あのあと、共鳴できる曲を見つけたというのだろうか？

キュロスは、ちょっと待てと言って、大きな茶碗に茶を一杯ついでもどってきた……いまからもう怒鳴る用意をしている。

「では弾きます……」

そう言って六絃琴をとると、澄んだ音色がその部屋にながれはじめた。

――ウッ、まさか！

最初の部分を聞いた瞬間に、キュロスが茶をふきそうになってあわてて横をむいた。レン・巧猿が、うしろで大きくよろめいている。

「涼ッ……君、その曲はどこで？　まさか、僕の用意した楽譜の中にはなかったよねッ？」

新界の市場に近い通りで、屋台のおかみさんから教わったと聞いて、巧猿もおおいに納得した。キュロスはいまや頭をかかえている。

――ちなみに、まぎれもなく術士の弾き方だった。

六絃琴は……呪術に通じる弾き方をした場合、まずなにより格段の音色がでる。いまの音色は妖しいほど美しい。

指先はたしかに触れているが、絃はそれだけに応じて鳴っているのではなかった。

――闇の皇子とまで呼べる魔性にふさわしいわい。

しかしながら、弾いている曲名は最高に下品だった！　頭をかかえてうなっているキュロスの気持ちは、巧猿にはよくわかった。

――そういえば、この曲は香港七不思議の一つだったっけ。

優雅で繊細な旋律と、異様に下品な歌詞のアンバランス。

失恋した作曲家が、恋人の少女に捧げるために書き上げた最後の楽譜に、やけで歌詞をつけてから身投げしたのだとか。その少女は、とある有名な詩人の娘だったとか。

真相はさだかでないが……とにかく、嫌な相手と縁組みをさせられそうになった名門の娘

が、ウエディングドレスの式場で勇敢にもこれを歌いぬいて、見事に破談にもちこんだとやらいう話を、巧猿はまえに聞いたような気がする。

——たしか、『あたしのいい人』っていう曲名だった！

黒い髪をした妖魔の少年は、背筋をシャンとのばして、瞳をややふせて六絃琴の音色に集中している。強い集中により、ふだんあどけないほどの横顔から、おとなびた英知の線までが表れていた。首をわずかにかたむけたようすに、気品が漂っている。

めまいがする巧猿の頭で、うろおぼえのその歌詞が蘇ってきていた。

〝あたしのいい人は……あたしよりも青い目が大好きなの〟

たどたどしいが、この坊やの妖力で弾くと、六絃琴は地の底から精気を吸いあげるように生き生きと響く。さすがの巧猿ですら、近所の評判が気にかかった。

日当たりのいいこの一室は、かつてはこの屋敷の音楽室だった。

代々のコレクションの六絃琴が、壁に並んでかけられている。そのすべてに共鳴がはじまったのを見て、あやうく鳥肌になり〝ストップ！〟と叫んだ。

「キ……キュロス、ボーッとしていないでやめさせたらどうだッ？」

「も……もう、いい！　坊や、よくわかった！」

壁一面の六絃琴が〝あたしのいい人〟を鳴り響かせていたのがピタリと止まった。

「どうですか？　ね……どんなもんだい！」

巧猿とキュロスは呆然と顔を見合わせた。
「たしかに……できているね」
「ウウ、1曲は1曲だ……」
うつろな目のキュロスにさえ、見事な結界は確認できていた。
黒髪の少年は、うれしそうに笑って歓声をあげた。どこか魂が抜けたようなキュロスの肩に手をおく巧猿が、
「涼、その……よくできた。よくできたから、もう今日は練習はおしまいにしていいよ」
ミハイルの顔でも見てきたまえ、と言うと、元気よく走っていってしまった。
「よりにもよって……」
足音が消えたころにようやく呪術士は顔をあげて、うめいた。頭に手をやって無茶苦茶にかきまわしていた。巧猿は苦笑しながらも、つい小声で歌う。
――たしかにメロディーは美しい曲だったよ。
「〝あたしのいい人は、あたしよりも青い目が大好きなの……〟」
「よさんか、このバカ者」
うんざりした表情でキュロスが止める。
――しかし、覚えてしまった以上、この曲があの坊やの呪歌となってしまった。
いにしえの旧世界の術士たちは、それぞれに独自の旋律をもっていたのだという。あの坊

やの妖力は、どうやら専用の旋律を必要とするほど強かったということか……。

――だがそれがなぜ!?　『あたしのいい人』でなければならんのじゃ!?

〝誰が教えたかッ……なぜ覚えたか！〟

……茶をいれなおして、しばらく無言ですすっていたキュロスは、やがて顔をあげて巧猿にむかい、

「3個の紅玉がこう早くそろうとは、ありがたかったのう」

「ああ、キュロス。仇魔刀もとうとう手に入ったし、このうえはいっきに船団をだしてあの寄港地に火をかけてやりたいよ！」

香港の南端の暗礁。その場所はいまや海図で大きく×の印で表されている。

「そのことなんじゃがの……」

キュロスはやや遠くのほうを見るような視線で、巧猿をながめていた。

「妖魔の坊やには、やはり仇魔刀を持たせないでやってもらいたいのだ」

「え、なんだって、キュロス……？」

思わず巧猿が聞きかえすと、キュロスはうなずいた。

「いまからでは気の毒だが、お前さんはべつな所持者を探してもらえないかな……」

その場合には、呪力のない者であることが絶対の条件だと彼は言った。

――術を使える者が妖刀に触れる際に必要な補具の紅玉は、涼のための護りになっている

からだった。

「ちょっと待ってほしい！　そんなことが本気にできると思うのかい!?」

なるほど伝承では仇魔刀は、術の素質のない者でも扱えると言いはするが、やはり強い魔力の手にある時のほうが、より明白に力をしめすと言ったではないか！

〝いま誰よりも強い所持者となる者は、あの涼をおいてほかにないではないか!?〟

……キュロスは巧猿が何もわかっていないという表情で、見下ろして言った。

「おぬしはたぶん、仇魔刀を涼に持たせる計画でいたのだろうな？」

「そうとも！　だってあの紅玉もそのために集めていたのだと思っていたぞ!?」

たしかに、そのつもりだった……キュロスもうなずいた。

だが妖刀の伝承はまた、ふさわしくない手が持った時の悲劇も伝えていた。

――結界からだされて獲物を与えられた仇魔刀は、無敵に近い力を発揮した。

「敵が強ければ強いだけ、魔刀は力を欲しがるからだ」

なまじな力ならば、その場合ないほうがよいくらいだ。

弱い術士が持てば、呪力を根こそぎ奪われ、ひからびて死ぬこともあるという……。

「あの子にかぎって、それはないだろうが！　なあキュロス！」

巧猿は思わず笑った。あの妖力がきわめて抜きんでていること、彼にさえわかる。

「その力が強すぎるのが恐ろしい……」

〝どういう意味だ？〟、遠い目をしたまま術士は静かにうなずいた。
「前にも言ったと思うが、強すぎる力というのは、必ず何かの反動をともなうはずなのだ」
それから壁にかけた十数個もの六絃琴を指さした。さっき、涼の魔曲でそのすべてが一瞬共鳴した。これまでに、そんな場面は見たこともなかった。
ネオ・ナリタからきたあの少年は、魔力だけならキュロスがこれまでみた誰にも勝っているが、同時に妖魔としては生まれたばかりで、結界の張り方一つ、まだ知らなかったのには本当に驚いた。
――みかけもまだ16歳だが、魔性としてはさらに幼いのだ……。
「たぶん……香港にきてから、あの子の力は強くなってきたのかもしれない。ほかに魔というもののなかったネオ・ナリタと違って、この街で彼は魔船や新界の空気や、わしに触れた……」
その結果、まだ目覚めずにいた妖力までが表に現れはじめているとしても不思議ではない。キュロスは今日、あらためてあの少年の漆黒の瞳を見て、魔力が深くなっているのをまざまざと感じて、恐ろしくなった。
「それのどこがいけないというんだ……キュロス？」
強すぎる力には、必ず何かの反動をともなうのが決まりだと、キュロスは繰り返した。
新界で術を使うものには魔斑がでる。レーテアの異能の騎士たちには、魔性の義務がつき

まとう。

「だがあの坊やには何がでた!?　わしの見るかぎりは、身体にも心にも何も歪みはでておらん……まだ何も！　それが恐ろしいのだ……」

おそらく、少年がかつてネオ・ナリタの妖魔にとり憑かれた時には、その本来の高い資質が彼を獣化から救ったのだ。しかし、融合したあとにも魔力は——こともあろうに——成長を続けている。

香港がその引き金になったのは、あきらかだった。

「キュロスはまさかッ……涼にもいずれ魔斑がでると言うんじゃないだろうな!?」

呪術士は首をふった。そんなことは、あるまい。

「だが、何かが起きてもおかしくない。このまま……何も考えてやらずに、あの子の妖力を鍛え続けたらな」

〝たやすく一線を越してしまうだろう。それが恐ろしい〟

明るい室内で、巧猿の表情がやや変わっていた。顔色がわずかに青い。

「それでキュロスは、涼に何も持たせたくないというのか……」

そればかりではないのだ。老術士は、なによりも涼のあの不安定で強力な力が不安でならなかった。魔力を得た代償が、身体に現れるとすればまだ危険は少ない。

「よほど恐ろしいのは、心に変化がきた場合だぞ……巧猿」

魔力の代償に魔斑を受ける新界のクリスタルの術……それはむごい法則だったが、ある意味では健全ともいえたのだ。

——術士であるという意味で孤独ではあるが、人並みな感覚はさほど傷つかない。

「旧世界の激しい術のなかには、ひとたび使えばその者の性質が完全に一変するものもあったという」

「あの涼にかぎってそれはない！　キュロス！」

それがわからんから、言う……新界で長く生きた呪術士の目は、巧猿を超えたどこかむこうをジッと見ていた。

「強すぎる力に触れる者は、とても危険だ……巧猿、わしは32年前のあのイリヤという魔女を少しは覚えている。先回の幽霊船を操り、香港の海域を最初に血で染めた呪われた女よ。だがあの魔女でさえ、ひどく遠い昔には思えばあたりまえの心の娘だったと言えば、お前は信じるか……巧猿よ？」

蒼白な顔の巧猿は、うなずくことはできなかった。

神ならぬ自分の考えで、六絃琴を教えたことをキュロスは後悔しはじめていた。

あの少年の魔に対する耐性は並外れて強い。だがそれでも強すぎる術を使わされれば、あの子といえどもかならず何かの反動がでる！　それはどこに……どんな形で？

——それとも形のない心に現れるのか⁉

「……だからこそ、せめて仇魔刀にはもう触れさせたくないのじゃ」

この件の指揮者は結局お前さんだと、キュロスはつぶやくように言った……キュロスという老人は、結局新界の呪術士にすぎない。

七つの船団の指揮権も、千人会議に認められた実行権も公的には五星家のレン・巧猿のものだ。

「お前さんがやると言えば、わしはとめられん……妖魔の坊やもまず嫌とは言うまいが、わしの言う意味だけはわかってもらえるだろう？」

レン・巧猿は、黙りこんでただ爪をかみ続けていた。キュロスの言うことはわかる……だが、それはたぶん術士の杞憂にすぎないのではあるまいか？

その言葉だけで、目の前にある輝かしい妖力を捨ててしまうのは無念としか言いようがなかった。

幽霊船の術士は、おそらくこれまでに仇魔刀が屠ったどの魔性よりも力がある！

――おまけに新しく魔刀の所持者を探せといって……この時点からどこで、適任者が見つかるというのか⁉

まったく呪力もなく仇魔刀を武器にしようとするなら、使い手は剣技の実力があることが望まれた……この連邦下で剣技だって⁉

「レーテアの騎士では駄目だぞ、巧猿よ」

キュロスが重苦しく念をおした。異質の能力におおわれた騎士団の手では、二種類の力が干渉しあう結果になりかねない。

巧猿が一瞬カッとなった目で、叫んだ。

「それじゃ無理だ、キュロス！　僕にはとても承知できないよ!!」

いまさら何を言いだすのか？

「たとえ君の言うことが正しくて、仇魔刀の力が限度を超したとしても、あの涼に邪悪な影響がでるとはとても思えない！」

――それは魔力が新しい段階になるだけのことではないか？

もしも……百万に一つ、涼のもつあの妖力がはっきりと表面にくることがあっても、それは絶対に魔斑のような忌むべき形ではないはずだ！

言いたくはないが、魔斑はクリスタルを常人が使う副作用だろう？　涼ならば、力の証だ……そこが違う!!

「常人の一線を超えるのが悪いとばかりは言えないだろう？　旧世界の術士たちは、みなそれができた者たちじゃないか！　並の人間からより強く、より美しくなれるんだ！」

――さらに大きな力に届くことがなぜいけない!?

「だが、あの子は人間でいたがっている!!」

ハッと巧猿が、自分の手を握りしめた。

そのまま数秒、無言のまま彼らはみつめあっていたが……やがて巧猿がうなだれて奇妙な震える声で言った。

「……そのとおりだったよ。僕が間違っていた……」

長いことうつむいて、恥じ入っている様子だった。

優しい、涙もろさを失わない奇妙な妖魔の子……胸のどこやらに、大切な娘の名前が刻んであるともわかっていた。愛すること、愛されることをあれほど望んでいる心もめずらしい。

あの子はそのすべてを失うかも知れないのだ。

「キュロス、僕は恥ずかしいよ！　力に目が眩んでしまったらしい……とにかく最強の手段が欲しくて焦ってしまった。こともあろうにね」

「お前さんは、アリエナに惚れておるからな」

キュロスはふくみ笑いをして言った。それもまた、愛しい女のあるゆえである。

レン・巧猿の愛するいとこは、同じ五星家で香港警察の署長を世襲した。

気丈で美しい少女で、巧猿はなぜか彼女の前にでるとあがって、正常な振る舞いができなくなってしまう。記憶にあるかぎり、最悪の面しか見せたことがない……不真面目で、道楽者の役たたずだ。

こんどこそ魔船を掃討し、アリエナに認められる顔を作るのが、レン・巧猿の大きな望み

であった。

――だが、それとこれとはべつだ……そう、忘れてはならないことだ。

「あの子には、絶対に仇魔刀を取らせない！　いまからでも新しい使い手を探そう」

元宵節まで、まだわずかに時間がある。

セントラル・ボードの傭兵たちのなかに、そうした者がいるかも知れない。

常人が使う場合にも、一種の浄化の儀式を行い、その人間を剣の主として妖刀に覚えさせねばならないと呪術士は言った。だがそれは簡単な儀式だ、と。

「それでも、いまどき剣なんて……いるのかなあ！」

「フン、死ぬ気で探せ」

思わず嘆息した巧猿の脳裏に、ふと明るい軽やかなメロディーが浮かんだ。なにげなく首をかしげてから、小声で歌いはじめる……。

「〝あたしのいい人は、あたしよりも青い目が大好きなの♡　すっごく浮気なの、だからあたし……〟」

キュロスはやめてくれというジェスチャーをしたが、巧猿はまだまだ歌う。

「だからあたし、いつだって香水には気を遣うんだもん♡〟」

「よさんか、と言うておろうがッ!!」

老人は手近にあった茶碗を投げた。

その瞬間、巧猿の頭に一種の名案がひらめいていた。

失われていた魔刀の召喚の噂は、素早く香港じゅうをながれて希望を湧きたたせた。

――そしてまたレン・巧猿は、同じ五星家の人々を次々にたずねていた。

その日、巧猿が五星家韻の屋敷におとずれた時に、韻麗王は多少驚きを感じていたものだった。巧猿は本島の韻長官にとっては、いまや政敵にあたる……すくなくとも、韻大人はそう考えていた。

たまたま……長官がよそにでていたので、麗王がでて答礼した。

「いや、政敵などとは恐れおおい誤解です。たしかに千人会議の席では、あのようにべつの側につきましたが……しかしそれは今回だけのことです。私はお父上の手腕をかねがね尊敬していました」

巧猿は、そんなことを言った……それは半分くらいまでは真実であり、おまけの分は目の前の麗王に対する好意だ。

――なにしろ本島でいちばんといわれる美貌の少年である。

美人に目のない香港気質は、愛想を見せずにはいられない……少年のかたわらの六絃琴を見て、にっこりと笑った。

「ああ、そうだ。麗王殿は六絃琴の名手でしたな！」

それほどでもありません、つたないものです……少年が優しく言うのに、笑顔を返して、
「じつはいまウチにも一人、六絃琴の稽古をしているものがおります」
まだ一曲しか弾きこなせないが、きわめて美しい音色をだすと言った。
「才能のある方なのですね。ぜひいつか私にも聞かせてください……曲はどの歌ですか？いずれは夜会で演奏なさるのですか？」
巧猿はなぜだか笑い転げた。それは非常に実現困難だ。
――彼はその……〝あたしのいい人〟だけが弾ける稀な演奏者ですので！
レン・巧猿の訪問が、麗王にとってどれほどの驚きだったにせよ、仇魔刀を入手したと聞かされた時の衝撃に比べればものの数でもなかっただろう。
一瞬……長衣のへりを握りしめたかぎ爪のような指に、巧猿はまったく気づかなかった。
「き、仇魔刀を……よく見つけられましたな……」
巧猿は得意げに笑った。
そして彼は、魔刀の所持者を求めていると打ち明けた。
「いささか難しいのです。なにしろ必要なのは、いまどき剣士なので」
いくら香港が魔法の自治区だといっても、武装する男たちが使うのはピストルでありライフルであり電針銃だった。
新界の船乗りのあいだで愛用されている武器に、チェーン・ジャックという代物がある

が、これはまた剣技とはべつのものだった。

――レン・巧猿はまず傭兵仲介所（セントラル・ボード）にそうした変わり種がいないかあたってみるつもりだった。

そしてまた、セントラル・ボードの趨勢は現在韻長官の手にある部分が大きいので……韻家に正面から協力を要請しにきたのだ。

韻家ばかりではない……五星家のほかの家にもそれぞれ、呪刀の使い手を探すように頼む。

「この機会に五星家の結束を見せたいのですよ。ひいてはそれが……2島の結束にもつながることでしょう」

「わかりました。心当てを……探しましょう」

麗王殿は非常に青い顔をしていると、巧猿は心配に思った。

――やはり、病弱でおられるのだろうなあ。

「仇魔刀だと!?」

巧猿が去ったあとの自室では、麗王が魔性の顔を見せてくちびるをかんでいた。

「それは、まずいことになった……」

〝あれはイリヤの絶対結界にあるはずだったが……〟

希代の魔女イリヤの最高の力でつむいだ強力な結界だ。施術士自身のほかは、外からのいかなる力でもこじあけられないはずなのだが……。

しかし、巧猿めはあの妖刀を手に入れたと笑っていた。

「あの男が言うのだ、きっと本当なのだろう！」

闇の皇子と呼ばれる魔物が自身を的にして、内側から妖刀の力を呼び起こしたのだとは、さすがに知らない。ただ極限に近い、強力な結界なのだ。

新界のどの術を用いても破られるはずはないものだった。

――その場所さえも、夏虎の記憶を通じてとうに知っていた。

新界の〝黄金の針〟に近い場所にある、うちすてられた地下墓地だった。

ただ、それが絶対結界で……外からは、麗王といえども動かせないのが災いした。

――知っていても、おそらくどうすることもできなかっただろう……。

銀青色の瞳をまたたかせて、麗王がジッと考えこむ。仇魔刀がレン・巧猿の手に渡るとすれば、いっさいの望みは断たれるのだ。

――あれは妖気を感じれば、どこまでも追ってくるものだという。

麗王がいかに眩術で魔性をとりつくろっても、仇魔刀は欺けない。

――結界の中で気配を消していることはできても……。

それでは、元宵節の夜にはすべてが失われる。

「たしかあの妖刀には、3個の紅玉が添えられていて、魔性の気配を完全に遮断するのだというな」

「はい、しかしその紅玉はだいぶ前に盗難にあって、こちらも行方が知れません」

麗王は苦笑した。いまさら捜すというのも、間に合わないだろう。それに、

「案外、巧猿がもう手に入れてしまっていると見たほうがよさそうだな」

巧猿に何かの魔が力を貸しているに違いない事情から見ても、可能性が大だった。

「それなのですが……巧猿に味方をしていた術士の正体がどうやら割れました。新界のキュロスという名の古ダヌキでした」

現在、巧猿の屋敷の周囲に張られている結界の主は奴だった。みずからも呪術士の記憶をもつ夏虎が、鋭い目で魔力の痕跡を調べた結果だった。

「強いのか……その結界は」

ある程度の強さのある結界だが、真に恐れるほどではない。

「少し以前のあなたさまなら、簡単に破れたくらいのものでしょうが……」

麗王が不思議そうに眉をひそめた。

「新界の……ただの術士だというのか？　そんな相手にしては、これまでが少し手ごわすぎはしないか？」

それについて、夏虎が奇妙な声で答えたことがある。

「……ですが、奴には一つだけ秘密がありまして」
——あるいは、ありうることだったのかも知れません。
夏虎の説明をすべて聞きおえた麗王も、やむを得ないこととくちびるをかんで認めた。
「そう、その老人が巧猿の術士だとすれば、巧猿が魔刀の剣士をべつに求める理由もわかるがな……」
妖刀の性質からいって、それはいまどこやらの結界深くに封じられているに違いない。
「それが解かれる日までは、我らの正体が見破られる恐れはないだろうが……」
そして麗王は片頬に冷気のある笑みをうかべた。
どこまでも邪魔な巧猿め……レン・巧猿への憎しみはいっそう高まって、炎が心地よく身内に力をながすように感じられる。
——あの巧猿が魔刀の所持者を探しているのなら、用意してやろうな！
その名前を聞くと、人鬼の付き人の顔にも笑いがもどっていた。

「セリオス・ルガ、きたのか」
現れたのは金髪で背の高い、右頬に刀傷のある若い男だった。
キャリアの古い傭兵で、身についた機械的な敬礼を無表情にした。
言い方にもよるが、醜い男である……顔だちそのものではなく、気配が異様に醜い。香港

のカンのよい者なら、悪夢を感じるほどだろう。

——これは、この男が傭兵として重ねてきた悪逆の影である。

傭兵とは名ばかりの殺戮や、略奪行為に満ちたキャリア。長いあいだ、しかも大量に殺しつづけてきたのだ。

麗王と夏虎は、彼を——その血に飢えた手と、どす黒い憎悪を見込んで——新界の街角から拾いあげていた。

「よくきたね、セリオス」

韻麗王はその前で、椅子に横たわったままゆっくりと手をのばして歓迎した。

「こんな姿で失礼するよ。今日は少し気分がすぐれない。だが、私がお前の力になれるよい機会が、やっときたように思うのでね」

無表情でいたセリオスが、ここで視線をぎらつかせた。

「……お前、レーテア騎士団に恨みがあるのだろう？」

「そうだ、奴らは俺からカナリアを横どった」

それは麗王主従にとっても、いささか意外な物語で、はじめて聞いた時には笑いがとめられなかったものだった。

つまり、こういう話だ。

——2年前、レーテア兄王の妃となったカナリアは、もともとは香港の富家の娘であり、

旧姓をカナリア・パーマーといった。

麗王もかなり前に、どこかの舞踏会あたりでその姿を見たような記憶がある。可憐で、金髪のきわめて美しい少女だった。香港の上流の娘らしく、人前でよく歌うことができた。声音は若々しく……無邪気に澄んでいた。

父親は連邦でも有数の兵器商人リーランド・パーマーだった。

誰にも知られずにうまく隠していたが、どうやら……そうとうの悪魔が人の顔をつけている人格らしい。

死の商人として、のしあがるために彼は、一人の殺人癖のある傭兵――つまり、セリオス・ルガ――と、ある契約をした。

すなわち、セリオスの率いる部隊はリーランドの渡す新兵器のテストを実地で行う。禁じられている薬品や毒物などの実験を、任地でやったのだ。

少しでも感づかれた場合には、人々ばかりでなく部隊全員を抹殺した。

――何人死なせても補充はきいたし、経歴はいつでも書き換えられた。

その見返りとして、リーランドは彼に多額の報酬と……そして、これがなによりの釣り餌だったらしいのだが、カナリアという美少女を約束したらしい。

――この男に？　ただの傭兵にねえ？

この男、セリオスは身体にもとから殺しの血が流れる者だったらしい。この男ほどの冷酷

さで、大量殺戮をこなせる者は一人としていなかった。その意味ではたしかにかけがえのない役目だったので、セリオスはその約束を信じていたらしい。

だがレーテア騎士団からの打診があった時に、リーランドはもちろん、喜んで愛娘をさしだした。王家との縁組みである。

「いったい……あの娘は父親とお前の約束を知っていたのか？」

好奇心から麗王が訊ねると、セリオスは違うと投げやりに言った。

「……カナリアは知らない。もともと何も知らされていないのさ」

それでもセリオスを見たことは数回あったはずだった。父のもとを時におとずれる、不審な影のある客の一人として……セリオスの目は、そのたびに彼女を追いつづけていた。たった一度だがリーランドが、彼女の前で彼を未来の婚約者と言ってみせたこともあったのだ。

「だがそのあとで会っても、顔も覚えてはいなかった」

――アハハ、それはそうだろう！　若くて美しくて金髪を持つ上流の少女にとって、何かの冗談としか思えなかったはずだ。

輝かしいレーテアの兄王ならともかく、こんな暗い影をひきずった傭兵のことなどは、かけらもおぼえてはいないだろう。

……少女がレーテアに奪われたと知ったのは、長い任地から香港にもどったあとだった。

逆上したセリオスは、手段をつくして娘を奪い返そうとしたのだが、最強の騎士団の内部にいる王妃なのだ。どうすることもできなかった。

精鋭の近衛たちは、新王妃のために生命も懸ける。生きながら怨念のこもる声で、セリオスが言った……。

「だがッ、どうにかしてやりたい……裏切られたままでは済まさない！」

――結局、リーランドはカナリアを最高に高く売ったのだ。

〝なぜカナリアに対して権利をもつかを訴えてみたらどうなのか？〟

訴えが成功するとはとても思われなかったが、リーランド・パーマーにとっては致命的なスキャンダルにもできるはずだ。

――たとえ知らなくても、カナリアとて無傷ではいられないだろうに？

「わかっていないようだな！　俺はあの女を自分のものにしたい……」

「自分のものにしてから、どうする？」

「ああ……裏切った顔をズタズタにしてやるのだ！」

その考え方を、おおいに麗王は気に入った！

〝この男、少なくとも怨念だけは充分にあるようだな……〟。だが、人鬼となるにはいま一つ確かめなければならない事柄がある。

善悪いずれかにつきぬけて力をもつものでなければ、邪悪なクリスタルは受けつけない。

「セリオス、お前はその資格があるかな？」

うつろな目をしている男にとって、カナリアを守るレーテアを殺すだけの力が手に入るなら、生命でも魂でもいますぐくれてやるものであった。麗王は軽く笑みを浮かべた。

「よろしい、それならお前に一つチャンスをやろうな？　見事にそれを果たしてきたら、クリスタルの力をわけてやるよ……」

誘うように澄んだ声が言う。

「もうすぐ、レン・巧猿が香港で最強の剣士を求めるという。お前は剣が使えるかい？」

セリオスは、暗い目をしてうなずいた。殺すための道具なら、どんなものでも使える。

「二つの街からも募集はするというが、いずれにせよ正式に身元推薦者がなければ受け付けはしまい」

その保証は自分が手にさせてやろう。だからお前は、集められたえりすぐりの男たちを相手に、見事勝ちぬいてみせるがいい。

「お前が香港で最強の男ならば、巧猿はうかうかと仇魔刀を渡すことだろう。なにしろ自分でそう言ってたのだからな！」

自分はたとえ五星家（ファイブ・スターズ）として魔刀のそばに近づけても、それに触れることは絶対できない。

「だがお前はまだ、ただの人間だから充分仇魔刀に触れられる……」

ククク、と麗王はうれしげに笑った。
「そしてお前の手で、仇魔刀をレン・巧猿から奪うのだ！」
紅玉は間に合わなかったが、それなら仇魔刀を狙えばいいだけだ。
「できるならば、巧猿を暗殺しろ」
――そのあかつきには、願いをかなえてやろうな？
それは黒の術士麗王の望むところでもあった。
「そう、お前はレーテアなど八つ裂きにできる力をもつよ！　仲間ももう大勢いる！」
少年のうしろで、夏虎が笑い声をたてた。
――その夜のことだ。セントラル・ボードの中枢人物の一人が、予告のない客の訪問をうけた。
「セ……セリオス・ルガ!?」
この役員は、凶悪な傭兵セリオスのデータを知っていた。彼が――誰かはわからないが――強力なそのうしろ盾をなくして、はぐれた情報も知っていたのだ。
〝何をしにきた!?〟。蒼白な男の視線は、傭兵のうしろにいる二つの影にむけられて動かなくなった。
なぜだか知らない……その気配に捕らえられて何もわからなくなってしまった。
「お前はこのセリオスを、五星家のレン・巧猿に推薦するのだ」

「わかった。私は……推薦する……」
「今夜、ここにきた者のことはみな忘れるのだぞ？」
忘れると、眠る者のような声が繰り返した。
「すべてが終わったあかつきには、お前は手際よく死ななければならない」
「すぐに……私は……死ぬ」
麗王はにっこりと笑った。その時、たった一つだけ気になることがあるとすれば、
――我らの敵方の術士が、もし新界のキュロスなのだとしたら、レン・巧猿が六絃琴を教えていた相手は、誰だったのだろうか……？
だがそれも、たいしたことではないのかも知れない。
少年と付き人の影は、闇のなかで幻のようにふいに消えさった……。

――さて、涼は新界の雑踏を歩いていた。
巧猿が仇魔刀の使い手を――どうしてだか――べつに求めるというのならば、ぜひとも会いたい友達がいたのだ。
彼はなぜかレン・巧猿が好きになれないようすで、屋敷にはあまりたずねてきてくれない。会いたくなったら、こちらからたずねるしかないみたいだ。
――でも、たずねれば彼は会ってくれるだろうから！

どこに行けば会えるのかも前に一度、教えられていた……。
途中、ふと通りかかった店のドアにはまっていた真っ青な瑠璃ガラスを見た時には、彼の瞳の色によく似ていると思った。
——そうだ、本当はこんな青い目をしているんだよね……彼は。
こんなふうに青い目をしている青年だが、ナイトハンドという名前で素性を隠して、瞳の青を他人に見せることはめったになかった。
涼は彼がとても好きだったが、同時に彼がやや癖のある人物だと承知していた。暗闇で、すべてを傷つけてもなお危険な狩りを続ける。
戦うためだけに生まれたように振る舞い、優しさやいたわりを心底から軽蔑しているようすだった。冷酷な視線、強く無慈悲な笑顔。
——ただ、あの青い瞳だけは知っている、誰よりも澄んでいる……硬い氷の城のように。
氷の心は、自分の冷気に苦痛を感じることがないのだろうか？
涼にわかっているのは、彼が弱さを何よりも憎み、自分の内側にすらそれを許さないということだった。誰かにすがったり、愛されたいと願う感情などは、すべて遠い昔に切り捨ててしまったらしい。
——愛するという言葉自体を、あの人は胸のなかで死語にしたんだね……。
涼は小首をかしげてから、一つの屋台の前で立ちどまり、冷血漢へのおみやげに真綿のよ

うなウサギを買った。

彼がこれを喜ぶとは夢にも思わなかったが、なぜだか見せたかったのだ。

けれどもナイトハンドは、その場所にはいなかった。

それは本島の御屋敷街の邸宅の一つで、彼の本名で登録されている数少ない場所だった（あきれたことかも知れないが、彼は香港で有数の青年富豪の顔をもっている）。

現れた執事の老人は、アルディーンの姿を見て少しだけ顔をほころばせた。

彼の話ではここ数日、主は新界にいて屋敷にはまったくもどらないという。

「珍しいことではございません。連絡先もいちおう、決めてありますのでお教えしましょうな」

白髪の執事はすぐにその場所のメモをくれた。

有能で、自制心の堅固な人だったので、表面には何も表れなかったが、涼には彼が不在を悲しんでいることがわかった。

ウォルフという名のこの執事は本当は使用人ではなく、あの青年を育てたといっていい人物だったからだ。

――ウォルフが教えた場所は、皇麟街のめだたぬ路地にあった。

ドアをあけると、スキのない男たちがいくつかのテーブルにわかれて座っていた。きっと

傭兵だ……ここはたぶんセントラル・ボード（傭兵仲介所）に関連した店なのだろう。
店主は、胸にウサギを抱いた黒髪の少年が入ってきたのを見て、やや不審に思ったらしい。近寄ってきて、目的を聞いた。
「こんにちは。この場所を教えてもらったんです……」
ナイトハンドに会おうとしているのだと聞いて、一瞬目が見開かれた。
――賞金稼ぎのナイトハンドに!?
「坊や……いったい奴になんの用なのかね？」
正体を現さない、最強のクライムハンターだ。〝氷の悪魔といわれる奴だよ！〟。確かにこの店を通じて、彼に連絡をとったことは何度かあった。だが、どう考えてもこんな優しげな坊やが会うべき相手とは思われない。どういう関係かはしらないが、
「坊やは、どうしても会わなきゃならないのかい……？」
ちょうどその時、涼のうしろにいた一人の男が立ちあがった。ナイトハンドの名前を聞きつけて危険な目をしている。〝よせ！　おいッ！〟、店主が気づいて声をあげた。
――前にこの男のいた組織が、ナイトハンドに根こそぎやられていた。
男は素早く近づいて、涼の喉に手をかけてかがみこんだ。
「おい……奴の知り合いか？」
――よさないと警察を呼ぶぞ！

そう叫ぼうとした店主の目の前で、黒髪の少年の瞳がいきなり紅蓮の赤になった。
髪が波打って喉をしめる手に自分からからみついたと思うと、青白い燐光がそれを伝い、背後の男は凄まじい絶叫をあげて床に倒れこんだ。
「僕は、彼の友人です」
黒髪の坊やは、そしてにっこりと笑った。
目を皿のようにして壁にはりついていた店主は、ガクガクうなずいてすぐに会わせると叫んだ。

どういうわけか蒼白な顔の男たちが遠まきにする席にいて手をふる涼を、ナイトハンドは発見した。
「アルディーン、よくきたな」
「これはおみやげ」
動く生き物を見て、相手は露骨に嫌な顔をして——といっても、例の顔を隠すサングラスからうかがえるだけだったが——そくざに押しかえしてきた。
「そちらはどうなっている？」
「変化はない……いまのところ」
セントラル・ボードの事情と暗黒街にくわしいナイトハンドは、新界の混乱に乗じる連

中が動けないように、闇から牽制しつづけていた。
略奪・放火などの企らみがあると知れば、すぐさまたたき潰した。
奇妙だが、この青年には指揮者としての一種の才能がある……自分は通常一人きりでいることを好むのだが、ただ一人で群れを左右する力に恵まれていた。
「仇魔刀は手に入ったそうじゃないか？」
「そう。とても耳が早いね！」
涼がうれしげにささやいた。それであなたにお願いができたのだ。
レン・巧猿は妖刀の使い手をほかに求めている。
「それは剣技を身につけた人でなくてはならないって。僕が思いついたのはあなたなんだ。とても急なことだけど、巧猿は最高の剣士を探そうとしている」
涼が真っ先に思ったのは、もちろん彼だった。戦うということに、こんなにも執着している人物をほかには知らない。言うのもアレだが、どんな大時代がかった技術でも、
――知ってるぞ、きっと！
五星家のほかの家などからも、おそらく候補者がだされたら、その者たちとの試合をしなければならないだろうが……ナイトハンドは無造作にうなずいた。
「それは戦ってみればわかることだ。ようするに……強い者が欲しいのだろう？」
それは彼の自信を意味している。

〝レン・巧猿という奴は嫌いだが、手は貸す〟と、彼は約束した。
「どうしてかなァ……巧猿はいい人だよ？」
妖魔の子は目を細くして、テーブルにのったウサギをなでて言った。
「いい人というのは冗談半分で人に一服もって、新界まで誘拐してきた男のことか？」
その言葉はいつから、そういう意味になったのか!?
――この世に、これほどのお人好しがいるというのが、どうしても、いつになっても信じられない！
ニコニコとウサギをなでる涼にあきれる目が、ふと厳しくなった……。
レン・巧猿が気にくわないのは、その軽薄さや享楽主義もあったのだが、ある種の策士であることはいちおう認めていた。
その選んだ策の一つに、激しい嫌悪の原因がある。
ふいに険しい目でみつめられていると気づいた涼が、静かに顔をあげて首をかたむけた。
「今回、もしお前が私の協力を欲しいというなら、一つ条件があった……」
低い、氷のような声音でナイトハンドが言う。
「貴様、絶対にレーテアに近づかないと誓え」
その声にふくまれている憎悪に思わず身震いした。
「あいつらは悪魔だ、絶対にそばにいってはいけない……いいな？」

「ナイトハンド……」

涼には彼の冷たい言葉の理由がよくわからなかった。たしかに巧猿もうかつに近づくなといった。その理由も教えてくれた。

〝誘惑の騎士団〟などというけしからぬ噂はあっても、涼の目で見た彼らは神秘的で、しかも高潔な行動を守る人々のように思えていた。

――嵐の時にアリエナ号を助けてくれたし、新界にも力を貸してくれた。

助けを求める声を見過ごさないのは真の騎士らしい。

「騎士だと⁉　あれはただの腐った犬だ！」

〝どうしてこの人はそんなにひどい言い方をするんだろう⁉〟

――ああ、そうだ……ひょっとすると理由は、あの人々が愛するからだろうか？

愛しあうことを、これほど嫌悪している彼なのだ……しかしナイトハンドは暗い口調でただ、こう答えた。

「違うッ、理由はあれが汚れた者たちだからだ！　あの騎士団にまつわる噂はみんな本当だ、アルディーン。一つのこらず本当だぞ。あの者たちは術をつかう……心に毒を流す」

その名を聞くだけでさえ、ゾッとするような嫌悪感でおぼれそうになるのだ。

冷ややかな氷のような横顔に、涼は聞こうと思っていた疑問すら忘れてしまっていた。

強い手で肩をつかんで、骨が折れそうなくらいの力を込めるのだ。

「この場で約束しろ、アルディーン！　絶対にあの悪魔たちには近づくな！　あの騎士団の人間は腐りきっている」

「……そんなにいうのなら、誓う……」

氷のような凝視がやっとゆるんで、涼はソッと息をついた。あまりの怒りに気おくれして、それっきり聞くことも忘れてしまった。

――かつてこの同じ彼の手に見た、騎士団の異能に似たあの光は……？

しばらくの間、沈黙が続いたが、やがて少年のほうが先に、ウサギで気を紛らわして元気を回復した。

「君が僕に約束をさせるのなら、君だって約束は守るべきだと思わないかい？」

〝約束？〟、黒髪がいきおいよくうなずいた。

目がキラキラと光っている。

「そうだよ！　君はまだ梨花夫人との約束を果たしてないじゃないか!?」

ドッと音がするくらい、ナイトハンドがうしろにさがった。

――香港の女賊・威梨花が、彼女の持つ紅玉を巧猿にさしだした際には、一つだけある条件がとりきめられていた。

元宵節の夜まで香港ではあちこちで祭りや夜会が催される。そのどこかでよい、ナイトハンドが梨花をつれていくこと。

「あんな女との約束を守る必要はない!!」
「だって約束は約束だよ！　君は梨花夫人を踊りに誘わなくちゃならないよ！」
「貴様ッ……本気で私に言っているのか……？」
秀でた額にジットリ汗が浮かびだしたのを見て、どうしても不思議に思ってしまう。
――なぜ、そんなに嫌かな？　梨花夫人くらいきれいな女性って、ちょっといないじゃないか！
しかも心からナイトハンドを熱愛していると、涼は自信をもって断言しようとして……。
「アッ、ごめん!!　すみません、誰かこの人にお水をッ……」
その前で、〝よせ！〟と叫んだナイトハンドがきつく心臓を押さえていた。

――水はいらない、それよりも外の空気がいい。
半地下の店内からでると、ナイトハンドはものすごい速度でしばらく直線に歩いてから、涼をふりかえった。
「よろしいッ、私が約束を守れば貴様、文句はないな！」
〝一度だけ、あの女をつれて夜会に行けばいいのだな!?〟
涼はにっこりとうなずいた。
「もちろん！　それで、君からちゃんと誘いにいきたまえよ？」

きれいな梨花夫人はどんなに喜ぶだろう！　涼は基本的に梨花の恋路の味方であり、彼女がたいへん好きだった。

「花も忘れずにねッ！」

――海賊でも女賊でも関係ない。あの人にはとても温かい血がながれている！

誰よりも、ナイトハンドにはそれが必要だと思っていた。梨花夫人が愛しているのなら、応援しない理由はない。

――梨花がどんなに優しい人か、それに気づけばこの人は幸せにもなれるだろう！

目をふせて、何やら真剣に考えているらしい涼を、ナイトハンドは興味深く観察した。

――こいつは梨花に操られている……どうやら、完全に手先になったな！

手先はどうやら、もう一つ企らみたいことがあるらしい……なぜかポケットからペンとメモ用紙をとりだした。

「ところでねえ、君にちょっとした質問があったんだ……ウン、もちろん梨花夫人とは無関係だよ！」

――ときどき、こいつの知能が歴然と落ちることがある。

見ろ……いまがその時だ。黒いサングラスの陰で、皮肉に眉をつりあげて軽蔑した。女などつきあうからだ。

「仮に……君が女性をエスコートするとしたら、どんなふうがいちばん好ましい？　ええ

と、ほら……ドレスとか髪とかさ。具体的にどんな女性なら理想の美人だと思える？」

〝梨花夫人が知りたいんじゃなくて、僕が知りたいのだからね！〟。ナイトハンドはかつてこれほど下手な嘘を聞いたことがなかった。

「……私の理想の女？」

こめかみに不吉な筋が浮いた。

「それから好きなドレスや香水の名前。たんなる興味だから率直にね！」

――よくも梨花風情の手先になって、くだらない質問をしにきたなッ！

怒鳴りつけて追いかえしてやろうとして、ふと気が変わった。

それならそれでいい。こちらにも考えがある……ナイトハンドは穏やかに口を開いた。

「女の服のことはよくわからないが、色は赤が好ましいな」

――赤？　ナイトハンドはきっと純白の清楚が好きだと思っていたけど……。

清らかな純白のドレスで、肌もあまりださず、あくまでもしとやかに……。

「赤だ」

と彼は念を押した。化粧も宝石もつけるだけつけたらいい。色はドレスとかけ離れていたほうが（下品で）よりよいだろう。

「それと、髪は短ければ短いほどいいな」

えッ!?　と涼はあやうく、メモを取り落としそうになった。

――ナイトハンドはショートカットがタイプとは知らなかったなあ！

だが、梨花夫人の髪はあんなに長くてきれいなのに……手先はあきれるように大きい目を上目遣いにして訊ねた。

「そういう女性なら……好きになるね？」

「ああ、なにしろ理想的だからな」

「きっと好きになるね……」

急にソワソワしはじめた涼は、ついに〝ちょっと用を思い出したから！〟と断って、メモをしっかり握って走っていこうとした。

「ちょっと待て！」

――え、なに？

ふりむいた涼に黒衣の青年は、この先どこかで梨花に会う予定があるか？　と、なにくわぬ表情できいた。

「それは、アノ……あるような、ないような」

鋼鉄のようなポーカーフェイスのままで、ナイトハンドはある言伝を頼んだものだ。

「レン・巧猿が集める剣士たちの試合に、私もでることになるだろう……その時、ぜひ応援にきてもらいたい」

「……本当に⁉」

少年の目がパアッと輝いた。〝P.S. そこでケリをつけよう、二度とこの私をつけ回す気持ちなどなくしてやる!!〟

「ナイトハンド、よく言ってくれたね！　僕、きっときっと梨花夫人に伝えるよッ！」

――バカめがッ！

素晴らしいニュースを手に入れて、元気いっぱいに走っていく。

背中をにらみつけていたナイトハンドの目の前で、少年は急になにかを思ったようすで、むきをクルリと変えてもどってきた。

もどってくると、息をきらせて、ときどき……屋敷にも帰ってはどうかと言う。空っぽの屋敷で白髪の老人が一人、育て子の身を案じて待っていた。

「新界にいるほうが、それは便利なんだろうけど、でもときどきはウォルフにも顔を見せてあげなくちゃだめだよ！」

――あの人が、君を本当の身内のように愛してくれることを忘れないで！

誰にも無関心なナイトハンドも、あの老人だけには愛情をもっている。

たしかに、青年は一瞬曇った目をした。そしてつぶやいた。

「ウォルフが愛してくれていることは知っている……」

――この日、いろいろと嘘をついた彼は、この時だけ……ふいに本当の言葉を話した。

「だが私は誰にも愛されたくないのだ！」

「アア、あなたは自分の言っていることが、わからないのさ！」
澄んだ、見通す目をして少年は笑った。
ナイトハンドはただ首をふって言った。本当に愛されるのは嫌だった。なぜなら、
「貴様ならわかるだろう……アルディーン、この世には説明できなくても起こることがある」
「それは……なんのこと？」
ナイトハンドは不思議な笑い方をした。
彼を愛した最愛の父と母。そのほかにもあるいくつかの記憶。
――父は殺された。母も殺された。ウォルフでさえ、自分のそばで一度生死の淵をさまよう負傷をした。
愛されたいと望んだ時に、続けて死が……襲ってくることを彼は何回も学んだのだ。
「私は凶運の持ち主だと思う。私を愛してくれた人は、みな死ぬ……」
ウォルフにはできるだけ近づかないでいると、ナイトハンドは冷たく言った。
「そう……あれは凶運の持ち主でございます、美しい奥様」
新界のキュロスも断言していた。
皇麟街の自分の店に久々にもどってみると、非常に意外な客からの依頼が彼を待ってい

た。
香港暗黒街の妖花、威梨花であった。
――訊ねたいことは、わかっていようね？
美しい女賊はあでやかな笑みとともに見事な指輪をぬき、術士のテーブルの上に置いた。
「占って欲しい願い事があるの」
それから、願いを成就する、まじないもぜひ……キュロスは営業的な笑顔を見せて、小首をかしげた。
「ひょっとすると……恋の願いですな」
「そうよ！　そして相手も誰か、お前はもう知っているはずだろう？」
紅玉の探索にあたって、この術士は〝彼〟と一緒だった。もちろん、梨花のだした〝条件〟も知っている。
――紅玉とひきかえに、一夜……踊りに行く約束を手に入れたのはうれしいことだった。
ほかの相手ならばそれだけで、陥落させる自信が充分にあったが、
――あの人は駄目、きっと去っていってしまう……まあ、どうしよう？
威梨花が恋に術士の手を借りようと思うなどは、まさにこれがはじめて。
だが不思議なことに……はじめにたずねた術士のクリスタルには、彼の姿はかすみがかかったようにうつらなかった。次も……その次も。

――最後に思い出したのはキュロスのところだった。
キュロスは新界でも名うての術士で、あの彼といささかでも近づきがあるようだ。
「……協力しておくれだね？　もちろん報酬は望みのままに言って！」
キュロスは……愛想笑いをくずさずに、美女の依頼を受けるのは名誉だとつぶやいたが、
「しかしながら、奥様！　香港はまことに広く、これほどまでに華やかでございます。世にもお美しい奥様に似合いの美男子も、まだまだ星のごとくお探しできまするぞ！」
形のよい眉が、軽くつりあがった。
「お前それは、どういう意味だえ？」
〝あの男はお薦めしかねると申しますな〟、美女の氷のような視線にあっても、キュロスはさすがに古ダヌキだった。
「あれは……私めの見るところでは、もう長くはありませんから」
――あの人に死相がでているとでも言うのかい!?
死相というよりも、凶相だとキュロスはうそぶいた。
「まあ……この呪術士め、私は信じないよ！　だってあれはナイトハンドと呼ばれる男なのよ！」
香港暗黒街で最強とまでいわれる男なのだ。病魔の気配も感じられない。
「いやいや強い者ほど、強いだけ……死の波がくる時は素早くきます。レーテアの騎士たち

のような。あの者……クリスタルに姿が現れにくいとおっしゃいましたな？　おそらくそれは……」

――レーテア騎士団の場合と似ているが、もちろんそうではあるまい。

「おそらくそれは、きゃつの身近にアルディーンの力が触れているせいでしょう。坊やはあの男と〝友達だ〟と言っていましたからなあ」

別種の魔力がかかわってくると、事はいつでもややこしくなる。

「それでも、わしはあの若者の未来が尽きかけていると確信しましたわい」

「なぜ!?」

「愛を知らぬ生命は、長くはございません」

たとえて言えば、自分で毒をもっているようなものだ。

あの若者は愛を拒み、心を氷にすることによって、最強の戦士に自分を作りあげた。

そのひきかえに生命力を少しずつ失っているのだ……。

「自分の冷気で、自分を殺しつつあるのでしょう」

こうした行為は、その者の星の運行さえ変えてしまう。

「頭上に死の星座を呼ぶのでございますわい……」

その瞬間、梨花の目に表れた恐怖を見るまでは、キュロスでもこの美女がどれほどあの青年に愛をそそいでいるかがわからなかった。

「それなら、もし……もしもよ、あれが誰かを愛してくれたら、生命は消えないでくれるのだろう？」

心から……それはおよしになったほうがいいと、キュロスは忠告した。

「死相ではなく凶相だと申したはずです。あの者にかかわるのはおよしなさい、奥様。所詮、助かる道はないのです」

〝もうお黙り！〟、ついに梨花が目を凄まじく光らせて叫んだ。

「醜い呪術士め！　口に気をつけないとお前の生命のほうが危ないよッ、よくもあの人の未来を、嫌なことばかり……お前にはどうせ何もわからないくせに！　そうさ、呪術士に愛の何がわかるものか！」

叫びはしたが、そのまま梨花は美しい顔をおおって泣きだしてしまった。

キュロスはただ……意外に親身なまなざしでその姿を見ていたが、やがて丁寧に銀の茶器で茶をいれて美女にすすめた。

ひと口、飲みおえてから梨花は憂い気に目をふせた。

「少し取り乱してしまったわ……すまないね」

キュロスは首をふった。悩みをかかえて術士の扉を叩くものが……特に愛に悩む御婦人が——たまには取り乱すのは、ふつうのことだったのだ。

美しい梨花は微笑んだ。

「ただ、はじめに言っておかなかったのが悪かったのね？　私はあの人のためならばもう、自分に何が起きてもかまわないのよ。それをわかっておくれ……あの人が好きなのよ」

……優しい笑顔でそっと微笑んだ。

「女の生命で引き換えになる呪法でもあれば、ぜひとも教えておくれ。感謝します」

キュロスという術士は首をふってから、とても遠いところを見る目になって言った。

「……さよう、奥様。術士には愛のことなどわかろうはずもないのです……」

それは新界の呪術士にとっては暗黙の掟だと、キュロスは言った。

もとから……この街では、呪術士になると大きな力と可能性を手にするが、愛しあう道からは遠ざかると、誰もが知る理由がある。しかし、それだけではない。

「これまで長く生きて、よく身に染みて知っております。術士が愛に迷うと、必ずや不運がおとずれます。術士になるということは、そういう意味でもあるのです」

魔斑は……ひょっとすると、術士を護るものかも知れないとキュロスは言う。それほどまでに、愛は術士の頭上に不幸の星座を描くものだ。

術士は愛を捨てる……それがたぶん新界の定めだ。

美しい梨花は、やや放心したように術士の言葉を聞き続けていたが、

――ナイトハンドもまた同じだ。

キュロスは、落ち着いた静かな声で言った。

「あの青年は、愛する者を殺すのが星回りのようです。あれほどまでに愛を憎むようになったのは、それが遠い理由の一つでしょうな。彼が誰かを愛する時には、きっとその相手を死なせるでしょう。たとえ無理に運命のカードを逆転させても、彼がその相手に殺されるだけの違いです。助ける道はおそらくありますまい……それだから凶相なのです」

――新界のいかなる護法をもってしても、この星はやぶれないだろう。

術士キュロスは、そう言って目を閉じたのだ。

そのころすでに、巧猿の手の中には香港のいわゆる〝剣士〟のリストができあがっていた。

やはり、なかなかにおもしろい経歴の者が多いのだ。

本島と新界で、それでもあわせて数十人がいた。やはり急だったので、五星家のすべての家から候補がでられることにはならなかったが、それでもアリエナ・ライルの香港警察からは、さすがに二名があげられている（しかも片方は春麗という名の少女剣士だとか）。

セントラル・ボードからは数人……ナイトハンドは匿名の挑戦者として、新界総督府を通じて登録されることになっていた。

「所持者の決定は、やはり実力をトーナメントで見てしようと思っているんだ」

と、声をかけると、窓辺にいた少年がクルリとふりかえって、うなずいた。

夜景を見ていたらしい。港の夜景を見ていると、多少ホームシックになる……そのそばにいって巧猿はかるく肩に手をかけた。

素直な目が、見返してくると、この少年がずっと前からこの屋敷にいたのでないことが、なんだか信じられない。

「いっそのこと……このままずっと香港の子になったらどうかな？」

涼はそれを優しい冗談だとうけとって、ニッコリした。

「そうか、ネオ・ナリタには君のいい子がいるんだったね」

ええ、とうなずいてから赤くなる涼を、巧猿はやや不思議な気持ちで見守る。

とてもおもしろい。街角にいたり六絃琴の練習をしている時には、まるで風変わりな女の子のようにさえ見える涼が、ネオ・ナリタで待つ〝真夜子〟という魔法の名前を口にする時だけは、一人前に恋をする少年の瞳になる……おもしろいものだね。

黒髪に手をおいて、クシャクシャにまぜた。

――きっと会いたいのだろう？　このごろはよく船を見ている……。

「なにもかも僕のかかわりで、本当にすまないね」

〝巧猿、いいんですよ！〟と言って、涼は元気に首をふった。明るい笑い声をたてて、

「真夜子はとても優しいんです！　それにすごく元気だから……心配していると思うけど、無事に帰れば許してくれると思う。ウン、なんとなく……わかるんです。いまだって、きっ

とネオ・ナリタで待っていてくれる！」

「心が通じ合っているんだね！　うらやましいなァ……」

巧猿はいささかタメ息をついた。

待っている人などかけらもないキュロスが、ここで……ある注意をしにやってきた。巧猿がまえに涼にやった竜石のお護りを腕からはずさせたのだ。

「不思議じゃ……なぜお前は次々と、してはならないことをやりおるのかな？」

――巧猿。彼には護符はいかんぞ！

「あれ……いけないのかい、キュロス？」

竜石は香港では一般的な護符の一つで、五星家の巧猿はその中でも特によいものをいくつか所有していた。力もあり、美しい細工もされていた。涼にはよく似合っていた。

香港では事情柄、いま護符が大はやりだったのだ。

ほかの者たちはかけさせてもいいが、涼だけ特別だとキュロスは説明した。

「坊やの力は強いがとても不安定だし、敵が現れればいつ爆発するか油断ができん。力が最高に張りつめる時に、違う種類の影響をうけるのは護符といえども好ましくはないのさ」

坊やだけは、どんな術士の護符も外しておいたほうがいいと術士は強く念を押した。

〝真夜子はネオ・ナリタで待っていてくれます！〟

レン・巧猿にそう言った瞬間。涼は恋する乙女との間で心などてんで通じ合っていないことをひそかに暴露していた。真夜子はネオ・ナリタで待ってなどいない。

——真夜子は、すでに香港のポートにきていた。

香港の、ほかの街からきた船がつくメインポートに、一人の少女が降りてあたりを見回していた。

安物らしいショルダー一つを荷物にして、挑戦するような目で周囲を見ている。

ポニーテールに赤のジャンパー、速度を重視した威勢のいい短いスカートで、ケンカ腰の目付きがあきらかに香港の少女ではないのだ。

乗ってきたのは貨物船ギリギリの古い船で、ネオ・ナリタからの時間も最高にかかったものだ。

待ちかねていたポートに飛びおりると、目を光らせてこぶしを握りしめた。

——涼、待っててよ！　すぐにあんたを助けてあげるからねッ！

通りすがりの傭兵が、気力におびえて銃をぬきかけたくらいだった。この少女の目がこんなふうに光る時には、嵐を呼ぶということを香港も覚えておいたほうがいい。

レン・巧猿という悪党が、気弱な居候をさらっていってしまったのだ。

——冗談じゃないわよ！　インタビューしにいっただけなのに!?

思い出すと腹わたが煮えくりかえりそうになる。涼は優しくておとなしい、ウサギのよう

な弱虫だったのだ。ケンカ一つできない役たたず！　ただやっかいにも、非常に可愛らしかったので、

――悪党が目をつけちゃったんだわ！

レン・巧猿とかいう男の船でさらわれたのは確かだった。そいつは香港の名家と名乗っていたが、ネオ・ナリタでの行状といい――居候を誘拐した時の手際のよさといい――あるいは海賊か人買いの一味なのかもしれない。

ちょっと脅されたら、涼なんか泣きながら売りとばされてしまうだろう。

「でもね、もう大丈夫よ。真夜子が助けにきたからね……」

どこに売られているにしても、きっとつきとめて取り返してやる！

小声でそっとつぶやいてから、少女は重たいみすぼらしいショルダーを肩にかつぐと、勇ましく見知らぬ街を歩きはじめた。

――悪党の誘拐野郎ッ、見てらっしゃいよ！　チクショウッ！

見知らぬ街ではあったが、カンのよい少女は奇妙なあわただしい気配に気づいていた。祭りがあるというのは聞いていたけど、そればかりではなさそう……。

むしろ決戦前夜という感じだった。

――何かあるのかしら……？



真夜子の行く先はまず香港警察の本部だったが、ここもさらに異様な喧噪の最中にあった。

海上警備の緊迫した状況だけではなく、レン・巧猿が行う予定のトーナメントにもいささかの関係があったのだ。

重装備の警官や、内勤の事務官たちまでおおわらわになっている。

ネオ・ナリタから少し前に発信された、16歳の誘拐事件について訊ねようとしたのだが、受付のきれいな女性は気の毒そうに首をふって、

「ごめんなさいね。あさっての昼まではとても調べられないわ！」

そのうしろを、無線の小型機を点検する技師がかけていく……。

「じゃあ、あさってきます」

やむをえずあきらめて警察署の建物をでると、真夜子は道端の像を蹴った。

――ついてないわねッ？

見知らぬ街で、その次にやらねばならないことは、今夜の宿を探すことである。急におなかがクーとなった。ポケットの中身はあまりたくさんはない。

最低でも、あさってまではどこか泊まる場所が要りそうだった。

どうしようかしら……考えるより早く、荷物をさげて歩きだそうとした赤毛の少女に、うしろからさっきの受付の女性が走ってきて声をかけた。

「ねえ、あなた！　この街に初めてきたんでしょう？」
もし今夜の宿が要るのなら、この本島よりも新界のほうが安く探せる。
「それで、もしよかったら私の伯母が皇花街で宿屋をやっているから教えるわ」
「ありがとう、すごく助かります！」
パッと笑顔になった相手を見て、親切な彼女も笑って所書きを手渡してくれた。女の子一人でも、そこなら安心できるといって保証した。
「高くはないし、それに食事付きだからいいでしょ？」
食事付きッ……湯気のたつ夕食をつめこんで、真夜子は生き返ったような気分でタメ息をついた。
宿は小さいので、夕食の席は相席だ。祭りを見にきたのかい？　と、隣の夫婦に聞かれたので真夜子は首を横にふった。
「その子は人捜しですよ、旦那さん」
――えッ、どうしてわかったの!?
新界の、その伯母というのは、小さいクリスタルの主でもあった。占いと宿屋の兼業だ。
目を丸くしている真夜子に、夫婦が教えてくれた。
「本当に、あたるの？　いまどこにいるかわかる!?」
女占い師は、真夜子の目を見て首をかしげた。

生き生きとした、強い星のもとにある娘だと思うが、非常に奇妙なものとのかかわりを強く感じた。

「あんたの捜している相手ってのは、いま人間かい？」

「……あたりまえでしょう!?」

怒らなくてもいい。女あるじは笑って真夜子をなだめた。

自分の呪術士の力は、それほど強いものではないのだ。

「だからね、違う種類の力がかかわると、すぐにはっきり読めなくなってしまうんだよ」

たとえばほかのもっと強い術士。ほかの魔性。

セイラ・テンプルからくる気が、いま新界には強く流れ込んでいる時でもあるし……。

「セイラ・テンプルって、何？」

騎士団の話を聞いて、少女はみるみるうちに青ざめた。

まさか涼はそこにいるんじゃあ……宿の女あるじは、たぶん違うと言った。

「レーテアの気配がする時には、あたしのクリスタルはかすみがかかったように曇るものさ。その子のは違うよ、まるで違う」

見たこともない紅蓮の光があることは言えなかった。勝ち気そうな少女の頬に、大粒の涙が一つだけ伝って落ちていった。〝あの居候ったら……どこへ行ったのよ？〟

「あんた……よっぽどその捜し人が大切なんだね」

女主は奥から鳥籠をだしてきた。
――編んだ竹の鳥籠で、1羽だけの黒い鳥が入っていた。
彼女の……いわゆる使い魔である。
カラスみたいと思って、なにげなく見た真夜子はそれが三本脚なのにすぐに気づいた。
「残念だけど、あたしの目ではその子がどうしているのかさっぱりわからないけど、あんたが少し心配でないようにしてあげようねえ……」
「……何、それは？」
「あんたの捜している相手に、ここからお護りをかけてあげるよ」
〝その子の衣服か写真はないかい？〟、そう言われて真夜子はあわててショルダーの中をさぐって1枚のセーターを取り出した。
「あるわ！　これが涼の気に入りのセーターだったの！」
――ずっとこればかり着ていたのに、さらわれた時においていってしまった。
「もし寒いといけないから……べつにいらないけど、でも……やっぱり持ってきたのよ」
ネオ・ナリタから荷物につめてきたのだ……女術士はそれをうけとると笑顔でうなずいた。〝いいね、これならあたしは術がかけられるよ〟
「さあさあ、お前の羽根を一つお寄こし……」
そう言うと鳥籠をテーブルにおき、みなが見守る前で使い魔の鳥に羽根を1枚抜いてださ

せた。黒い鳥はまるで言葉がわかるように、くちばしで翼から羽根を抜きだすと、竹の透き間からだしてよこす。

女術士は、それを受け取ると聞いたこともない節で単純な呪文を繰り返しながら、ひろげたセーターの上から黒い羽根をゆっくりと落とした。

——不思議にも羽根は落ちながら数を増やし、粉雪のようにセーターの上に舞い散ると、急に吸い取られるように消えてしまった。

息をのんでいる真夜子に、彼女は自信をもって術の完了を告げた。

「羽根の護法だからね。離れていてもよく効くのさ！」

新界では、護法は高度に発達している。

このごろは大勢の者が、自分の大切な相手にかけさせるために護符を買っていくのだ。

「あんたの大切な子がもしお護りを持っていなかったとしても、これで大丈夫！　あたしの護法がいまかかったからね！」

第八章　香港最強の剣士——笑うセリオス

〝仇魔刀の所持者は、トーナメントで実力を見て決定しなければならない〟
数十人のリストを前に巧猿が言った時には、涼もその言葉をまことに正しいと思ってうなずいていた。
「でもそれが、どうしてこんな大騒ぎになっちゃうわけなのかい!?」
〝最強の剣士の栄冠は誰に!?〟、金文字のポスターが街じゅうに貼られ、朝からもうあちこちで無意味な花火さえあげられている。
レン・巧猿をはじめとする五星家と、香港の治安に携わる人々の前で、簡潔な試合をして決めることもできたはずだった。
「まあまあ、涼！　これが香港のやり方って奴なのさッ」
すべてを手配した巧猿は、ここまでの成り行きにきわめて満足そうだった。
噂は噂を呼んで、人々はこのうえなく熱狂していた。
また爆音！　この花火だってもはや巧猿のたくらみではないのだ。

――レン・巧猿は試合のすべてを、完全に公開する方針で動いていたのだ。

あろうことか、決戦の会場を新界〝黄金の針〟のスタジアムとまでした！

「チケットは前売り制で、ずいぶんともうかったらしいよ！　当然、僕らの分は最高の貴賓席がおさえてあるからねえ！」

〝僕……なんだか、そろそろあなたについて行けそうにない気が……〟

嫌がる涼にも無理やり宝飾のついた香港の少年用礼服を着せて、巧猿は似合うと大笑いをした。自分もはっきりと華美にきめて……さあ行こう！

――我らが最強の剣士の誕生を、その目で見るために!!

そして一方では、その朝もまたセイラ・テンプルからは、レーテア騎士団の巡視船団が整然と香港の内海へとむかっていた。

レン・巧猿の派手好きの魔手が、今回彼らにまで届かなかったのは僥倖というよりほかないかもしれない。

――その朝。

セイラ・テンプルでは、いつものように5隻に乗船する騎士たちが、長老会からの最後の連絡をうけていた。

円卓の中央に海図が広げられ、これまでの経過と注意事項がもう一度繰り返される。

すなわち、

「異形の魔には銃器の効かない可能性が強い。その場合には冷静に闘気で対応せよ。報告により、これはすでに有効であることが確認されている。

ただし予想では、一種類の妖魔には我々の力が通用しないとされている。これが現れた場合には、即座に船に通信して仇魔刀の到着を待ってもらいたい」

実戦の経験で右にでるものはないレーテアであるが、呪術のかかわる敵というのは、全体としてはこれがはじめてだ。どの騎士の顔も真摯である。

〝とにかく、この件に関しては騎士団は香港当局の見解を信じるよりほかない〟

長老は第一回目の集会で、そう告げていた。魔術士？　幽鬼？　暗黒の術士？

――いささか……おとぎ話のようだが、この街では真剣な対応を必要と思え！

セイラ・テンプルを香港に置いて、すでに数十年……呪術の存在は否定できない。いくつかの実例を長老会も見てきたのだ。

「香港ではこの魔物を人鬼と呼んでいる。魔獣として最強であるといい、敵方に現在2体いると思われている。また警告によれば、燐光は術の予兆であることが多いというから充分に注意せよ……そして何よりも、死人の反撃を考慮するように！」

一つ一つの異様な注意事項が、三度にわたって繰り返された。

長老は、並み居る騎士たちを鋭い目で見渡し、

「慣れぬ敵であるが、遅れはとるまいぞ、諸君」

瞬間、燃えたつような闘気は騎士たる者の証でもある。あらゆる勇気がくじける魔界で、互いに魔性を秘めて結びついた心は恐れを知らない。倒れても、地獄でなお戦いを愛するだろう……レーテアだけは！

……会合が終わった騎士たちが、急ぎ足でそれぞれの配置へむかう通路に、たたずんで待つ侍者がいる。

「ラーラ！」

呼びとめられた背の高い騎士が一瞬、驚いたような表情でふりかえった。

「リュー、どうした？　王妃様のお側についていなくては！」

この少女の名前はリューと言って、騎士イグナチウスのエリュシオンである。

まだ侍者でありながら、格別の戦闘能力と闘気を認められて、新王妃カナリアの近衛に抜擢されたばかりだった。

「少しだけ、エリックが代わってくれました。ラーラに会っておいでと言って……」

見上げる瞳に強い光がある。イグナチウスはあらためて、この少女を愛おしく思う気持ちに包まれた。

「ラーラ、私も一緒に行きたい！」

くちびるをキリリとむすび、輝く目で彼女の騎士をみつめている。どのような戦場にもついて行きたいのが侍者たるものの願いであった。

――敵の本体と目される幽霊船に遭遇した唯一の騎士として、イグナチウスはこのところ常に行動に参加していた。

リューには近衛という役目があって、ずっと異なる配置におかれている。長老会のこの決定が少女はもう不満でならなくなったのだ……。

しっかりと上衣を握る指を包みこんで、イグナチウスは笑った。

――リューほど美しい生き物が、この世のどこにいるだろう!?

漆黒の長い髪、珊瑚のくちびる。ほとんど黄金に近い褐色の肌を、あざやかにいろどる紫玉の瞳のエリュシオン。

近衛の人員の中でも王妃カナリアに愛されて、早くもお側去らずとされていた。一心に輝くこの瞳は、どんな宝石にも勝ると思う。

「リューにはカナリア様を守る、大事な務めがあるだろう?」

「でもラーラ、リューは……」

王妃様の寵愛はうれしいが、それでもリューはほかの騎士のエリュシオンと同じように、ラーラとともに海上の戦いにでたかったのだ。

「近衛だからしかたがない」

イグナチウスはそう言って、少女の指を優しく放した。不満そうな目をしているので、甘く抱きしめてやる。

〝そのお役目がどれほど羨ましく思われる名誉か、わからぬわけではないだろう？〟

「それにこれは結局、戦いといえるほどのものでもないぞ？　いつもすぐもどってくるじゃないか、そうしたらまた一緒に星を見よう……」

軽くくちづけすると彼は少女にもどるように命じて、自分もまた走っていった。

定められた船に乗ると、同じ隊に分けられていた騎士エリックがいた。

「リューがわがままを言ったようで、かたじけない」

厚意に礼をいうと、エリックはひかえめな笑みを見せた。

「どうせ短い間だったのです。よければ私がしばらくリューの役目を代わりましたものを」

〝あんなにきたがっていたのですから！〟

イグナチウスもかすかに笑った。エリックはこのイグナチウスという騎士が好きで、リューとも仲がよかったのだ。

セイラ・テンプルで育った子供時代、イグナチウスは彼らのよい先輩だったといえる。

「エトルタ殿にみつかると駄目ですが、リューなら戦いも騎士におとらぬ力を見せますから……それになにしろ彼女はあなたの侍者でしょう？」

――すでに侍者を得た騎士が片方だけで任務にでることは、ほとんどなかったのだ。

エリックがなにげなく言って視線をむけると、イグナチウスは意外にも、やや眉をよせて表情を曇らせていた。

「……リューはこれから、前線にでないことに慣れなければならないのだ」

「イグナチウス、どうして!?」

エリックの驚きは、もっともだった。

リューという侍者は騎士団で一、二を争う手だれのイグナチウスに鍛えられた実力の持ち主で、とりわけ闘気はどのエリュシオンよりも抜きんでていた。

――その力が認められたからこその近衛ではないか！

〝近衛は……レアル様の厚意と思っている〟。イグナチウスは不思議な笑い方をした。微笑みながら、何かを悲しんでいるようにも見えたのだ。

「エリック、私にもしものことがあったらリューのことを頼めるか？」

「イグナチウス、あなたに限ってそんなことはあり得ません！」

この程度の任務で……イグナチウスもうなずいた。

「私もそう思ってはいないさ。だがもしも今日、私に何かがあれば、その時からもう二度とリューは前線にでてはならなくなる……わかってくれるな？　エリック、リューは素晴らしい侍者だが、戦場にだせない騎士になる」

その言葉を聞いて、エリックがかすかにくちびるをひきむすんだ。ようやく、わかった。戦わせれば、誰よりも素晴らしい能力をもつリューだが、傷ついた時には……。

「あの子には自分を癒やす力がないんだ」

――私がやれなかったのだ……。

うつむいているイグナチウスの頬に過ぎゆく陰は、エリックには、はかりしれないものに映った。

「リューの気性はわかっている。あの子はたとえ癒やす技をもたなくても、戦いにでれば先陣にでずにはいられない子だ。だが、同時に優しい子だから……近衛の任にはむいている」

――この方はおそらく何千回と、このことを考えていたのだ……。

「そう……リューには近衛として、まだ立派に王家のお役に立つ力があるだろう！　それでも君たちやほかの騎士のように、戦場を一人きりでさまよい……自分の侍者を探す旅はできない」

だから……と、雄々しい美しい目をした騎士が遠くをみつめた。

「我らがレーテアの故山にもどれれば、あの子にも未来がある！　平和な美しい故郷の強い血の中から、リューの生命をつなぐエリュシオンがきっと見つかるだろう」

リューの未来は唯一レーテアにあると知った日から、誰よりも強くイグナチウスは故郷への帰還を望んでいた。

――そのためなら、私の生命は捨ててよい！

なんとしても騎士団を彼の地にたどりつかせたかった。そのためには、彼は文字どおり死力を尽くすだろう。

「だから……リューにはそろそろ前線に立つことを忘れさせなければいけないのだ……」

この次の任務も、その次にもリューは近衛を守らせるつもりだった。

エリックはその手を強く握りしめた。故郷への旅は、もうすぐそこに見えているのだ。こんどの任務が終われば、騎士たちは旅立つ。

「王家はやりとげるでしょう！　それは早い旅ではないかも知れませんが、かならずどの騎士の目にも故郷が見える日がきます。あなた一人ではない、だから……レーテアを見るとしたら、あなたとリューはきっと一緒で見られます！」

そうでなければならない！　エリックの手の力に、イグナチウスも笑いながら答えた。

「私もそれをいちばんに望んでいる」

愛しい少女を抱いて、花嫁のようにでもしてレーテアに入らせたい。

その幻は奇妙なことにエリックの頬を赤らめ、イグナチウスは〝おや〟と眉をあげた。

――おや、エリックの奴は！　ことによるとエディランドより先に相手を見つけたのだろうか？

……イグナチウスの視線に、エリックはそわそわと自分の手を見たりしている。

「あ……その、イグナチウス。新界で人捜しをするにはどうしたらいいのだろう？」
「人捜し？」
一人きりで、たずね歩いてもなかなか見つけることができないのだ。新界の占い師たちは、レーテアの騎士だと見えないと言って断ってしまう。
「このところ捜しているのですが、見つかりません。あなたなら、以前この街でずっと人を捜していた経験があるから……アッ、すまぬことを！」
――しまった！　なんてことを言ってしまったんだ！
上の空で、思わず口をでてしまった言葉を死ぬほどくやんだ。彼が〝捜していた〟というのはアーサーという少年で、レーテアのもう一方の力を渡すほど魅かれたのに、わずかの間に離れ離れになってしまったのだ。
アーサーはもとから素性を隠してイグナチウスと出会い、その青い瞳の記憶以外の手掛かりを何も残さなかった。アーサーという名前さえ、本当は偽名だった。
リューが救うまで、イグナチウスは一時狂ったようにアーサーを捜し続けていた……。
「おい……落ちこむな、エリック！」
だが、イグナチウスは笑いながらエリックの肩を叩いてみせた。むしろこのおとなしい騎士の人捜しのほうが気がかりだった。
「たしかに私は新界で長いあいだ人を捜していたことがある……アーサーをね」

もう痛みのない声音に、エリックもようやく目を上げる勇気がでたらしい。
「新界の占い師たちが言ったことは、だいたい本当だ。レーテアの人間に、彼らの術はかかりにくくなるらしい……私が前にアーサーを捜した時も、役には立たなかった」
しかし、それも強さの度合いがあるものだと、つい最近になって知ったのだ。
「我らが力を貸す、五星家の巧猿殿に私は会ったことがある……」
嵐の夜に、やはり海上でのことだった。
「五星家は香港でも最古の家柄の一つと聞く……巧猿殿は非常にめずらしいカードを持っておられた。恋占いのカードをな」
〝恋を占えば、はずれることはないという最強のカードです、いかがです？　占ってみませんか？〟騎士とその侍者の事柄は、どうやら恋占いの定義に入るらしい。
「た……正しかったのですかッ？」
「正しかった……ある程度は」
一言だけ、イグナチウスは答えてうなずいた。いずれにせよ言うことは一つだ。
それが恋占いの呪法であるがゆえか、レン・巧猿のカードは一度、騎士団をかこむ霧を越えてみせていた。
「あのカードであれば、あるいはその捜し人を示してくれるかも知れないぞ、エリック」
みるみるうちに、若い騎士の頬に生気があふれた。

――なんとか……巧猿殿にもう一度お目にかかろう！

笑みをふくんだ声音でイグナチウスが訪ねる。

「その捜し人が君の……なのか？」

「わかりません。ただ……どうしても、もう一度会いたい気持ちがするのです……」

会って、あの時一瞬に感じたことを、もう一度確かめたかったのだ。固く決意したらしいエリックの横顔を、イグナチウスは笑顔で見ていた。

「捜しあてたら、その時は私たちにも会わせてくれ」

「……はい」

船はすでに例の暗礁の海域にさしかかっている。合流地点からは船内の配置も変化する。〝そろそろだな……〟、イグナチウスがそうつぶやいた時に、生き返ったエリックの心に、あ……とひらめいたことがあった。

「そうだッ！」

イグナチウスが大声にふりむいた。エリックが顔を輝かせて、手をのばす。

〝そうとも、レン・巧猿殿の所有するカードがもしもそれほどの力をもつならば……〟

――彼のアーサーの居所だって、それこそわかるのではあるまいか!?

セイラ・テンプルのリューが、イグナチウスの強力な闘気を受け継いだように。

青い瞳だったというアーサーも、彼の金色の気をいまも受け継いでいるはずなのだ。

――どこにいるか、それがわかれば！

〝二つの力を合わせて、一つにすることもできるかもしれない！〟

「どうしたんだ、エリック？」

不思議そうに聞くイグナチウスに笑いだしたくなる。この騎士ほどの者でも、愛にはやはり盲目になってしまうのだ！　巧猿殿のカードについてみずから知りながら、イグナチウスは可能性に気づかなかったんだ。

だが、答えようとした一瞬に、騎士エリックの口元が凍りつくように閉じられた。

「いえ……私はただお礼を言いたくて」

顔色が、鉛のように青ざめていた。

――その時、にわかにあわただしくなったので、彼らはそれ以上会話をかわす時がなく別れた。

こわばった異様な顔のまま、エリックはイグナチウスと別れて部署につく。

二つの力を一つに……考えずに言おうとした言葉が何を意味するのか、誰にも教える気持ちにならなかった。

〝アーサーが見つかれば、リューと力を分け合うことができるかも知れない！〟

あやうく言いかけた言葉を、飲みこんでしまったのは、その次の瞬間に浮かびあがった疑問だ。

――だが、すでに分けられた力が一つになることはあるのだろうか？

一人の騎士から全きエリュシオンは一人だけというのが、異能の掟であるはずだ。イグナチウスの力は、アーサーとリューに分けられてしまった。

もしも二人の力がそのままで一つにならなければ……次にできることはなんだろうか？

おどろに浮かびあがる疑問は、言いようのない答えを呼ぶ。

――アーサーが見つけられた時に、本当は何が起きるのだろう。

アーサーさえ見つかれば、すべてが望みどおりにうまくいくと、これまでは思っていた。リューは欠けていた力をおぎない、青い瞳のアーサーは絆に帰ってはじめて安らぎを得るだろう。やや夢想家のエリックは、漠然とそう思っていた。

しかし〝もしもアーサーが力を放せず、二人は与えあうことができなければ？〟

騎士団の力は最愛の一つの器の中にしかありえないとすれば……。

「もしその時は、見いだされたアーサーの……」

――生命を奪う？

そこにはたしかに恐ろしい意味が潜んでいた……。

信じられない。自分はなぜこんな恐ろしいことを考えたのか、本当に不思議だった……騎士エリックは頭をひとふりして、忘れてしまおうと誓っていた。

さて、その朝。

香港警察はひきつづき異様な喧噪のただなかにあるのだった。

「レディ・ライル！　試合会場からの報告です……現在、警備上の異状はありません。人数はあいかわらず増えつづけています！」

「そのまま、警戒を保ってちょうだい」

香港警察署長、アリエナ・ライルはひきつづきAクラスの警戒態勢を維持するように指令して、通信機をおいた。

「あのろくでなし！　どうして、こんな時に私の仕事を増やすのかしら⁉」

いささか乱暴につぶやいてから、この朝5度めのチェックをした。

美しいとび色の髪と瞳のこの少女は、五星家の当主であり、世襲の署長を受け継いだ勝ち気で怜悧な女相続人であった。

――レン・巧猿がくわだてたこの試合は、お望みどおりに香港全体をムチャクチャに盛りあげてくれた。

予想もつかない場所への大量の人出、チケットの競りあがりとカケ屋の盛況。どれもこれも治安当局には頭の痛いことばかりだった！

形のよいこめかみを押さえて、アリエナは〝黄金の針〟をにらみつけた。

――ろくでなし！　よくもあんなところへ何万人を集めたわね！

よりにもよって、香港でいちばん抜け道の多い歓楽街へ。さすがに会場は封鎖もできるというが、本島の相当なVIPまでが見物に集まるという。

魔船の手の暗殺を、なによりも警戒していた。試合の剣士たちにはそれぞれれっきとした推薦者がついているはずだから、ここに心配はなかろうが……観客としてならどんな怪しい者がまぎれこんでも不思議はないのだ。

誰よりも、敵の術士が狙うであろうバカ者が、この状況を自分から作りあげたのだと思うと涙がでる。

いま一度、窓から彼女は〝黄金の針〟をみつめた。美しいとび色の瞳を閉じて、アリエナはくちびるをかんだ。

新界の街は、かつての活気をとりもどしている。

——ああ、神様。あのろくでなしをお守りください。

身のほど知らずにも魔敵に挑んだ、陽気な声が聞こえてくるようだった。

「よろしい諸君！　とりあえず盛りあがったじゃないか？」

美しい威梨花は、その朝、鏡の前で勇気をふるいおこしていた。

〝黄金の針〟のざわめきが、もうここまで聞こえてきている。

「奥様、それだけはおやめください！」

腹心の部下が不安でとめるのも聞かずに、鋭利な刃を必死の思いで黒髪にあてた。涼が善意で伝えてしまったナイトハンドの嘘を梨花は固く信じていた。

――同時に術士キュロスの言葉はまやかしと思いきったところが、まことに女らしい。思えば狼大に出会った少女のころから、一度も切ったことなどない美しい髪だった。夜の海のようなその絶妙な色艶を、新界の多くの美姫が心底羨んでいたものを……。威梨花にとっても、なによりも自慢の黒髪だったのだ。その手が目に見えてふるえているのに、なんとかやめさせようとしたのだが、

「ええ、お放しッ……私の好きにするのよ！　私の髪なのだから!!」

ひとふさ、大きく切り落としてしまうと、不思議にも手のふるえがとまった。

まるで、絹糸のような束が次々と足元に落ちていく……。

――やがて、別人のように見える自分が鏡にいた。

死ぬまで切らないつもりだった自慢の黒髪……真珠のような首筋の美しさはきわだっていたが、それでも不安げに鏡に見入らずにはいられなかった。

「ご安心なされませ、たいへんにお美しいです……」

安堵のタメ息とともに、ショーンがうなずいた。

――鏡の中の梨花はいつもよりやや神聖な表情をして、なんとなくはじめての舞台にたつ少女のように見えていた。

赤いバラの花を輪にして襟足をすこし飾ってみた。
この日のために用意した緋色のドレスをまとうと、堕天女のような美女がそこにいた。
――これで少しあの人に好かれる私になったのかしら……。
あの人が微笑んでくれたら、きっと星も変わるだろう。
――邪悪なキュロスなどは、そうしたらすぐ首を切ってやるわ！

いよいよ会場が開いて、人々があふれるほど入ってきた。
貴賓席は2階の桟敷のような場所にあり、バルコニーに似て、防弾ガラスに守られている。むきあった向こうの貴賓席にいるミハイルを、涼はみつけて小さくニヤリとした。
――ミハイルの奴、今日は気取っている。
新界総督の礼服を着用して、賢そうに誰かと話している。
横目でチラリと涼を認めたミハイルもまた、心の中だけで舌をだしていた。
――涼の奴、気取っているぞ。
遠く離れたべつの防弾ガラスの窓には、招待されたレーテア新王妃の姿もあった。
近衛に守られて、いま席につくところだ。
まだ、かしずかれることに慣れぬような初々しい王妃である……レースのような妃冠でさえ、時には重たげにみえてしまう。白いドレスの美少女がかたわらにひかえていた。

香港の目にさえ、きわめて美しい少女であり、あれは誰なのだろう？　とささやきかわす声も多かったようだ。

華やかな香港の客たちを、輝く目でめずらしげにみつめている。あちこちから賛美の視線がそそがれていることにも、気づいてはいないようすだった。

蝶々のように競いあう香港仔は……宝石もあれば、花飾りもあった。ただみなうっとりするほど粋に見える……今夜にもラーラに話さねばならないことが山ほどあったのだ。

――ちなみに、その美少女はイグナチウスのリューである。

この日、彼女は騎士団の制装でなく、王妃ととてもよく似た純白のドレスを着ていた。

もとは本島の娘だった新王妃が、娘時代に着たいちばん美しいものを着るようにと、みずからリューに着つけさせていたのだ。

レアル王の言ったとおりに、年も近い少女のリューは数日のうちに王妃カナリアの誰よりのお気に入りとなっていた。近衛としてではなく、親しい友人のように一緒にいたがって、どこへ行くにも離さなかった。

〝ねえリュー、これは私がお嫁入り前にいちばん好きだったドレスなのよ。きれいでしょう、この刺繍？　もし……嫌いでなければ、ぜひ着てみてくれないかしら。きっと似合うはずよ！〟

まばゆい純白で、胸元に精緻な人造石が縫いとられたそのドレスは、清楚でありながらそ

の時ほかの貴賓席にいたどんな娘のものよりも豪奢だった。

——香港においては最高の礼装だ。美しさに独特の気品があるリューにはよく似合う。

着つけを終えたリューを見た時に、カナリアはまず息をのんで、本当にうれしげに手をたたいた。

〝まあリュー、なんてきれいなのかしら！　本当に美しいわ！　そうよ……若くてこんなにきれいなリューなのに、いつも騎士団の制装ばかりでは可哀相ですもの！　今日くらいはドレスを着てもいいはずだわ、規則どおりではあまりにも残酷だわ〟

——まあ、それでは王妃様は、私たちのことをまだ何もご存じではないのだわ！

稲妻にも似た驚きの気持ちを、リューはその時にはじめて味わっていた。

衣装、宝石……それがなんなのだろう？　騎士団の侍者が、そんなものを本当に必要としたことが一度でもあるだろうか⁉

——美しく装って、恋人をつなぎとめねばならない娘たちのことは、気の毒にさえ思えていた。

リューにはそんなものはいらない……リューにはラーラがいる！

彼女はイグナチウスの黒髪も声も大好きだったが、たとえ髪が焼け、声がただれたとしてもラーラは変わりはしない。好きで好きでたまらない、ただ一人のラーラだった。

——本当に必要ないのだもの。ほかの騎士の子たちだって、みんなそうだった！

片目や片腕を失えば、騎士団の力でも再生は不可能だ。戦場から凄まじい傷をうけて容姿が変わる騎士たちも時にはいた。つれそうエリュシオンが一度でもそれを嘆いたものだろうか？

愛によって互いに盲目……どんな恐ろしい傷も恋の障害とはならない姿を見て、外の世界が恐れるのも当然だったのかも知れない。

リューはラーラの魂がもつ何かを愛していた。そしてラーラも間違いなくそうなのだ。いつだっておぼれてしまいそうなくらいに愛してもらえた！　星のように着飾った娘たちの何人が、そんな幸せに酔えるのだろう？

――ラーラの胸に触れあうだけで、リューには飲みつくせないほどの愛情があふれてくるのだ。いつでも……どんな時でも！

〝王妃様には、なぜわかっていただけないのだろう？〟

のぞきこむと深い不審に、ふと恐ろしくなってしまった。兄王レアル様の王妃とあられる方が、騎士団の最初の掟を理解してくださらない。

――いいえ、それはもうすぐお気がつかれるはずなのだわ。

優しい王妃様をリューも心から敬愛していたのだ。

そして少女ははじめてのように、身にまとう絹の美しさに気がついて頬を染めた。

〝この姿をラーラにお目にかけてもいいだろうか？〟

そっと……ラーラにだけならそれも許されるだろう。内緒ならば褒めてくださるかも知れない。

――見せてさしあげたい……だってキラキラとこんなにきれいなのだもの！

微笑んで、目をみはってくださるラーラの表情が浮かぶようだった。

「まあどうしたの、リュー？」

「あの……とても幸せだったのです」

甘いタメ息に気づいた王妃の問いに、少女は耳まで赤らめてどぎまぎと答えた……何も知らない哀れなリュー！　幸福を一心に信じている。

――その目の中には、いまはまだ愛しか存在しないのだ。

「おかしな人ね！」

王妃は軽やかな笑みを見せてから、真下のスタジアムの一点を指さした。

たったいま、行われている二人の剣士の試合だ。リューもすぐその目をみはった。

「なんて見事なのかしら！　名前は誰と誰？」

参加している剣士のリストによれば、一人はセリオス・ルガという名前で、セントラル・ボードの内部からの推薦だった。

いま一人はなぜだかずっと顔を隠している黒衣の使い手で、新界総督府を通じて登録された匿名の剣士だという。背は高く、身ごなしからしてまだ若い青年のようだった。

無名の剣士とセリオス・ルガ。どちらも凄まじい太刀筋だった。
「……あのどちらかをご存じですか、王妃様!?」
目を輝かせたリューがふりかえったが、カナリアは残念そうに首をふった。
「いいえ、どちらも知らないわ」

黒衣の剣士――ナイトハンド――と、セリオス・ルガの試合で、事実上の決定戦になりそうだった。
このトーナメントでは、観戦して技量がかなわないと感じた場合には棄権する権利が残されていた。
――そのために、どうやらこれが事実上の決戦になりそうな気配であった。
スタジアムで向かい合った瞬間に、どちらも並ならぬ敵と悟っていた。
傭兵セリオス・ルガは、自分の実戦の手管を凌ぐ相手にはじめて出会い、ナイトハンドは自分より冷酷かもしれない太刀筋をはじめて見た。
同時に数組の試合が進行している会場だったが、すぐにあらゆる目がこの二人の試合だけを追うようになってしまった。
非常に長くたちあって、まだ勝負がつかなかった。
――力はどうやらこの相手が上だ……。

〝匿名の剣士〟が、瞬間的にそう考えていた。だがスピードと持久力は自分のほうが勝っている……あとは戦意だ！

セリオスは、勝つための機略を老練に探し続けていた。この相手がなぜだか顔を隠そうとしていることが、大きなチャンスだった。

――傭兵型のサングラスには、一方向に狭い死角ができるのだ。

じりじりと間合いをつめつつ、悟られぬように彼は死角へ跳び入る準備をした。

一度、まったくかかわりのない方向へ攻撃すると見せかけて、逆に飛ぶ鳥のように背中から襲いかかった。

「……もらった!!」

その瞬間に、黒衣の剣士の武器が大きく一閃した……セリオス・ルガは、その一撃で敗者となった。

足元に倒れる敵にむかって、黒衣の剣士がただ一言、言った。

「私は暗闇でも戦えるように習ったことがある……だからこの死角も恐れずにいられるのさ」

――ナイトハンドの勝ちだ！

その瞬間、大きく沸いたスタジアムの観衆の中でも、ひときわ歓声をあげたのがもちろん

貴賓席の涼であった。

力いっぱいにその手を握りしめていたのは、黒髪の少年のほかにも一人いた。

アリーナ席から緋色のドレスの目覚ましい美女が一人、胡蝶のようなかろやかさで駆け下りていくのが見えた。うれしさをこらえきれなくなった梨花夫人だ。

夢中で駆けよってしまうと、何を言うこともできなくなってしまった。

本当に素晴らしかった！　お前が無事でどんなにうれしいか！

……ふりかえった相手の口元も、心なしか薄い笑みを浮かべているような気がした。

――梨花か！

手ごわかった敵を倒し勝ち誇った笑顔のままで、ナイトハンドはゆっくりと威梨花をふりむいた。

あざやかな緋色のドレスをせいいっぱいに装って、短くなったうなじに赤いバラを飾っている。視線に、梨花の頬がみるみる紅潮した。

――この人が、いままでにこんなに私をみつめてくれたことはなかったわ！

無意識に微笑んで、髪に触れる。幸福に酔っている梨花は、相手が卑劣な喜びで笑っていることにも気づかず、緋色の袖をしとやかにさしのべて口をひらこうとした。

「あなた……どうか勝利の最初の祝いを、私に言わせてくださいましね」

黒衣の相手は、その袖をはらうような動作をして残酷に笑った。

「梨花。私が、女が赤い服を着ているのだけは嫌いだと知っていたか？」
「え？」
突然、冷水をあびせられたような気持ちで立ちすくむ梨花を見て、残忍な笑顔がさらに深くなった。わざとらしく驚いたような声音で、〝このうすみっともない頭はどうしたのだ？〟と、黒髪を指さして聞いた。
「かかしのようだぞ。お前はそうは思わないのか？」
「だって……そんな、これはお前が……」
昆虫の羽根をむしる少年のような手つきで、うなじのバラを引き抜いて、ゲラゲラ笑う。
「お前は髪だけは美しい女だと思ってやっていたが、それももうおしまいだな、梨花！」
――だってッ、そんな……お前が好むと言ったから……！
どうしたことか、ふるえる梨花を青年が急に抱くようにして、耳元でささやいたのだ。
「バラか……梨花、バラの香りがするな？」
「え……ええ、そう……これもお嫌い」
ふるえながら答える梨花にむかって、香水を変えてみたらどうか？　と真顔で訊ねた。
不安に見開かれている瞳に、憎悪と軽蔑に満ちた微笑がつきささる。
「威梨花。そうやって見た目を変えれば、私が貴様の経歴を忘れるとでも思ったのか？」
暗黒街の魔女。生まれた時からの女妖狐だ……お前を養った葉家はどうなった!?　白く

塗った顔にたぶらかされた男たちはどうなった!?

こんどはどうやら私を手にかけてみたくなったか……バカめ！

――この私が、同じだと思ったら大間違いだ、ハハハ！

「主家を潰して飾りたてた女……フム梨花、やはり香水を変えたほうがいいのじゃないか？もっとどぎつい香りはどうだ？　この程度の香りでは、貴様の腐臭は消せんぞ……」

多少声のとどく範囲の席にいた客たちが、アッとざわめいたほどの侮辱だった。

悪魔！　ひと声悲鳴のように叫んだ梨花が、力まかせに頬を打とうとしたのを軽くかわして、また笑った。

美しい瞳に、怒りと悲しみの涙があふれるのを見て、非常に満足だった。

――私は、貴様がこれまでたぶらかしてきた男とは違うのだ！

これでわかったか、走り去っていくうしろ姿が二度とこないことには自信があった。

自分はどうやら悪女から助かった！　彼はその時、誇らしげな顔さえしていたようだ。

……〝黄金の針〟から外の街路にまで出て、物陰に駆けこんだ梨花は、緋色の手袋でうなじのバラをむしり取ると、指先で残らず花弁をひきちぎった。

――あの悪魔ッ！　はじめから、みんなたくらんでいたんだ！

怒りのあまり、涙も流れなかった。

アルディーンに嘘を教えて待っていた。愚かな女がそのとおりにすると思っていたのだ。

ここに招いたのも、そのためだった！　自分はだまされて赤を着て、生命よりも大切だった髪を切って、公衆の面前で侮辱されるために来たのだ！

怒りで胸が焼けるような気持ちがした。

「悪魔ッ、あの悪魔ッ……」

「……奥様」

忠実な部下のショーンが、つらそうに背後から声をかけた。

「あの……悪党！　まるで獣のような卑劣な奴ッ、こんな仕打ちがひとにできるなんて！」

くちびるをかむ梨花の足元に、最後の花びらが落ちていく……部下の影が静かに言った。

「お泣きあそばすな。奥様の手足は、あれほどの侮辱に報いない組織ではございません。どうかご命令を……あれに死を。かならず報いてごらんにいれます！」

とても長く……美しい緋色の影は黙って部下に背をむけていたが、やがて梨花は顔をおおって静かに泣きはじめた。

「駄目だわ、ショーン。それでも私はあの人が好きだよ……」

こんどこそ……もうどうしていいかわからない。だって結局、あの人は……ほんの少しも私など見てくれる気はなかったのだ。彼は梨花の悪いことは本当によくわかっていて……それ以外のことは少しだって知ってくれる気はない！

「ねえどうしたらいい？　あの人でなしの悪魔が……どうしたらあいつに好かれるの⁉」

緋色の手袋に、真珠のような涙が染みていった……。

卑劣な笑みを浮かべて威梨花を見送ったナイトハンドは、勝者として上のバルコニーの一つに案内された。

浄めの儀式のために、準備がされていた〝黄金の針〟の広間である。

準勝者の男も、ともに招かれた……金髪で、頬に刀傷のある傭兵だ。

部屋の中央には、複雑な呪文様で描きあげられた結界に封じられたクリスタルの呪刀があるのだ。

——剣の主の儀式がはじまるはずであった。

レン・巧猿をはじめとして、五星家と当局の面々がそこに待っていた。アリエナ・ライルと韻長官だけがいない。

「ではこれから、選ばれた勝者に剣を渡す。セリオス・ルガ、貴公も見事だった……」

数人の術士が、中央の結界をかこんだ。

——やっぱりナイトハンドが仇魔刀を取ることになったな……。

予想したとおりだと思いながら、涼がふと準勝者を見ると、急にひどく不安な気持ちに襲われた。まるであらぬかたを見ているのだ。

——どうしたんだろう、あの人は!?

願望でどんよりとしている表情は、涼の目には〝何かにとり憑かれている〟ように映ったのだが、実際には彼は仇魔刀を見続けていた。

ナイトハンドに敗れて、彼は準勝者となったのだが、魔刀はどうしても必要なのだ。

――黒の術士との契約があるのだった。

視線があちこちに動くが、どの瞬間にも仇魔刀にもどる。最後にさまよった情景の一か所に、美しい韻家の相続人がいた。

韻麗王はその時、妖しい笑みをうかべていた。

つまり……準勝者のセリオスが突然上に駆け上がって、韻家の麗王を捕らえて喉元にその剣をあてた時である。

瞬間、誰かが悲鳴をあげ、ナイトハンドをはじめ多くの者が飛びだそうとしたが、素早さに数秒出遅れた。位置的にはどこよりも側にいた付き人の夏虎は、微動だにしなかった。

……麗王の微笑に気づいた者は誰もいなかったようだ。

「おい、何のまねだ!?」

「レン・巧猿、術士どもに儀式をやめさせろ……それから、もう一度俺を剣の主に指名して、それを俺によこすんだ！」

バカなまねはやめたまえッ……言おうとした瞬間、セリオスは笑いながら韻麗王の喉をつき刺そうとするような素振りを見せた。

レン・巧猿の顔の色が変わってきた……。
「仇魔刀を……どうする気だ？」
察しがいいなと言いつつ、セリオスはゲラゲラと笑った。
「それを欲しがっているのは、こちら側だけじゃあるまい!?　持っていけば、取引ができる約束になっているのさ！　そう、素晴らしい約束をしてくれた……」
剣をつきつけたままの麗王をチラリと見て、傭兵は狂ったように笑った。
韻麗王はまったく身動きもしない……。
――いけない、麗王殿は病弱なお身体のはずだ！
レン・巧猿がゾッと青ざめて、低い声でキュロスに指示した。
「キュロス、言われたとおりに彼に……」
――チックショウ！　この手があったか!?
まるで眠ってでもいるように目を閉じた麗王を捕らえたまま、行きすぎようとしたセリオスに、無表情に巧猿が訊ねる。
「まだ人間でありながら、黒魔に魂を売るというのか？」
「ああ、よろこんで」
キュロスの目にも、この傭兵がまだ確かに人間であるとわかっていた。形どおりに儀式をすれば、妖刀はこの男が主となってしまうだろう。

「ごまかすつもりなら、やめたほうがいいぞ。こちらには、教えてくれるお人だっている」

セリオス・ルガは奇怪な自信をもってうなずいた。

やがて呪術士らの手続きにしたがって、仇魔刀が内側から明滅をはじめた。

……恐ろしい笑顔で魔刀に手をのばすセリオスは、その瞬間だけわずかに油断をした。試合場で自分に勝った男に、ふりかえって合図を送り、

「貴様はなかなか強かったな……ククク、貴様とはまた会おうなァ！」

一瞬の油断。その時、セリオスの剣は麗王の喉からやや離れ、視線は完全にナイトハンドと向き合っていた。

そのチャンスを捕らえたのは、妖魔の目をもつアルディーンだけだった。

「その人を放せッ……それは渡さないぞ！」

風のように飛びこんで、セリオスと麗王の手を引き離すと、解けかかっている結界の中央で明滅する妖刀に手をかけて、引き抜いた。

広間が真っ白になるほどの光がはじけた。

「アッ……貴様!!」

強烈な閃光が……誰よりも、涼自身の視界を焼き尽くすように感じられた。

――目がッ!?

閃光の最中で、いちばんに素早く動いたのは麗王だったのだろう。〝夏虎！〟、その一声だ

けで付き人は麗王の間近に駆け寄り、彼らと……セリオス・ルガを加えた周囲に、火のような黒い線が輪を描いたかと思うと、幻覚のようにそこから消えうせていた。

――多少でも物が見えていた人々の目には、魔術士が人質ごとセリオスを呼び去ったように映っていた。

しかしながら、これほどまでに近くで邪悪な妖気の塊が正体を現したのだから、爆発的な妖刀の活性化は、どうすることもできない。

室内のいたる所で、燐光がスパークする！

「……いかんぞ、抑えきれない！」

ののしるキュロスの目の前で、涼の瞳がすでに深紅に光っている。黒髪が生き物のように波打って動く。妖刀が、手のなかでほとんどコントロールをなくしてしまいそうだった。

――一緒に……落ちるッ!?

「涼!!」

必死で妖刀を放そうとしているのがチラリと見えたが、ひきずりこむような勢いはすでにとまらなかった。

巧猿の目には、少年が部屋の中央で妖刀を捕らえ、立ちあがろうとしたとたんに姿が薄れてなくなってしまったのが見えただけだ。

「キュロス、どうしたんだ!?　涼は……魔船の術士の気配を追っていったのか!?」

「いや、いかん！　引きずりこまれたのに近いようじゃ」
降魔のクリスタルとともに、妖魔の少年はかきけすように消えてしまった。
それっきりではない……片隅のモニターが映した映像に、全員が悲鳴を上げた。
階下のスタジアムの座席にいつのまにか残されていた麗王の六絃琴から、妖しい旋律が弾く手もなく流れはじめていた。
〝高度な弾き手によれば、指さすだけでも六絃琴は鳴るのだ〟
会場にまだ残っていた人々の視線が、みるみる狂いはじめていく。
――殺戮を呼びおこす、麗王の魔の旋律だ。
「頭がッ……痛いッ」
操り人形のように立ちあがった一人の男が、警備員から銃をうばい、隣の友人にむけたのが画面に映る……。
「しまった！　どうするんだ!?」
貴賓席の客たちを、まず緊急に外へ逃れさせた。
キュロスが口早にほかの術士たちに、外側から結界で抑え込むように指示した。
ナイトハンドの所持品に神経ガスがあり、巧猿はやむなくそれを魔力に封鎖されたスタジアムに投げこんだ。

一方、地面に激突したような痛みとともに、涼の落下は終わっていた。
――引きずりこまれた、ここはどこだろうか。
〝ウッ、痛い！　ここは……？〟、懸命に目をあけて、あたりを見回す様子を、離れた結界のそばにかすみのように移動している麗王がみつけて異様な笑みを浮かべた。
とっさに、この場所まできたのには理由がある。
この場所はかつては地下墓地だった……そう、イリヤが最初に仇魔刀を封印していた隠れ家である。魔女の結界は、ここにまだ残っていた。
――セリオスが勝者となっていたら、仇魔刀はその手でここに運ばれるはずだった。
涼は麗王のほぼ正面にいて、必死に敵の居場所を捜している。
「なんだお前……見えないのか？」
白い頬に、最高の微笑みが浮かんだ。その声のする方向に涼は顔をむけたが、朦朧とかすんだ視線はほとんど何も捕らえることができなかった。
さっき妖刀の閃光にあってから、ずっと眩んだままなのだ……。
「そうか、仇魔刀の影響だな？」
麗王にはもうわかっていた。
〝やはりレン・巧猿の陰には魔性がいたか！　しかも、それは……〟
――あの紅玉をかけている以上、アルディーンは魔刀の主になりえた……しかし妖刀の

要求は想像以上に大きく、内部の妖力をいくらでも引き出そうとする。
魔道に経験の浅い力で、コントロールしようとする絶望的な抵抗が、視界という部分に影響を与えていた。こうなると仇魔刀を手放して、自由に動かしてやったほうがいいはずだった……この妖刀は、魔に自分から襲いかかる力さえあるという。
小首をかしげた麗王は、真相に気づくと思うさま笑った。
「なんだそうか、どうやら剣が放させてくれないのだな！　ククク、ククク、可哀相に！　なまじ妖力が強いばかりにね⁉」
涼の耳には、誰かが嫌な声で笑うのが——四方に反響して——届いていた。
「誰だッ⁉　どこに……いる⁉」
「力も破邪の剣も、使えないのではしようがない」
そう言いながら、麗王は軽く手をあげてうしろの夏虎に命令した。
「アハハ、お前たち、好きなようにしろ」
二匹の人鬼がかわるがわる、爪と牙で飛びかかってくるのだ。
鮮血が舞い散る。
麗王は大きく両腕を広げて、複雑な呪歌を歌いはじめた。
「そいつを結界まで追い込んでいけ！」
うれしげに涼をすこしずつ導いていく。よろけながら攻撃をかわそうとする涼の足が、つ

いにある文様の輪の端に踏み込んでしまった。
瞬間、異様なまでの衝撃が全身に伝わった。
――奇しくも仇魔刀は、32年も眠り続けたその同じ法陣にもどってきた。
イリヤの絶対結界は、もともと破られているわけではなかったのだ。
――アルディーンの妖気の呼びかけに、仇魔刀が覚まされて抜け出しただけのことだ……
そして、いま妖刀は再び法陣の中央にもどってきていた。
麗王はその上からさらに、黒のクリスタルの全力で第二の結界を張ろうとしている。だが、二乗の結界というものは絶対に成り立たないはずだった。
術を使う少年は、笑いながら涼に叫んでいた。
「それが狙いだよ！　二つの結界を同時に張ろうと無理をすれば、術が干渉しあう力はあたりを砕いてしまうほどだ」
それを動かす力が大きければ大きいだけ、ぶつかりあう嵐は猛威をふるう。
麗王とイリヤの力がぶつかれば、仇魔刀といえども無事ではいられないだろう。
「貴様も、そのまま封印してやろうな！」
何かはわからない強烈なショックに、涼は飛びはなれようとした。〝逃がすかッ！〟、麗王が素早く前に立ちふさがる。
無我夢中で、一太刀切りつけた。麗王が肩を押さえて後方にのけぞる。絶叫が――同時

に――反響する。

「……ギャアアッッ」

よどんだ黒の血を頭から浴びてしまった涼も、耐えきれずに数歩あとずさった。こんどこそ結界の中央に踏み込んだ。

――いまだ！

カッと開いたままの目で、麗王が獣のような怒声をあげた。

「ここへこい、セリオス!!」

待ちかねていたセリオスの心臓を、邪悪なクリスタルでいっきにえぐりぬいた！

――漆黒のクリスタルが3人めの人鬼を採生した。

地下墓地の土の底から、地鳴りのような重い響きが聞こえてくる。新しい力を得た暗黒のクリスタルは、炎のような燐光を発していた。

燐光は、妖しい術士の声にも反響しているように思えた。

「死ぬがいい……黒髪の妖魔。これで私の邪魔をするものはすべて消える。このクリスタルが見えるかい？　いまはまだ五星家の石の力が強いが、黒のクリスタルの完成もそう遠くはない。そのあかつきには……すべてが変わる！」

〝変わる!?〟、涼を捕らえたままの法陣が、激しい光を放つ。

「その時にはこの私の正体を教えてやってもいい。レン・巧猿め……元宵節の夜にまた会

おう！　ハハハ、もし生きていたらだが！」

鈍い地響きが高まるなかから、麗王と使い魔らの姿は巧みに消えさっていく。

どこかに悲鳴のようなかすかな声がまざるのを、耳ざとく聞いて麗王が薄く笑った。

――遠く響いてくる地鳴りのような音は何事か、キュロスにも判断はできなかったが、

「いかん……どうやら最悪の事態じゃ」

ナイトハンドの神経ガスも、そろそろ効力がなくなる時間だった。

麻痺した身体が動きだせば、スタジアム全体の観客たちが、ふたたび操られて殺しあうだろう。

香港仔たちは会場に多くの自分の六絃琴を持ち込んでいたようだが、そのすべてが妖しく鳴りはじめていた。貴賓席のキュロスと数名の術士たちも結界を送っていたが、

――次に影響をうけるのは、ここ……貴賓席だ。

「そして、この旋律が〝針〟から広まれば……」

結界の軋轢のなかで、涼は〝最悪の事態〟を共感していた。

たつまきの中央にいるような、恐ろしい振動と圧力。本能的に彼は仇魔刀をかばう姿勢でうずくまったのだが、それすらももう無駄かも知れない。

すぐに身体がしびれて、麻痺してきた。
以前、キュロスの縛妖陣にうっかり踏み込んだことがあったが、あの時の感じを数千倍にしたような苦しさだ。
いま、剣を抱いたこの妖魔の子を見るものがあれば、凄まじい術の光をまともに受けて、小柄な骨格がほとんど透けているのがわかるだろう。
意識がバラバラになるようで、考えることもできなかった。
――もう駄目かッ……もうこのまま駄目になってしまうんだ……！
もう最後だと思われた瞬間に、涼は懸命に瞳をひらいた。〝死ぬがいい、黒髪の妖魔〟
「いいや……生きるとも！」
澄んだ深紅の目が、必死のまなざしで結界の出口を求める。二つの術がからまりあった嵐の中に、道は見えないのだ。
ただ一つ、はるかな、はるかなむこうに法陣の線が見えた……それは果てしもなく遠いように思われたが、涼は妖刀で身体を支えるようにして、よろめきだした。
――あと……一歩、それからあと一歩。
力つきて倒れてしまった位置から、この手が……届くだろうか？　指先がなにかに触れたがそれっきりで、無情な線を越すことはできなかった。
――生きたい……。

気が遠くなりかけた涼の上で、ふと異質な気配がした。
鳥のはばたきのような柔らかい音とともに、暖かな羽根の聖域が一瞬だけ涼を衝撃から解放した。
ささやかな羽根など、まばたき一つの間でバラバラになってしまっていたが、薄れかけていく意識のなかに、薔薇色の光がくっきりと残った。
——涼はその時、スタジアムに残してきた自分の六絃琴のことを思い出していた……。
最初に鳴りだしたのは、貴賓席に残されたあの子の楽器だった。
子供の遊びのような、たどたどしい音色がしだいにはっきりと一つの形になる。
カッと目を見開いた巧猿が、思わず六絃琴に飛びかかった。
「キュロス……あの子の曲だ！」
柔らかな甘い音色が息をのむ彼らの目の前で流れていく。
キュロスは魔斑の顔をゆがめて、必死に源をさぐった。
「坊やのSOSだ。どこじゃ……どこからか？」
それは間違いなくSOSだったが、同時に……流れていた死の旋律をねじふせるようにかき消していくのだ。
かなわぬ残忍な魔力を相手に、必死の抵抗を続けていた術士たちのしびれた指が、ようやく解放されておりていく。

キュロスがすっくと立った。たどたどしいこの曲が鳴り続けている間だけがチャンスだった。

「おい、どこへ行く……」

「ついてこい、妖魔の坊やをみつけてやらなければ！」

使われなくなった地下墓地の扉のむこうで、音色は鳴っていた。

――おお、鍵以外の術で封印されている！

キュロスが、てばやくそれを解錠すると、中央の法陣の端に少年が倒れていた。

のばした右手の指先が、わずかにその線をはみだしている……目を閉じて、顔はすでに蒼白だった。

「行ってはいかん、巧猿！」

駆け寄ろうとした巧猿を、キュロスが怪鳥のような声音でとどまらせた。

「待つのじゃ！　この結界に働いておる力はもうふつうではない、おそらく一歩入ればズタズタになってしまうだろう」

――こいつに入れるのは、もはやレーテアの者だけだ。彼らなら香港の術を緩和してしまう性質をもっている。

「急げ巧猿、誰かあの騎士団の人間を呼んでくるのだ！」

「いや、それではもう遅い！」

六絃琴の音色はその瞬間にもますます力を失っていきつつある。ナイトハンドがスッと滑るように前にでた。

彼がつかつかと結界に近づくのを見て、キュロスは顔色を変えた。〝なんだと!?〟

異様な光景を見慣れた術士の彼でさえ、思わずグッと喉をならした。

ナイトハンドと呼ばれるこの青年が、きしむ結界に一歩足を踏みいれたと思うと、金色の光芒が全身から輝いたのだ。

——それは強力な輝きだった。

倒れている妖魔の少年をかかえあげると、その頬にみるみる血色がもどっていくのがわかった。

——この男は……この男は……?

結界の外に立つ巧猿にアルディーンを投げ渡すと、あの妖刀を拾いあげて呪術士をふりかえった。

「仇魔刀で、この結界をこんどこそ断ち切ることができるか?」

「おお、できるとも……やってくれ!」

並ぶものはない降魔の刃だ。黒衣の青年はニッと笑うと、結界の内側で目を閉じ……四方に渦まく魔性の気配を一息に切りさばいた。

洞窟のあちこちでは浄化の火がいっきに輝かしく燃えあがっていた。

どこからか、凄まじい絶叫が聞こえた。
〝クソ……覚えておれ!!〟
――逃がしたか……。
だがあとの法陣におびただしい血の流れがあった。

傭兵セリオス・ルガの推薦者は、もうすでに自殺していた。
「韻家の麗王殿は、中途で付き人の夏虎に助けられて無事だったそうだよ」
それはよい知らせだったろうが、巧猿はただ上の空でそう言っただけだった。
真夜中近く、彼自身の新界の屋敷である。
地下墓地の結界から助けられた涼は、すぐにここに運ばれ……手当てを受けた。
「キュロス、君は生命には絶対別状はないと言ったじゃないか！」
その前で、いまだに意識を失っている涼が苦しげな息で目を閉じていた。
苦痛は、巧猿の目には刻々と激しくなるばかりのように見えるのだ。
「これは……生命にかかわる苦痛ではない。この子はどこにも大きな傷はうけなかったし、多少の爪跡はもう治ってしまった」
意識をとりもどすだけの回復力も、彼の妖力ならば充分蓄えられているはずだったのだ。

「それなら、なぜこんなにいつまでも長く苦しんでいるんだ!?」
「これ以上の〝力〟を使うと、人ではいられなくなるとわかるのじゃろう……」
——巧猿は、それを聞いて顔じゅうをしかめた。
「前に……君が言っていたことか？」
〝そうだ、やはりきてしまった〟。術士の老人は悲しげに、うつむいて言った。
その時、うなされていた少年が一時目をあけて彼らを見あげた。
「アルディーン、何も心配することはない……絶対に何も起きないからな」
ナイトハンドがまっさきに、その肩に手をかけてつぶやいた。
「そう。たとえどんな姿になっても、かならずキュロスがもどすというよ！」
それは巧猿の嘘だったが、老呪術士もかたわらで何度もうなずいた。
「君のおかげで大勢の生命が無事だったんだよ。よくがんばったね……だからもう安心してお休み。何があっても……僕たちは友人だから、おやすみ、安心して」
その言葉を聞いたのかどうか……妖魔の子供は、ゆっくりと目を閉じて全身の緊張を解いたようだった。
——それが解けてしまうと、いきなり始まった。
まず黒髪が生命をもつように波打って、伸びはじめた！
「キュロス！　どうなるんだ!?」

術士は険しい顔で、手をだすなと警告した。
「この子は力を使いすぎているのじゃ、どうなるかはわしにも見当がつかんわい!!」
――獣化か……あるいは急激な成長ということもありうる。
「たしかなのは、彼が最大の力を使い……一線を超した時にかかわっていた呪力の影響をモロにうけてしまうだろう」
「ど……どの力だ?」
キュロスはおそろしい目をして首をふった。シャツの布地がさける異様な音が続く。
――彼は、あの結界の中で敵の術士の血をまともに浴びてしまっているのだ……。
クリスタルよ! やがて壁を透かせるほどの赤い光線が、あふれだした。

午前2時。
ロウソクの薄あかりで目を覚ました少年は、すぐそばにいる三人の人間の気配を感じて青白い頬にすこし笑みを浮かべた。
――天蓋の白い布が下ろされたベッドで、寝かされていた。
そばにいる三人も、いまは疲れて眠っているようなのだ。
見るまえから、なんとなくわかっていた……みんな、ずっとついていてくれたらしい。
とてもうれしかったので起きようとすると、すぐに功猿が声をかけた。

「涼……起きられるのかい？」
できると思う……もう、どこも苦しいところはなかったのだ。
「功猿」
「何かな、涼？」
「僕はゆうべキュロスの言ったことを少し聞いているよ……功猿が言ってくれたことも覚えている」
白い布のむこうで、功猿はすこし目を閉じているらしかった。ここを開けてもいいか、と聞くと、もちろんだと言って自分からカーテンを引いた。
――たくさんの力を使ったことは、まだ夢をみているような気持ちが続くことでもわかっていた。力を使いすぎてしまったので、何かが起きたらしい。
「僕は……どんなふう？」
「ああ！　いつもの涼だ！」
顔を見たときの功猿が、明るい大きな笑顔になったのですっかり安心した。レン・功猿もその瞬間、天に感謝を捧げていたが、まだちょっと早かった。
起きようとすると、髪がなんだか重いのだ……手で触れてみると、床に届くほど伸びてしまっていた。
――アレアレ、でもこれは切ればいいよね？

半分身体を起こした時、なぜかシャツが前に落ちてしまったのでひどく当惑した。
レン・功猿の笑顔がいささか……異様なニヤニヤ笑いに変わりつつあるのはなぜだろうか？
シャツが落ちたのは、背中から二つに裂けてしまっていたからだ。真正面に姿見があるが……。
そこに映された自分を見て、涼は生まれてはじめてヒステリーの激高をした。
「キュロスのバカ!!　功猿のバカッ！　なにが友達だい……どこがもどしてくれたっていうんだ!?」
手近にあったロウソクを、火がついたままだと知りながら投げつけた。
可哀相だとわかっていても、キュロスは功猿と肩を組んで笑い転げずにはいられなかった。
妖魔の少年の肩から背にかけて……いまや見るも愛らしい羽根がはえているのだ。
——髪と同じ漆黒の色の、透きとおった見事な翼が生えている。
かなり目立つが、非常に美しかった。
「アッハッハ！　どうしようもなく羽根だね、こりゃあ……涼、とにかくもの凄くゴージャスだよ！」
笑いながら手で触れようとすると、それはある程度幻影の性質があるらしい……指先はつ

きぬけてしまう。それがおかしいといって、功猿はまたゲラゲラ笑った。
〝死んじゃえ、功猿なんか!!〟
見回すとナイトハンドの姿がなかったが、これも涼にはだいたいわかっている。離れた場所にいって、思いっきり笑うつもりなのだ！　みんな大嫌いだ!!
涼はとりあえず大声で泣いてもみた。これまでの経験から、涼のなかの魔性は涙が苦手であると知っていたからだ。瞳の妖気が抑え切れなくなりそうな時に、涙はよく効いた。
――だがこの背中の羽根はしつこくて、泣いてもパサパサとはばたくだけのようだ。
「どうするんだよ、こんなの!?　このまま僕にどうしろって言うんだよ!?」
「まず巣を作れば……」
怒り狂った涼が、爪をだして飛びかかった。キュロスが笑いで息をつまらせながらも、あわててとめようとする。
「安心せい、坊や！　それはもどせるからッ」
「本当に!?」
術士はウンウンとうなずいてみせた。急にそこで膝から力が抜けてしまったらしい。
ヘタヘタと座りかかる涼を、二人は両脇から支えて寝台にもどしてやった。
「キュロス、本当ですね……嘘は困るよ……」
何度も繰り返すのを、上手になだめて目を閉じさせた。

ドアの外にでて、功猿が術士に〝本気でもどせるのか？〟と訊ねた。
「ああ……本当じゃよ。あれはどうやら、どこぞの術士がかけた護法の影響がでているらしい。どこでかけられおったのかな？　ともかく術をかけた者がわからないともどせないが、いずれ新界の誰かには違いない」
かたっぱしからたずねても、さほど時間はかからないだろうとキュロスは保証した。
「やれやれ、ホッとしたよ」
功猿はそう言って汗をぬぐうと、ドアをそっと開けてすきまから涼の様子をのぞいた。くたびれたような姿勢でうつぶせに眠っている。羽根は……幻影のはずなのだが、ときどき飛ぶ夢でもみているように、パサパサと動くのはなぜなのだろう？
「……護法の術士が見つかっても、よく似合うからしばらくあのままにしておかないか？」
功猿は悪魔のような相談を術士にもちかけている。
〝新界では羽根がはえたくらいの代物は、けっこう街を歩いているじゃないか〟
――ゆっくりお休みと、功猿はあらためて言った。

「そうですか！　涼はもう大丈夫ですか……よかった！」
……ミハイル・几城は新界総督府でその知らせを聞いてよろこんでいた。
――羽根だって？

一人の執務室で、少年はアハハと笑った。
涼の奴、気取っていた天罰だろう。ククク、羽根ッ……よし、かならず見にいって大笑いしてやろう！
……その同じ夜のことであった。
この窓から見える〝黄金の針〟では、お祭り騒ぎがいまも続いている。
〝魔船の悪魔がついにやられたぞ！〟、間違ってそんなデマまで流れていたが、それほどではなくとも一つの勝利ではあるのだ。
邪悪の術士の隠れ場所を一つ暴いて浄火にかけた……魔術士には疑いなく深手を負わせた。
——よかった！
ミハイルが笑いながら、手を叩いたときである。
けたたましく呼びだしが鳴り、即座に彼はインターホンにでた。
「どうしたんだ!?」
「港で怪物がッ……」
新界の港に怪物が現れていた。異様な力をもち、重火器による攻撃はまったく用をなさなかった。
〝倒しても倒しても、起きあがってくるのですッ！〟

悲鳴のような報告にミハイルはくちびるをかんだ。
――魔術士の残党だなッ……。
たったいまの連絡で、功猿を通じてキュロスから警告があったばかりだったのだ。
隠れ家は焼き払ったが、術士自身はまだどこかに潜んでいるかも知れないはずだった。おびただしい血を流させたようだが、とどめはさせていない。
不意打ちにはまだ充分注意が必要だった。特に新界。
〝とかく魔力を糧とする者には、新界が最高の場所ですから、魔船の術士が新界のどこかに潜んで傷を癒やそうとしている見込みは高いはずです〟
セリオスというあの傭兵をふくめた人鬼たちも、まだ数体残っている。
報告を聞きおえたミハイルは、翡翠色の瞳を決意に染めて命じた。
「よし、すぐに本島とも連絡して功猿殿に仇魔刀を要請しろ。応援も頼め！　意地にかかわっている場合ではない、怪物はどうしても倒さねばならないのだ!!」
〝すぐに私も行く！〟と言って連絡を切ったあとで、ミハイルは低い声でつぶやいてこぶしを握りしめた。
「父上の仇だ……見ていてください」
ミハイルは知らないのだ。
その報告で怪物と呼ばれているものは、かつての新界総督であることを。

――麗王に生命を奪われ、人鬼という種類の魔獣に変えられた几城総督には、すでに生前の精神はあとかたもない。姿もまた、異形に変わりはてている。

仇魔刀の力によって結界が壊され、麗王が深手を負った時、几城だけがはぐれて、さ迷いだしていたのだ。

すでに飢えた獣と同じになっている妖魔は、渇きを満たす血を求めて市街に現れた。

新総督ミハイルは、勇敢な瞳を光らせて現場へと向かう。

父と子の再会には、呪いがかけられている。

――仇魔刀の到着が遅れて、新界の手勢は苦戦を強いられていた。

涼がまだ起き上がれるような状態ではなかったので、功猿らははじめから例の儀式をやりなおさねばならなかったのだ。

人鬼に直面した者たちは、勇敢に応援したが武器がほとんど効かない。

怪物はすでに3メートル近い巨体に変形しており、力は鉄柵をねじまげるほど強かった。

遠巻きで、一斉射撃をするしか手がないのだが、怪物は異様な笑みをうかべて一歩一歩こちらに進んでくる。

みずから陣頭に立つ少年の声が叫ぶ。

「ひるむな！　市街に上陸させることだけはならないぞッ！」

……セイラ・テンプルでは、眠っていた騎士エディランドがわけのわからぬ胸騒ぎに襲われて、声をあげて飛び起きていた。

「どうしたんだ、エディラ!?」

双子の相棒が驚いてたずねるが、説明ができなかった。

「わからない……だがエリック、俺は抜け出して新界へ行ってくる！」

とめるな！　呼吸をかきみだされてしまうような不安が刻々と高まるのだ。

新界へ！　魔的なほどの引力が新界から彼を呼ぶのである。

――港に近づくにつれて、めちゃめちゃな惨状が見えてきた。

新界総督府の果敢な抵抗は、怪物をこの時まで港に抑えていた。

だがいま、最後の包囲が破られ、装甲車が横倒しになって炎上した。死人か負傷者かわからない者たちが累々とかさなった上を、怪物は歩きはじめる。

ケガ人の山の片隅で、赤毛の少年が起き上がった。

肩に、火炎放射器をかまえていた。

「化け物！　まだだぞ……こちらを見ろ!!」

ふりむいた怪物の目に宿る殺意を見て、エディランドは心臓が凍りついた。夢中のまま、船を乗り捨てて無謀な少年のもとに駆け寄った。

重すぎる重火器の的は、数メートルもそれた倉庫の外壁にあたる。反動でよろけたミハイ

ルをめがけて、怪物の腕がのびた。
エディランドは、ギリギリのところで横からかっさらった。
何者かを知ったミハイルの瞳に光が射した。
「レーテア騎士団ッ！」
「なんて無茶だ！　この赤毛はッ、あいつがたった一人の手におえると思うのか⁉」
あれが人鬼だと、エディランドは全身で理解していた。
――手におえてもおえなくても、あいつは倒すのだ！
復讐にゆらめく炎が、緑の目の奥に光っていた。
「きっと父上の仇だ……」
「……ミハイル」
赤毛の視線を追って、逃げさせることは無理だと思った。長老の通告が頭の冷静な部分で繰り返す。
――闘気は有効だが、致命傷にはならない。完全にとどめをさせるのは仇魔刀という呪具のみ。
「とにかく、仇魔刀がくるまで港でもたせなければ……」
ミハイルもうなずいた。額にいつのまにか血がにじんでいるのが、やたら気になる。
人鬼は血の温かそうなこの少年を、港の最後の獲物と決めたらしい。執拗に彼をめがけて

襲ってくる。

ミハイルが非常に身軽だと気づいたエディランドは、赤毛に徹底的にかわせと命令した。

「俺の闘気は、遠い場所から投げつけられるほどは強くないんだ。だが赤毛が奴の前にいてくれれば、死角から攻撃し続けてやる！」

人鬼にとって、はじめて不快な攻撃がされはじめた。

赤毛の少年と騎士団が前後に動きながら、彼をぴったりと押さえつけている。

――よし、いいぞ……これなら仇魔刀がくるまでいけるだろう。

エディランドが胸でそう思いかけた時に、人鬼がニヤリと笑って方向を変え、市街ではなくて海に飛びこもうという気配を見せた。

「待て！　逃がすものか！」

思わずミハイルが我を忘れて追いすがった。それを待っていたかのように怪物はふりかえると、赤毛の首筋に深く突きをいれた。

ミハイルがその足元にくずれ落ちた。怪物は屈みこんで獲物を片手に持つと、まだ動いている心臓をえぐりだすつもりで爪をかまえた。

エディランドは、とっさに足元に投げだされていた誰かのサーベルを手にとって引き抜いた。怪物は首が胴体から離れても動くと長老は言ったが、あの牙がミハイルを食い裂こうとしている瞬間だけは防げるだろう。

「ミハイル……しっかりしろ！　いま行くぞッ！」

その声で緑色の目が開いた。

はじめて人鬼はこの少年とむかいあって顔を見ていた……赤毛だ、緑の瞳だ。魔物と化した口のどこかがひきつけるように動いて、長くうなった。

あとずさろうとする少年をとどめたいかのように、手がゆっくり動く。

――エディランドはすでにそのうしろから、長いサーベルを大きくふりかざして首をはねようと動いていた。

彼らの間に流れていた同じ血のつながりが、ミハイルに何か伝えようとしていたのはあきらかだった……エディランドはふりかぶった動作の頂点で、おびえたような少年の声を聞いた。

「やめてッツ……エディランド!!」

――何をバカな!?

そのまま……手も刃もとめることはできなかった。

銀色の閃光のように刀身は怪物の首筋に切りこんだ。

――おかしい……人鬼にこれが致命傷にできるはずはないのだが……。

騎士エディランドの知らされていない、もう一つの人鬼の滅ぼし方は彼が死に際まで抱いていた執着を完全に断つことである。

――首をはねても奴は動くはずだ。

その一瞬、エディランドは手ごたえの確かさにいぶかしみながら刀身を上にはねあげた。

ほとんど、首が切り離された瞬間に、人鬼の口元がようやく動いておぼろげな名前を優しく呼んだ。

「ミハ……イル、よく……生きて……」

鈍い物音とともに、身体がうしろへ倒れた。

首をはねても人鬼は動くはず。

――これは夢だ……。

呆然と、うつろな目のミハイルを見つめているエディランドの背後に、仇魔刀がようやく到着した。すべては遅かった。

怪物がすでに倒されているのを見て、人々は驚愕した。

〝あのサーベルを持つレーテアの騎士がやった！〟、その最中を本人の若い騎士は無言で進んでいく。恐るべき妖魔を倒した勇者を褒めたたえる声があっても、見向きもしなかった。異変に気づいたのは二つ身のエリックだけだ。

「エディラ、何があった!?」

ふりむいた兄弟の顔は、見たこともないほど青くこわばっていた。その胸が焼けただれているような声で、彼は視線をむけずに後方を指さした。

「俺の運命は……ここで終わりだった」
一瞬、肩をつかんだエリックの手がやがて無力に離れた。
「じゃあ……彼だったのか？」
「そうだよ」
人々の囲む中心で、奇妙にひっそりと立っていた赤毛の少年を見て、エリックの頬もスッと青ざめていく。
――新界総督ミハイル・几城。
そうだ……なぜ気がつかなかったのか！　エディラが、あれほどあっさりとラーラの腕輪を渡してしまった相手だ。その生命の危機が一瞬で伝わっていた者だ。
なぜなんだ!?　兄弟が選んだ相手はあまりにも重い名をもっている。
それ以上は何も言わない兄弟の横顔を、見つめていたエリックの表情がしだいに荒々しく変わっていった。
「エディランド……さらってこい！」
「それはできないッ！」
〝できないことがあるものか！〟、肩をつかんで乱暴にゆさぶる手をエディランドは、つきはなして逃げるように歩きだした。
エリックが追いすがる。

「もしもあの子がそうだったら、連れてこい、エディラ！　手伝おう！　力にかけても手に入れるんだッ……そう言っていたじゃないか⁉」

「俺にはできないんだ、エリック……あれはあの子の父親だった！」

低い……だが悲鳴のような声であった。

〝どういう……意味だ？〟、答えのわかりかけていたエリックでさえ、信じる気持ちになれない汚れた秘密だった。

「彼はたぶん幽霊船の術士の手で、堕とされたんだろう……」

魔に支配されてどうしようもなかったのは事実だ。ミハイルでも、笑いながら襲いかかってきたくらいだった。

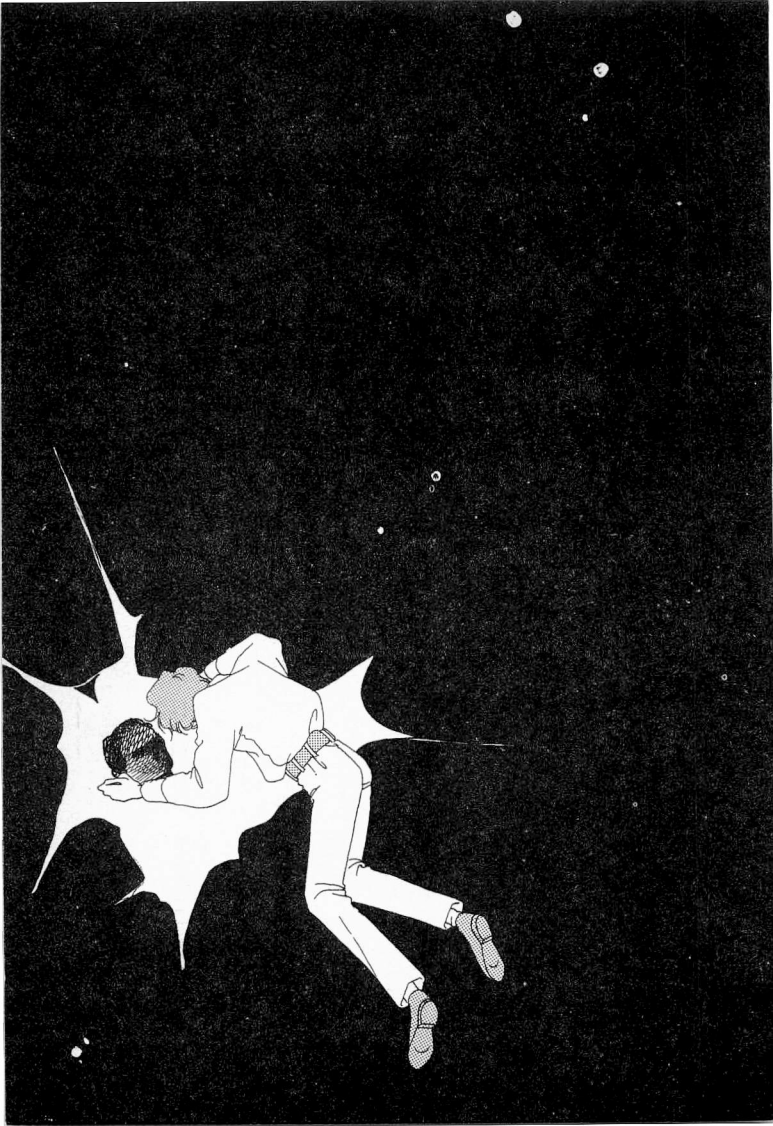
「最後の瞬間まで……あれがそうだとはわからなかった。だから斬った！　ほかに方法は本当になかったッ！」

……死者はふたたび塵に返されて動かなくなった。

ある意味では、それだけのことだった。

「だがたった一人の父親を斬った人間が、どうしてその子のラーラになれる⁉　あの子がどんなに総督を慕っていたか、俺は知っているんだ……ああ、エリック！　もう嫌だ！　この俺は、すべてがここで終わりだったんだよッ」

——いっそあの怪物にやられていればよかったんだ！



遠く、新界の人々の輪の中では、ミハイルがうつろな視線でエディランドが切り落とした首を見つめていた。

ひどくゆがんでいて……醜い狼牙がある。だが必死で探す目には、そこここに懐かしい特徴が見えていた。

「父上……」

かすかなつぶやきは誰にも聞こえなかった。あわただしくケガ人を収容する列の陰で、ミハイルはよろめきながら数歩、邪魔されずに前に進んだ。

――一度、立ちどまってあたりを見回すようなしぐさをしたが、誰にも気づかれなかったようだ。

人鬼の首におおいかぶさるようにして倒れている少年を、人々が見つけたのはそれからしばらくあとのことであった。

父上、おかえりなさいませ。

「……エリック、エディランドはどうしておる?」

「わかりません。あれからずっと瞑想室にこもっております」

長老の問いに、エリックはうつむいて答えた。

もう数日たっているが、そこから一歩もでてこない。半身のような間柄のエリックにさ

え、気配を閉ざしているのははじめてのことだった。
前には、命じられても行かずに逃げ出していたセイラ・テンプルの瞑想の間だったが、エディランドはあの夜以来、そのドアのむこうに閉じこもっている。
「よりにもよって、新界総督とは……」
長老エトルタは深い吐息をついてつぶやいて去っていった。それだけではない秘密を、エリックだけは知っていたが、誰にも言わなかった。
それは、とても口にはできない。〝あれは、あの子の父親だった!!〟
――新界の前総督が、人鬼にされていたなどとは!
エリックにはおそらく、悪魔に襲われても口外することはできなかっただろう。
だが新界の功猿たちは、わずかながらその疑惑を察していた。
――仇魔刀の到着前に、呪力もないレーテアの騎士の手で魔性が滅ぼされていた。
その夜からミハイル・几城はふたたび高熱に倒れて、意識もない。
「あの人鬼の素性はたぶん……」
それだけを言って、功猿は口をかたくつぐんだが、呪術士キュロスが陰惨な表情でうなずいてた。
――なんたることじゃ……。
窓の外には暗雲がひろがり、新界は数日雨が降り続いている。

涼は自分が起きられるようになるとすぐに、ミハイルの枕元に離れずについていた。

「ミハイル……ミハイル……しっかりしろよ」

小声でささやく言葉が、すこしも耳に届かないのがわかっている。

医師たちはそろそろ、危険な昏睡状態だと見はじめていた。

死の足音が近くに聞こえるほど激しい熱のなかで、うなされているミハイルが、時折一つの名前を呼ぶのを涼は知った。

どうしてその名前なのか、涼にはわからなかった。だが……ほかには誰もいなかった深夜の病室で、ほっそりした影がとうとう心を決めて立ちあがっていた。

新界では、本当に人々は羽根くらいではあまり驚かないらしい……港の係員は、小柄な涼の背に透けるような黒い翼があるのを見ても、にっこり笑ってボートを貸しだしてくれた。

……雨の中を、羽根のある黒髪の子がセイラ・テンプルをおとずれたのは、真夜中を過ぎた時刻だった。

「エリック、新界から訪問者だ。その……背中に羽根がある子だぞ」

夜警の騎士がいささか動揺していた以上に、エリックは首をかしげた。

「本当はエディランドに急用があるらしいが、彼はいま瞑想室にいるはずだったろう？」

必死に取り次ぎを頼む間に、新界総督府の名前をだしていたのを聞いて、エリックの顔つきが変わった。

「わかった、とにかく会う」
涼は現れた騎士がエリックかエディランドか、まったくわからなかった。
「あなたは……」
「僕はエリックという。エディランドはいま誰にも会わないだろう」
――それでは困る！　ミハイルは今夜にも危ないかも知れないのだ！
涼が瞳を曇らせて話すのを聞いて、エリックという騎士の顔色がしだいに変化してきた。上着の裾をわしづかみにして力を入れていることに、不安でうろたえた涼は気がつかない。
「エディランドの名前を呼んでいるというのか？」
「そうです。もう何度も何度も……」
ミハイルは、あなたの兄弟の名前を呼び続けているのだ。
「お願いです！　伝えてもらえませんか？　どうしてかわからないけど、どんな助けでもいまは欲しいんです！」
医師はこのまま意識がもどらなければ、見込みはないと言いはじめていた。
「彼がエディラの名前を呼んでいるのか……」
一瞬だけ、涼の目の前でエリックという騎士の瞳が異様なくらい強い底光をもった。
「よろしい、すぐに僕がエディラを連れていくッ……必ず行くから、待っていてほしい！」

1時間後。

新界の几城の屋敷に、二人の騎士が影のように入っていった。

たまたまおとずれていた功猿の口添えがなければ、不可能だったかも知れない。

青ざめた金髪の騎士が、口早に用件と依頼されたことなどを話した。もう一人の騎士は、なぜか静かだった。

「会わせていただければ感謝します」

それだけが、彼の口から出た言葉だった。

結局、医師たちが彼らを病室に通したのは、少年総督の容体がいよいよ急を迫っていることと、レーテアの治療の技だった。

――レーテアの騎士なら、重病の者にあの〝力〟を送ってくれることができるはずだ。

ミハイルはその助けを求めているのかもしれない……。

しかし……涼だけは、繰り返されたうわ言がたった一人の名だったのを知っていた。

一人だけだ。〝エディランド……エディランド〟

重い陰の落ちる病室の扉をあけると、患者はまだ生命を削りそぐ熱に苦しんでいた。

片方の騎士が、予想もしなかった素早さで前にでた。

「エディランド……エディラ……」

思いがけない言葉のように、その騎士の顔が生気をおびた。

私はここだと言いかけた瞬間、それより早く気配を知ったミハイルの瞳がカッと開いた。
「エディランド……殺してやるッ！」
翡翠色の瞳が、目前の騎士を認めるや異様な光を放つ。死の縁にある者とは思えない力で起きると、枕の下にあった——いつのまに手にしていたのか——懐剣を抜きはなって凄まじい勢いで切りつけた。
「父上の仇ッ、殺してやる!!」
医師の一人が〝錯乱された！〟と叫んだようだ。
少年は殺意に燃える目をして切りかかる……制装の騎士の胸から、血しぶきが飛んだ。
「エディランド……かわせ！　何をしている!?」
双子のエリックが大声で叫ぶのだが、彼はなぜか身動き一つせずに、嵐のような殺気の的となっている。
〝死ね！　悪魔!!〟はじめて脇腹に深手を負った時にようやく……ふりむいて、ゆっくりと兄弟に挨拶した。
「エリック、すまないが俺はこいつの思うようになってやりたいよ」
どこかで、こうなるような予感もあったかも知れない。
——それでも、来ただろう。赤毛が呼んでいるのだから……。
「エディラ、よせッ……そんなこと許されると思っているのか!?」

エディランドはただ首をふって、両腕を大きく広げた。
自分は結局この相手のものだった。なによりも償いがしたかったのだ。
「さあ……ミハイル！」
〝その子をとめろ!!〟駆け寄ろうとしたすべての者を、エディランドは強烈な闘気でなぎ倒した。
「さあ、どうした……憎いだろう？　おいで」
怒りにたぎる目をした少年が切りつけると、肩から胸にかけて血が飛び散る。
エディランドは本当にうれしげに微笑した……よくわかるのだ、その気持ちが!!
「さあ、おいで……」
赤毛の少年は苦しげに胸をおさえた。戦えば戦うほど、不思議にも痛みが増す。
胸も、腕も、脇腹も……それでもやめるなど、とんでもなかった！
憎んでも憎みたりないこの相手!!
……気が遠くなりそうな苦痛をねじふせ、もう一度手足に攻撃を命令しようとする。ふらついている身体を支えようとしたエディランドの手のひらに、満身の力を込めて懐剣をつきさした。
――同時に自分の手をおさえて悲鳴をあげたミハイルがいた。
再び、割って入ろうとした者たちに、エディランドははっきりと言う。

「こないでいただきたい、これは彼と私だけの問題なのです……私はもうずいぶん前から、この子のものでした！」

その言葉にミハイルは、顔をあげ……最大の憎悪をこめて叫んでいた。

「嘘つきめ！　それならなぜ僕を……おいていった!?」

アッというエディランドは、くずれるように膝をついていた。

「ミハイル……すまなかった。俺は……」

許しを乞うような瞳を、ミハイルは拒絶した。

「くるな！　お前の約束した言葉はみんな嘘だったじゃないかッ？」

――果てのない海など、どこにもなかった！

不思議な幻のような海を一度、見せつけておいて……悪魔の二幕めがはじまった時には、光は突然なくなってしまった。

最後にたった一人で置きざりにしていったことだけは、どうしても許せない!!

「来るな、お前なんか死んでしまえ！」

こんなに傷だらけになってしまって、自分はもう生きていけそうにもないのに！　ふりかえりもせずにセイラ・テンプルへ帰ってしまった。捜しても、どこにもいなかった！

――あの時……捜したのに!!

「いやだ、ミハイル。俺はもう死にたくはないッ……絶対に生きなければならない！　俺た

ちは！」

二つの腕がふれあった瞬間に、黄金の光が強烈にこの部屋を包んだ。

光はもう、ミハイルの腕からもあふれているのを見て、エリックは息をのんで驚きをかみしめていた。

――この二人はこんなにもよく似ているんだ！

双子の自分よりもミハイルはエディランドに似ていた。強情で、情が深く、哀しいほど無防備に人を愛する……。

騎士エディランドは高らかに笑い声をあげた。

「さあ、もう殺そうとしても殺せないぞ！　そうだろう!?」

いくつもの傷が凄まじいばかりの速さで治っていく……目が眩むほどの光のなかで、ミハイルは自分がべつの生き物になっていくような気持ちを味わっていた。

わかっていた。

――本当は彼こそが、果てのない海だったのだ……。

「約束する。二度とおいてはいかない」

ミハイルは目を閉じたままで、うなずいていた。傷はまだ痛むけれど、もう死にそうな感じはしない。〝つらい思い出のある香港は捨ててしまえ！　新しい故郷をやるから……〟

「美しいレーテアの夏を見せるよ。ラーラから聞いた故郷の光景もみんな話してやるよ」

その風も、その白い花の感触も、お前にはもう自分の記憶のように蘇ってわかるはずだから！

――エディランド、本当に見える……不思議だ。

「これからは俺をラーラと呼ぶんだ」

まったくべつの人間のように落ち着いた目をした騎士は、そう言いながら静かに笑った。

――さて、運命というのは、いったい、いつ決まってしまうのだろうか？

人が間違った希望をいだいてしまうのは、果たしてどこからなのだろう？

……遠い東の空から、雨雲が消えていくのを見た香港の人々は、夜明けが近いのだとそれぞれの胸で明るく感じていた。

楽天的な香港仔たちは、嵐は去ったのだと陽気に言い合う。

しかしながら……誰にも見舞われずに、本島のモルグに横たえられていたはずの、セリオス・ルガの死体が消えた理由は、香港警察にはわからなかったのだ。

――鍵は内側からかかり、ほかには何も触れた形跡はなかった。

そして、ここ新界ではキュロスという名の白髪の術士が……薄暗いその店の中で一人、自分がかつて試みたことのないある術について、こぶしを握りしめて考え続けていた。

その術をなすことは、彼の身の破滅につながる。

――それでも、ついにやらねばならぬ時がきたのかもしれぬな……。

その朝。香港（ホンコン）で、彼だけは近づく運命の足音を恐れた。

ページをめくっていくと、あなたは『あとがき』に出合う

ヘロー、こんにちは、井上ほのかです。
――香港三部作。2巻まできました。
この巻まできてくださった優しい読者さまには感謝！
違うね～、ただの立ち読みだよ～んという方には、ウウッ……ページ曲げたりしちゃだめだよ、お願いしますよ!!

さて、優しいほうの読者さまのなかには、そろそろ気づいた人もいるんじゃないかな！と思うのですが、このストーリーの3冊の表紙は、3冊並べて1枚の絵になるようになっています。
1巻、2巻だけで見ても、もちろんバッチリとイラストになっているのですが、1巻、2巻と続けて並べると、ほらね☆　ジャジャン!!
ちゃんと続くようになっているのが、すごいぞッ！

――これはまさに、担当さまのトミダさまのアイディアです。

三部作だから、表紙どうしようかねーと、話している時に浮かんだそうなのです。

ほのかなどは、はじめに聞いた時に、心では『オイオイ、できるかァ？』などとつぶやいていたのですが、恐れをしらない担当さまは即刻、勇気ある瀬口恵子先生と電話でうちあわせていて、ほのかがウロウロとコーヒーのいっき飲みなどを練習しているうちに、どうする？

――できちゃったよ!!

それも、見たらゼンゼンかっこいいの！　いま……ほのかは、ここだけの話、この二人がすこうしコワイです。ええ。

見た目はけっこう〝乙女〟みたいにつくっているくせに、隠し技が多すぎるよ、二人とも！

めずらしいことでもあったので、原画のカラーコピーをいただいた時には、オッ!!　という感じでうれしかったものです。

――くどいようですが、ちょっとかっこいいでしょう!?　ね!!

しみじみと、作者の役得を感じてしまいました。

YES。3巻めの表紙にあたるイラストも、ほのかはもうすでに見ているわけです。

1巻、2巻と、二人の作中人物が登場しています。
3巻も、やはり二人の人物の組み合わせになっている……と、予言したりしてしまいましょう。ヘッヘッヘ、こういう予言は適中率が高くていいねッ。
この調子でなんでも予言があたれば、ほのかは未来の教科書にも載れるよ……くだらないことを言っている場合ではございません。
はやく3巻めの中身をつくらなければッ……！

原画は現在、関係者三人が静かな緊張とともに狙いあっているとかいう情報もあるとか……フム。
瀬口先生、最大サンキューです☆
いつもお世話をかける編集さまにも、本当にありがとうございます。
（厳しい状況をいつのまにかつくりあげることにかけて、井上はいま、誰よりも自信をもっていますッ……あ痛ッ）
やっと2巻まで、きた、わたし。これからどこへいくの……ウウ、続きものがこれほどしんどいとは……。
そしてなによりも、いつもはげましてくださる読者のみなさまには、心より爆発的ありが

とうを伝えたいです!!
これからも、なんとか、よろしくお願いします!!

井上ほのか

人気爆発の「都市戦記・妖魔アルディーン」シリーズ、香港三部作の第2弾は、いかがでしたか？
ぜひ、感想をお寄せください！

♡ファンレターのあて先♡

〒162-91　東京都牛込郵便局私書箱48号　講談社　文芸図書第四出版部気付「井上ほのか」係

いつもすてきなイラストで大人気の瀬口恵子先生。KCフレンド「幻影学園II」も好評です。
応援のおたよりを、どしどしお寄せください。

♡ファンレターのあて先♡

〒162-91　東京都牛込郵便局私書箱48号　講談社　少女フレンド編集部気付「瀬口恵子」係

井上ほのか(いのうえ・ほのか)
1970年1月5日、東京生まれ。やぎ座、血液型B型。「アイドルは名探偵」で衝撃デビューを飾った。克樹と真名子のわがままコンビが活躍する、この「アイドルは名探偵」シリーズをはじめ、読みごたえ抜群の本格推理「少年探偵セディ・エロル」シリーズも好評です。そして、初のSFアクション「都市戦記・妖魔アルディーン」シリーズにも話題集中！
好きなものは、リバー・フェニックス、ハンコ集め、映画に読書、それからローラースケートと、いちばんはなんたって東山紀之だッ。

講談社X文庫

teen's heart

都市戦記・妖魔アルディーン3
香港魔界行(ホンコンまかいこう)
井上ほのか
●
1993年1月5日　第1刷発行

定価はカバーに表示してあります。

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 編集部 03-5395-3507
販売部 03-5395-3626
製作部 03-5395-3615
本文印刷—豊国印刷株式会社
製本———株式会社堅省堂
カバー印刷—双美印刷株式会社
デザイン—山口　馨
©井上ほのか　1993　Printed in Japan
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。
落丁本・乱丁本は，小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えします。なお，この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第四出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-198728-3　(文4)

⚜今月の新刊⚜

話題の講談社X文庫〈ティーンズハート〉シリーズ

都市戦記・妖魔アルティーン3 香港魔界行（ホンコンまかいこう） 井上ほのか 定価420円
香港を狙う"黒の主"に、涼は対抗できるか!? イラスト／瀬口恵子

恋愛小説のつくりかた 小林深雪 定価390円
少女小説家志望の芽衣ちゃんの恋の行方は? イラスト／牧村久実

凍れる怒濤の海岸でマーメイドのうぶ声が聞こえる ゆうき☆みすず 定価390円
突然やってきた赤ちゃんは……人魚の子供!? イラスト／河内実加

プラネタリウム 花井愛子 定価400円
深夜、未来野の部屋に押しかけてきた男は!? イラスト／さとう智子

女ともだち⑦ 倉橋燿子 定価390円
17歳になったきさ。最後の文化祭の劇に…!? イラスト／荻丸雅子

涙だけの恋なんて… 若林真紀 定価390円
あなたのこと、好きになってはいけないの!? イラスト／村田順子

ヨコハマ指輪物語⑪—朱一族の陰謀— 神崎あおい 定価390円
学園が乗っ取られる!? 美鈴の復讐に一族は…。 イラスト／高橋千鶴

アイドル誘拐プラン㊦—あたしのエイリアン— 津原やすみ 定価390円
千晶発見の手がかりをみつけたホシオだが…。 イラスト／新井葉月

だましたなんて、いわないで 水木マリ 定価390円
政略結婚させられそうなかれんは家出を決意。 イラスト／河村那智

突然のボーイフレンド① 西条せつな 定価390円
麻衣の家に同居することになった男の子は!? イラスト／日下部拓海

定価は税込みです。

——もし、お近くの本屋さんで見つからない場合は、
お店の人にご注文くださいね♡——

〈ティーンズハート〉シリーズは毎月5日発売です。